たった
ひとりの
アポロ13

～ある住宅営業マンの
うつ病体験より～

天見谷行人

忙しい人のための作品紹介

　～うつ病患者自身が書き下ろした初の本格小説～

　青春期の自殺未遂。精神科に通い、心理療法を受けながら、主人公アマミヤユキトは立ち直ってゆく。やがて彼はインテリアコーディネーターの資格を持つ、一流ハウスメーカーの営業マンとなる。彼の職場は８６００万円のお城の様な豪華な展示場。オフィスは都心の一等地。高速道路を見下ろすビルの最上階。
　そんな誰もがうらやむ、一部上場企業で働き始めた、彼を待ち受けていたのは……
　他社との激しい受注競争、社内のパワーハラスメント、客からの無理難題、吹き荒れるリストラの嵐。
　彼はうつ病を発症する。
エリートサラリーマンからの転落。会社を辞め、引きこもり生活を始める。収入はゼロ。車を売った。新聞も携帯もやめた。そして受け取ったのは精神障害者手帳だった。出口の見えないうつ病との闘い。それはたったひとりでアポロ１３に乗り込む事だった。
だが、地球で待っているはずのNASAには誰もいなかった。それがうつ病の現実だった。
　たったひとりで、一体どうやって地球に帰ってくるのか？　あわや孤独死か、という目に遭いながら、それでも彼はうつ病からの帰還を目指す。
　もやはこれはフィクションではない。明日、自分の身に降り掛かるかもしれない無縁社会の闇。そこに光は見えるのか？　自己の再生、それでも人が生きて行く意味を根底から問う。それでも生きる人に捧げる、人生の応援歌。

　星は一つも見えなかった。
　漆黒の夜空は、六月のたっぷりとした湿気をふくんでいた。海岸近くの国道二号線。そこから更に海沿いに枝分かれした道は、通称「浜国」と呼ばれている。この道路の北側にはラブホテルの灯りが並んでみえる。
　僕は国道脇の歩道に立って、夜の海を見つめていた。時折、背後を車のライトが通り過ぎて行く。
　コンクリートの防波堤には、砂浜へ降りて行ける階段がある。デイパックを肩に担いで、僕は階段を下りて行った。風のない夜だった。静かな波打ち際は、砂浜を撫でる様に規則的に波が寄せては返している。
　僕はコンクリート製の階段に腰を下ろした。デイパックのジッパーを開けて、持って来たものを一つ一つ傍らに並べていく。
　大型カッターナイフ。
　アイシングに使うスポーツ用冷却スプレー
　ミネラルウォーターのペットボトル。
　薬局の名前が印刷された白い紙袋。
　僕はまず、薬局でもらった薬を袋から取り出した。
　プレート状にラミネート包装された錠剤をプチプチと押して、左の手のひらに錠剤を載せてゆく。二十個ばかりの白い錠剤が小さな山を作った。それを落さない様に気を付けながら、口にゆっくり近づける。そして僕は一気に口の中へ放り込んだ。口の粘膜にいくつかの錠剤がへばりつく。
　僕はちょっと顔をしかめながら、ミネラルウォーターのボトルを持つ。キャップをひねって、すぼめたままの口につける。
　ごくり、とひと口、ミネラルウォーターを飲んだ。カルキ臭い水道水と違い、鉱物成分を含んだうまい水だと思った。胃の中に薬を全て流し込んでしまうと、もうひと口水を飲んでボトルを脇に置いた。
　次に冷却用スプレーを右手に持った。キャップを開けてみる。スプレーのノズルの頭は、押しやすい様に窪みがついている。僕はスプレー缶を持ち、首の右側めがけてノズルの先端を押した。
　シューッと言う音と共に、あごの脇から首筋にかけて、ジンとした冷たさが心地よく中へ染み込んで行く。首の右側の感覚が無くなる程、丹念にスプレーをかけた。
　ーこれでいいかなー
　頃合いを見計らって、僕はスプレー缶を置いた。右手で、スプレーを吹きかけたあたりを突ついてみる。感覚は鈍っているようだ。
　ーまぁ、これなら痛くはないだろうー
　僕はひと安心して大型カッターナイフを手に取った。
　ベニヤ板なども切る事の出来るカッターナイフだった。黄色いプラスティックのボディに、握

りやすそうな黒いラバーグリップがついている。刃を本体から引き出すために、黒い大型のダイヤルを左回りに緩めた。
　ーギリリ、ギリリー
　左手で黄色い本体を持ち、右手でダイヤル部分を持って、刃を出来るだけ長く前へスライドさせた。その後、ダイヤルを時計回りに回した。
　ーギリリ、ギリリ、ギリー
しっかりと刃は固定された。準備完了だ。長く突き出た一・二ミリ厚の炭素鋼の刃を、感覚のなくなった右の首にあててみた。特に刃が当っているとかいう感覚もない。
　ひと呼吸置いた後、僕はそのまま、えいっ、と首を切ってみた。
　その後で「あっ、しまったなぁ。」と思った。
　頸動脈というのが、首のどの辺りにあるのか調べていなかったのだ。多分このあたりだろうと思って、もう一度首を切ってみた。
　ーおかしいなー
　もっと激しく血が噴き出すと予想していたのだ。冷却スプレーのせいで、あまり痛みは感じない。僕は左手で、右の首の辺りを撫でてみた。右手にはカッターナイフを持ったままだった。
　左手にはヌルッとした感覚があった。確かに切れてはいた。だがヌルヌルした血がわずかに流れるだけで、これでは出血量が足りなかった。
　ーちぇっ、失敗したなぁー
　そう思いながら夜の海を眺めた。相変わらず静かに波が寄せては返している。左に目をやると、緩やかにカーブした海辺の浜国沿いに、街の灯がいくつも見えた。
「綺麗な夜景だな。」と思ったすぐその後、急激に体がふらついて来た。ようやく二十錠ばかりの睡眠薬が効いて来たのだ。意識がすーっと後頭部から空へ抜けて行く。それは一種、不思議な快感でもあった。まるで映画のーシーンの様に、その後、僕の意識は暗闇に包まれた。

　目が覚めたとき、僕はベッドの上に横たわっていた。
　ーここはどこだろうー
　薄目を開けてみる。なんだか、モヤがかかってよく見えないが、他にもいくつかのベッドが並んでいて、全て白いシーツがかけられている。どうやらここは病院らしい。
　窓からは鈍い光が水平に差し込んでいた。どうも朝方のようだ。ベッドから左手を見ると、見慣れた兄の顔があった。
「どないや、目が覚めたか？」
　優しい声だった。僕はウンと頷き、腕を掛け布団から出そうとした。その折に、左腕に点滴の針が差し込まれている事に気がついた。気分は落ち着いていたが、体は鉛の様に重い。兄のそばには、父が丸い椅子に座り、うつむいていた。六月だというのに、布団を被っている僕にも分かる程、病室はひんやりとしていた。
「オヤジ、寒いことないか？」
　僕ゆっくりと力なく話しかけた。父は神経質そうに顔をしかめながら、左右に小さく首を振

った。
「いや、大丈夫や。」
　それだけ言ってしまうと、また目を閉じて下を向き、だらんと両手を前に垂らして手を組んだ。
　僕の意識は徐々にはっきりしてきた。
　どうやってここに運ばれて来たのだろう？
　その記憶は全くなかった。誰かに発見されて、恐らく救急車で運ばれて来たのだろう。僕の救助に関わった人達への感謝の気持ちや、親兄弟への済まない、という気持ちは全く起こらなかった。むしろ、面倒な事になったなぁ、としか思わなかった。そんな事をぼんやり考えていると、ふと体に、ある違和感がある事に気がついた。両足の間に、何か固い棒状のものがあるのだ。僕は右手で自分の股間をそろりと触ってみた。僕は病院から貸し出されたと思われる、前開きの青い病院着を着ていた。パンツは履いていない。股間に差し入れた僕の手には、ふさふさとした自分の毛深い陰毛の感触が、直接伝わって来た。そのまま自分の男性性器に触った。コリッとした固いものに手が触れた。
　ー何だ、これはー
　僕は自分のペニスの先を、そろりと触ってみた。そこには細長いガラスと思われる管が、尿道に差し込まれていた。ガラス管はペニス全てを貫き、僕の膀胱の入り口まで達している事が、触った感触で分かった。
　ペニスに差し込まれたガラス管の反対側には、ゴムチューブが長々と伸びており、掛け布団の左側から下へ伸びている。僕は顔を傾けてその行き先を見た。ゴムチューブの先は、ベッドの下に置かれた溲瓶の丸い口に突っ込まれていた。プラスチック製の半透明な溲瓶には、薄い褐色の液体が半分以上もたっぷりと溜まっていた。
　ーカッコ悪い生き返り方だー
　パンツは脱がされ、おチンチンには管を突っ込まれ、小便垂れ流しの状態で、僕はこの世に舞い戻って来たのだった。そこへ四十代と思われる女性看護士がやって来た。
「アマミヤさん、目覚めたのね。」とさらりとつぶやき、僕の左手首に指を添えた。その指は女性特有の柔らかさを感じさせた。ただその看護士は、僕の好きなタイプの顔立ちではなく、特にセクシーさも感じなかった。脈を測るという医療行為ではあるものの、女性の肌が触れると言う事が、僕に安心感と、少しばかりの快感を与えた。
　女性看護士が僕の手首に指を触れている間、僕は母親の肌に似た感覚を思い出していた。兄や、姉とも歳が離れているせいもあり、僕は両親から子供の頃、特にかわいがられて育った。特に母は僕を好きな様に甘えさせてくれた。アマミヤ家の末っ子である僕は、母親べったりの甘えん坊だった。その母は僕が小学校四年生のとき胃がんで亡くなった。
　母の葬儀の際、僕は葬列の先頭で、黒い帯を掛けた遺影を持たされた。
「アンタが持つんやで。」と叔母が涙声で僕に遺影を持たせたのだ。遺影を抱いた十才の少年は、周囲の同情を引きつけるのに十分な効果を発揮した。
「あの子がかわいそうやわ。」と回りの人々は口々に言い、ハンカチで目元を抑えた。
　僕は葬儀の間、オトナたちが書いたシナリオ通りに、悲劇の主人公を演じるだけでよかった

のだ。僕は下を向き。涙を一粒二粒流してみせた。
　本当の悲しみが訪れたのは、もっと後になってからの事だった。母親が亡くなって数年の後に、僕は母親の声を忘れてしまったのだ。母は歌を唄う様な趣味もなかったし、人前にも積極的に出る人ではなかった。だから母の声を録音した記録物は、何一つなかったのだ。
　僕の中で、もう二度と母親の声が聞こえる事はない。そう思うと僕は悲しくなり、一晩中泣き明かした。
　その喪失感を埋め合わせる様に、僕は姉に甘える様になった。それは姉が割烹料理店に嫁いだ今でも続いていた。時々、ささいな悩み事や困った事があると、僕は姉の嫁いだ店へ顔を出した。
　脈を測り終えた看護士の指が、僕の手首からはなれた。僕はゆっくり小さな声で看護士に話しかけた。
「すいませんが…このガラスの管、外してもらえませんか。」
　僕は力のない薄ら笑いを浮かべた。全く、こんな事態を引き起こしておいて、まだ体裁を取り繕う男なのだ、僕という人間は。なんて情けないダメな奴なんだろう、そう思った。看護士はピシャリと言った。
「まだそのままにしておいてください。」
　彼女はベッド下の溲瓶を新しいものに交換し、同室の他の患者の脈を取り始める。
　白い買い物袋を下げて、病室に姉が入って来た。
「お兄ちゃん、なんでこんな事になったんよ。」
　いきなり兄を問いつめた。
「俺に言われても分かれへんわ。もうユキトとは別に住んでるんやから。」
　と兄は不機嫌そうに言った。今までは父の家に兄夫婦と、僕も一緒に住んでいたが、今では大阪のアパートで、一人暮らしを始めていたのだ。
「お兄ちゃん、また会社変わったんやろ？」と姉が小声で聞く。
「今日、その初日やがな。」
「ああーっ」
　姉は兄を問いつめた事を、少し後悔したようだった。
「大変やね。初日やのに。」
「まあ、しょうがないわ。社長には、よう話しといたから。弟さん大事にしてやれ、そう言うてくれたわ。ええ人や、今度の社長は。」
「そうやっていつも簡単に信じ込むんやから。前の会社でも、今度の会社はええぞ、言うてたやないの。」
　兄は確かにお人好しな面があった。何より転職第一日目に弟が起こしたアクシデントに遭遇し、僕への怒りもあるはずなのに、それを押し殺して、僕の付き添いをしてくれていたのだ。だが、その兄の慈愛に満ちた心を受け止める余裕は、今の僕にはなかった。要するに「余計なお世話」なのだ。
「ユキト。」と姉はベッドのそばに座って声をかけた。
「どないしたの？　何があったの？」

　優しい声だった。僕は静かに答えた。
「もう、どうでもよかったんや。」
　姉は何も言わなかった。ただ、ふたつの目に涙を浮かべた。そうして僕の左手を、自分の両手で握った。姉はその上に顔を埋めて嗚咽した。
「洋一よ。」と父が少し苛立って兄に声をかけた。父は、女が泣くという状況に、自分が居合わせるというのが、我慢ならない様子だった。
「向こうの住所は聞いとるんか？」と父は兄に尋ねた。
「ああ、聞いとるよ。」
「もう手みやげは買うたんか？」
「いやまだや。朝早いし。店まだ開いてへんやろ。」
　父は神経質そうにチッと舌を鳴らした。
「ワシ、今から買うてくるわ。日本茶の詰め合わせでええやろ。ちょっと張り込んどくわ。五千円ぐらいのモンでかまへんやろ。」
「ああ、ええんとちゃうか。」
　父はそそくさと病室から出て行った。
　兄はゆっくりと椅子に座った。姉は少し落ち着いたようだ。
「兄弟三人揃うのは正月ぶりやなぁ。」と兄がのんびりした口調で言う。
「ホンマやね。」
　姉が涙を拭きながら答えた。
「まあ、それでもお父ちゃん、元気そうでよかったわ。今、ご飯どないしてるん？　おかゆ？」
「うん、おかゆでないと食べへんわ。好き嫌い多いから多恵子が困っとるわ。まぁ、去年胃潰瘍で入院して、あれだけ元気やったらオンの字やな。このまま元気でいてくれんとな。これで介護でもせなアカンようになったら、多恵子が大変や。」
　兄は自分の妻にずいぶんと気を遣っていた。ただそれは、自分が所有している女性を、自分以外のために使われたくないというニュアンスを含んでいた。また、気難しい父への対応を一手に引き受けている、自分の妻への負い目も感じているのだろう。
　僕がまだ小学生だった頃のお盆の夜、眠れない父は、近くの寺から流れてくる盆踊りの音がうるさい、静かにさせる様に言ってこい、と母や兄に命じた事がある。わがままで、自分勝手、自分では何もしない。ひとたびこの人が機嫌を損ねると、何を言いだすか分からないところがあった。そんな父の身の回りの世話を、義姉はさほど愚痴もこぼさずに淡々とおこなっている。その忍耐強さと、ある種の鈍さを持った義姉に、僕はすこしばかりの軽蔑と、尊敬の念を同時に持っている。
　そんな義姉に父の世話をさせる事は、本来兄にとっては不本意な事なのだろう。それでも父親の世話をする事は、一家の長が自分であるという自負の、ささやかな証明でもあった。兄が生きて行く上で、唯一こだわりを持っているらしい部分でもあった。
「これユキトに着せてやって。サイズ合うと思うから。」と姉は白い買い物袋を指した。うん、と兄は受け取りながら、

「冴子、『よし幸』の方はうまい事行ってるんか？」と姉の割烹料理店の経営状態を案じた。
「お兄ちゃんに心配される事あらへんわ。今に私がもっと大きい店にしてみせたる。そのうちハワイ進出するでぇ。」
「相変わらずやな。まぁ、お前の話は半分に聞いとくわ。」と兄は笑った。
　尿道からガラス管を外し、午後、僕達は病院を出た。その後からは事後処理が待っていた。僕を海岸で発見してくれた方への、挨拶とお礼だ。父と兄、僕の三人で、車で先方へ向かった。
「えらい息子がアホな事をしでかしまして。」と父が愛想笑いを浮かべ、五千円で買った日本茶の詰め合わせを先方に渡した。僕を発見してくれたのは、二十歳になるかならぬかの男性だった。お茶のセットと、その若い男性とは、妙に不釣り合いに見えた。
　帰り道は渋滞がなかった事もあり、車はスムースに進んだ。車の中では父は珍しく上機嫌だった。
「どないやった。あれ見栄え良かったやろ。」と、兄にギフトセットの目利きの成果を自慢したり、ラジオから流れてくる人気コメンテーターの話に、兄と共に笑ったりしていた。二人が僕の心の中に不必要に入り込んでこない事が、逆にとてもありがたかった。感受性の鈍い人達の中で暮らして行くことが、今の自分にとって、何より心の傷口を癒すのに都合が良いと思えた。こうして、僕の二回目の自殺未遂は失敗に終わった。
　後日、姉は僕を有名大学病院の精神科へ連れて行った。外来病棟の三階、産婦人科の隣に精神科はあった。姉と共に長椅子に座って順番をを待つ。どの人が精神科の患者なのか外観からは全く分からない。二、三人の男女が待合室で静かに待っている。僕の名前が呼ばれたので、診察室に入った。僕は少しぎょっとした。そこには三人の白衣を着た男たちがいたのだ。
　疲れた様な表情のドクターは、僕の方を見ずにパソコンばかりいじっている。その後ろに二人のインターンが前のめりになり、真剣な表情でノートを広げている。二人は患者である僕の、どんな些細な挙動も見逃さないぞ、とでも言う様に僕をじっと見つめていた。「…さて、どうされました…。」
　相変わらずドクターはパソコン画面を見ている。
「ダメだ、こりゃ。」
　僕はすぐにそう思った。まともに話を聞く様な人間ではないなと判断した。こんな人にくどくど、こちらの心情を説明しても、自分が惨めになるだけだ。
「あのう、睡眠薬をがぶ飲みしまして、自殺未遂したんです。」
　するとドクターは「睡眠薬ねぇ。」とさも可笑しそうに苦笑した。その笑いは完全に僕を馬鹿にした様に見えた。パソコンをいじっていたドクターは、何度か同じキーを叩いた。ちょっと首を傾げる。突然、奥の事務室に向かって人を呼んだ。
「ちょっと、〇〇サーン、これどうやって直すのー？」
　一連の精神科医の行動は、僕の神経をひどく傷つけた。僕はもう二度と医者など行くものか、とさえ思った。大学病院はサッサと辞めにした。姉はその後も僕を心配し、なだめながら違う医者の所へ連れて行った。一度は脳波の検査という奴をやった。頭に電極を付けて脳に異常がないかを調べるのだ。
「だいたい、神経症の場合、あんまり異常は出ないんですよ。」と検査技師はにこやかに話して

いた。結果のグラフを見た医師は、
「綺麗な脳波ですねぇ。」
　と感心した様に言った。ただ、どの医師も自殺未遂二回という言葉を聞くと態度が変わった。自分の所でトラブルを抱えたくないのだろう。ある医師が言うには
「あなたの症状に一番適した先生を紹介します。そこへ行くのが一番良いでしょう。くれぐれも、変な宗教だけは入ったりしてはダメですよ。」と紹介状を書いてくれた。
　僕はその紹介状を持って、県下一の精神科の権威、と呼ばれている教授の下を訪ねた。そこはある大企業が経営する病院だった。その中にあるのは精神科ではなく心療内科だった。精神医学会の重鎮でもある老教授は、そこの顧問をしていた。
　診察日、ゆったりとした足取りで廊下を歩く白衣の老人がいた。心療内科の診察室へ入る、その老人を見つけた患者たちは、皆立って一礼をするのだった。患者もほとんどが老人で、若者は僕一人だけだった。僕を診察したその老教授は、僕の今までの行動や悩みを聞き、ただひと言だけ言った。
「あなたの様な症状はクスリで治すんです。」
　そう言うと、朝、昼、晩、必ず飲む様にと言って薬を処方した。その薬を言われた通り毎食後、二錠ずつ飲んでみた。すると、今までイライラしていた気分や、思考そのものをグルグル動かすモーターの回転速度が、明らかにゆっくりになって行くのが分かった。今まで、これもしなければ、あれもしなければと考え、それでいて何も出来ない自分にイライラばかりしていたが、この薬を飲むと、
「まぁ、それでもいいか……。」という気分になってくるのだった。
　それでも頭の中はまだ、もやもやと混乱していて、一体、自分が何について悩んでいるのか、それ自体よく分からず悩んでいる、という状態だった。これを解きほぐす事は、薬では無理だと自分で思った。ぐちゃぐちゃに絡まった心の糸、それを丹念に一本一本解きほぐす様な作業、それが必要だと思った。かつての高校や大学の友人たちに、自分が今、心療内科に通院している事は話していなかった。また、父と兄は相談の対象外と思われた。唯一姉だけが、若干僕に対して理解しようと努めてくれている様に思えた。僕は何かこのまま、薬を飲み続けるだけでは、もの足りないものを感じていた。試しに電話帳をめくって見ると、心理カウンセリングと言う欄があった。
　どもり、赤面症治します、というものや、催眠療法などと言う、なんだかいかがわしさを感じるものが多い。そのなかで、日本心理臨床学会会員と謳っているカウンセリング室があった。これならば多少は信用出来そうだと、電話で予約を取り、訪ねてみることにした。
　一階がラーメン屋になっている、小さな雑居ビルの二階、そこがカウンセリング室だった。二階へ上る途中に、中学生らしい男の子と母親が、深刻そうな顔をして立ちすくんでいた。カウンセラーは五十がらみの、胆の座った感じのする、姉御肌のおばさんだった。
僕は今までの事をなるべく順序立てて話をした。大学を卒業して、出版社でライターとして活動していたこと。うまく文章が書けず、やけっぱちになったこと。告白も出来ずにいた女性への想い。
　僕が、ぽつり、ぽつり、としか話をしないのを全く気にせず、カウンセラーは実にうまい合の

手を入れた。そのせいで、ずいぶんと話がしやすかった。日本心理臨床学会会員でユング派の流れを汲む、このカウンセラーは、箱庭を作ってみてくれ、と僕に言った。
　部屋の脇には、学校の教室で使う机ぐらいの大きさの木の箱があった。ほぼ正方形に近く、天板はついていない、トレー状のものである。箱の深さは浅い。十センチあるかないかである。箱には半分程度の高さまで砂が入れられている。
　部屋の壁には背の高い、大きな棚がふたつあった。十段程に区切られている。その棚には、びっしりと人形などのミニチュアが置いてある。小さな子供が砂遊びに使うような、おもちゃだ。人形に始まり、キャラクター、おもちゃの家、各種の乗り物、鉄道、車、飛行機などなど。教会もある。プラスチックで出来た木や森、他にもビー玉やクリスマスの飾り付けに使うような、キラキラしたモール、ツリーのてっぺんに飾る星なんかもある。
　僕はその箱の前に立って、右手で砂をちょっと撫でてみた。砂は割とさらりとしていた。砂を両手でのけてみると、箱の底が見えた。青く塗られた底板が現れる。ここを川や池に見立てる訳である。僕はただ、砂をさらさらといじり、小さな池を作り、家をひとつ、人形をひとつ、それに木を一つ置いてみた。他に何を置くか、長く考えた。別に何を作ろうという意欲も沸かない。ただ、何か作らなければとは思ったけれど、何も思いつかない。
「もう出来た？　これでいい？」とカウンセラーは聞いた。はいと答える。
「う～ん、ちょっと淋しいかな。」とカウンセラーは言って、写真に収めた。
「この箱庭がね、随分、治療効果があるのよ。」と話した。
　心理カウンセリングは二週間に一度だった。最初の二ヶ月程は、箱庭を作る意欲もあまり沸かなかった。三ヶ月過ぎたあたりから、不思議な事に僕は、その砂遊びにしか見えない行為が、徐々に自分にとってなにか大切な時間の様に思えてきた。
　僕は時には高く険しい崖っぷちを作る事もあったし、まるで抽象絵画の様に矢印ばかり並べた時もあった。カウンセラーは毎回写真を撮り、記録に残していった。
　やがて僕は二週間に一回の箱庭作りが待ち遠しくなってしまった。そんな自分の心境に驚いた。だが、他に生きている価値をどこにも見いだせない自分は、また次に箱庭を作るために二週間の間だけ、生きようとおもった。無味乾燥に思える今の生活で、唯一自分が何かをなし得たこと。そして自分がまぎれもなく生きていた事を証明するもの、それが箱庭だった。
　僕は静かな気持ちでただひたすら箱庭と向きあった。四季の移ろいを箱庭で表現する事もあった。カウンセラーとの二人三脚で丹念に心の糸を解きほぐす作業がその後何年も続いたのだ。
　神経症がやや回復し、いくつかのアルバイトもやってみた。多少は社会生活というものに順応し、友人のツテで、名古屋にある鉄鋼関連の会社に就職した頃には、すでに僕は三十代に踏み込んでいた。

第二部　家を売る　１　新しい職場

　僕はそのビルの最上階、窓際に立って高速道路を下に見下ろしていた。ここからは大都会のオフィスビル群が一望できた。
　今日から僕はこの瀟洒なオフィスの住人なのだ。
「ざまぁみろ。」
　ふと、そうつぶやいた。
　今や一部上場企業の社員となったのだ。
　高層オフィスビルが建ち並んでいる名古屋市の中心地。その一角にＫ火災保険ビルはある。十二階建てビルの最上階ワンフロアすべて。そこが大日本建材住宅事業本部の名古屋支店である。大日本建材は老舗の建材メーカーである。従業員数はグループ会社を含め三〇〇〇名を超える。その本社直轄の住宅事業本部名古屋支店勤務のご身分となったのだ。
　つい一ヶ月前までは、頭にはヘルメットをかぶり、服は油のしみ込んだ作業着、足には車に踏まれても大丈夫な、クソ重い安全靴を履いていた。両手にはめた軍手には、いつも真っ黒に汚れたグリースがこびりついていた。僕は鉄鋼関連の設備補修を専門にやっている会社の営業マンとして、客先である製鋼所の中をゴキブリのように這いずり回っていた。いつかはこんなところ、抜け出してやろうと思っていた。友人が資格試験に挑戦するのをきっかけに、僕も以前から興味のあったインテリアコーディネーターの資格をとった。そこで思い切って住宅業界に飛び込んだのだった。
　今や、僕はかつての薄汚れた作業着姿の営業マンではない。ダブルのダークスーツに身を包み、エンジのネクタイを締めている。クリーニングしたばかりのストライプシャツは襟の部分に糊が効きすぎて固いぐらいだ。
　出来すぎている。そう思えた。
「ガチャッ」
　僕の回想を遮るように、後ろでドアの音がした。振り返ると、石橋要総務部長が、分厚い黒ぶちのメガネを、ずり落ちないように直しながら、会議室から出てきた。
「アマミヤ君待たせたね。」
　そう言うと石橋部長は、僕に商談室へ行くように促した。
　商談室はオフィスの外にある。ここはパーティションで区切られた応接スペースが三ヵ所ある。出入りの工務店や、エクステリア担当の外構業者、外部委託の設計士などが、ここで打ち合わせや商談を行うのである。
　彼らは外部の人達だ。そのため磨りガラスのドアの中にあるオフィスには、一歩たりとも入れなかった。このオフィスに自由に出入り出来るのは、あくまで社員の特権なのだ。
初めて面接に来た時は、ぜったいにあの磨りガラスの向こうの世界に入ってやると、固く心に誓っていた。それが今、実現しているのだ。僕はその喜びをかみしめながら総務部長の話を聞いていた。
　まずは契約社員として一年間働いてもらうこと、その間に四棟の受注をすること、それが正社員になるための条件だった。給与面では申し分なかった。前職の給与以上を出すという事だった

。更に受注した棟数に応じて、ボーナスに報奨金が上乗せされる。
「僕はこの業界初めてなので、なにぶんご指導よろしくお願いします。」
　僕はぺこりと頭を下げた。
「中途入社の場合ね、教育はＯＪＴでやりますのでね。アマミヤ君は名東展示場配属となります。店長の風見君に付いて仕事を覚えてくださいね。さあて。」
　そう言って石橋部長は立ち上がった。またずり落ちそうなメガネを直す。
「それじゃ、さっそくですが、名東展示場に行ってもらいましょうか。風見君には僕の方から連絡しておくから。」
　大日本建材住宅事業本部名古屋支店は、名古屋市のなかにある三カ所の住宅展示場に、モデルハウスを出展していた。
　そのうちのひとつに、今、僕の配属先が決まったのだ。
　オフィスを出て一階に下りた。四車線道路を横断して、高速道路下の有料駐車場に向かう。そこに止めてあったマイカーに乗った。この会社では、住宅営業マンはマイカー持ち込みとなっていた。それも４ドアセダンと会社から決められていた。時には客を後部座席に乗せて、建築現場の見学会や、イベントの送り迎えに使う事もあるということだった。
　もっとも、ガソリン代や、この都会の一等地の駐車場代も、幾ら使っても会社が払ってくれる。結構なご身分になったものだ。
　鼻歌まじりに僕はエンジンをスタートさせ、愛車を名東展示場に向かって走らせた。

　僕が向かっている住宅展示場は、名古屋市の東側、愛知郡にある。東名高速名古屋インターチェンジを降りると、東西に伸びる幹線道路が通っている。それを東へ向け五分も走ると、左手に展示会場が見えてくる。
「ＴＢＣ名古屋東ハウジングセンター」と書かれたゲートの下をくぐると、広大な駐車場がある。おそらく百台は楽に置けるだろう。僕はクルマをモデルハウスに近い、駐車スペースに止めた。外に出て、空を見上げた。抜けるように青く高い秋の空だった。飛行機雲がその空を区切るように、東から西へ伸びている。
　ハウジングセンターの入り口近くには、大きなログハウス風の管理事務所があった。その前に、この展示会場の案内板が建っている。この会場には十九のハウスメーカーが二十一棟のモデルハウスを出展している。僕はその案内板のなかから「ダイニッケンホーム」を探した。なんのことはない、管理事務所のすぐ向かいの北側である。僕はこれから自分の職場となる、モデルハウスに向かって歩いていった。すぐに立ち止まってそのモデルハウスを見上げた。
「なんだこれは？」
　僕はしばらくあっけにとられて、ただそのモデルハウスを呆然と見つめた。
　目の前に現れたのは、まるで中世ヨーロッパのお城のようだった。一体誰がこんな贅沢な家に住むんだ？　とおもった。着飾った貴婦人が、執事に見送られて玄関から出てくる様な邸宅だった。見る人を寄せ付けない様な格調の高さを感じさせる。茶褐色のタイルがふんだんに使われ、建物全てを覆い尽くしていた。ひとつひとつのタイルは、石を割った様な複雑な形をしており

、なおかつ微妙な色むらが、深く上品な陰影を作っていた。モデルハウスは、一階部分の面積がそのまま立ち上がった総三階建てである。屋根は、寄せ棟を三つ組み合わせた堂々たる姿をしていた。三階部分は、急勾配の屋根を利用した小屋裏部屋となっている。その屋根からは、洋館風のドーマーウィンドウが、威圧的に二つ突き出ている。何より目立つのは、モデルハウス正面右側に筒状のドームが大きく手前に張り出していることだ。円筒状のドームは二階まで続いていて、天井部分は二階のバルコニーとなっていた。ドームの一階部分は縦長の掃き出し窓が、半円形の外周に沿って六面ついている。オーガンジーのカーテン越しに中の様子が見える。アンティーク調の丸テーブルと椅子が二脚、ドームの床中央に置かれている。どちらの脚の部分も優雅に湾曲していた。資格試験の時に覚えた、カブリオールレッグという呼び名を思い出した。おそらくインテリアもこの外観にあわせて、シックなイギリスの邸宅風にしつらえてあるのだろうと思った。

　本当にこれから自分が、このモデルハウスで仕事をしていいのだろうかと思った。何か出来すぎていて、夢でも見ているかのようだ。他のメーカーのモデルハウスなど、これに比べたら、ただのマッチ箱を組み合わせたもにしか見えなかった。僕は恐る恐る正面玄関に近づいた。玄関の両開きドアは閉まっていた。多分、平日だからだろう。玄関ドアは重厚な無垢材で出来ており、贅をこらしたレリーフが施されている。黄金色をした真鍮製の把手を手前に引き寄せる。ドアの重みがずしりと手に伝わってきた。ごくりと唾を飲み込んで思い切って中に入ってみた。玄関ホールの床は大理石で出来ていた。見上げると二階まで吹き抜けになっている。何ともだだっ広い空間だ。この玄関ホールだけでもマンションのリビングの広さぐらいはありそうだった。二階の天井から下がっている照明は、青銅色のお皿の周りに、何本もろうそくを立てた様な形をしている。今、灯りはついていない。

「失礼しまーす。」

　僕はがらーんとした空間に向かって呼びかけた。やがて一階の奥の方から、誰かがパタパタとスリッパの音をさせながら、玄関の方に近づいてくるのが分かった。

「いらっしゃいませ。」

　そう言って現れたのは、小柄で丸顔の五十代とおぼしき女性だった。

「あのう、今日からお世話になります、アマミヤ　ユキトと申します。よろしくお願いします。」

「ああ、あなたがアマミヤさんね。石橋部長から聞いてます。今、二階に店長いますから、どうぞ。」

「あの、お名前は？」

「私？　不動公子といいます。よろしくね。」そう言って、人懐っこい、丸い笑顔で微笑んだ。無邪気な子犬を思わせる笑顔が、僕をリラックスさせた。

「すごいモデルハウスですねぇ。」

　不動さんは、階段下の扉の中から、フローリングを掃除するモップを取り出しながら、

「初めての人はびっくりするわよね。こんなの建てられる訳ないんだけどね。あなた、ここのお値段聞きました？」

「いいえ。ちなみにおいくらなんですか？」

「八千六百万円よ」
「はぁ……。」
「材料費だけでね。」
　僕は気が遠くなりそうだった。二ＤＫ、家賃五万六千円のアパートに住むものにとっては、どう考えたって場違いなところへ来た感じがした。不動さんはモップを持ったまま、先に階段を上っていく。床から腰壁の無垢材らしきパネル、そして階段にいたるまで、落ち着いたダークな色調で統一されている。しかし、窓から差し込んでくる光が白い壁紙に反射し、モデルハウスの中はとても明るく感じた。二階に上がると、階段の周りが全てひとつのホールのようになっていた。ここも窓からの光で溢れている。そのホールを不動さんはとことこ、北東側の角部屋に向かった。ドアにはスタッフルームと言うプレートが張られている。不動さんはノックもしないで、いきなりドアノブをガチャリとひねり、ドアを開けた。
「店長、アマミヤさん来られましたよ。」
　僕を振り返って、まるっこい手でひらひら手招きした。僕はその部屋に入り、ぺこりとお辞儀した。
「今日からお世話になります。アマミヤ　ユキトです。よろしくお願い致します。」
　北側の一番奥まった席で、タバコをさかんにふかしていた男性が、灰皿でタバコの火をもみ消した。紺のスーツに、無地の紺のネクタイを締めていた。体全体は、太ってはいないが、どことなく締まりのない感じだった。メガネをかけ髪はぺたりと七三に分けている。典型的な銀行員に見えた。男性は座ったまま、上体を僕の方に向けた。そして目だけを上げて、僕をドロリとみつめた。死んだサバの様に、メガネの奥の目には表情がなかった。
「店長の風見ですゥ。まぁ、立っとらんで、そこ座って。」
　店長はどうでもよさそうに、人差し指をブラブラさせて隣の席を指差した。僕はおもむろにカバンを膝の上に置き、かしこまって座った。店長の右側の席には、巨漢の男性が、さっきから書類に何か書き込んでいる。
「店長、カタログが残り少なくなってますよ。」
　不動さんが棚を整理しながら声をかけた。
「ああ、もう、足らんかぁー。不動さん、支店へ頼んどいて。」
　風見店長は、もう一本ショートホープに火をつけて大きく吸い込んだ。フゥーッと大きく煙を吐き出す。次の瞬間には、その間を惜しむように、再び大きく煙を吸い込む。その動作を二回繰り返した。目は相変わらずサバの目で、表情はない。目の前の紙ファイルで綴じた書類の束を、バタンと畳みながら、店長は僕に初めて質問した。
「前はどこにおったんや？」
「ハァ、鉄鋼関連のメンテナンスの会社です。」
「ん？　」
「トーヨーメンテナンス工業株式会社、略してトーメンと言う会社に五年間おりました。」
　店長は相変わらず表情のないドロンとしたサバの様な目をこちらに向けている。
「君、ハウスメーカーの経験はないのか？」
「はい、ここが初めてですね。」

　店長は急いでタバコの煙を吸い込むみ、フゥーッと素早く吐き出した。すぐに灰皿でもみ消す。少しイライラした様子だった。そばにあった、使い込まれた黒い革のカバンを取り上げた。目の前にあったファイルを詰め込んだ。カバンにはすでに他のファイルも入っていて、パンパンにふくれあがっていた。店長の表情には、少し怒りの表情さえ浮かんでいた。
「なんやぁー、君、経験ないのかぁー。」
　そう言って風見店長は、カバンを右手に持って立ち上がった。左手で分厚いカタログを、僕の前に放り投げるようにして差し出した。大日本建材の建築材料を載せた総合カタログだった。
「それでも見て、勉強しとけや。」
　それだけ言うと、急いで部屋から出て行ってしまった。不動さんは風見店長が出て行った後、キッチンの換気扇のヒモをひっぱった。
「まぁ、いつも、あんな感じだからね。」
と、僕を慰めるように言った。
　店長の右側の席に座っていた男性は、書類を書き終えたようだった。改めてその体を見ると、巨漢としか言いようがなかった。店長と僕とのやり取りには、全く関心がなさそうだった。僕の方には目もくれないで、机の上の受話器を取り上げる。太く短い指で、プッシュホンのボタンをちょん、ちょん、と突ついていく。その仕草は何か、おとぎ話の住人が、間違って現実世界に現れたように見えた。頭には髪の毛が一本もない。見事にツルツルだ。受話器を握ったまま、おとぎ話の住人は、地響きがする様な、とてつもないダミ声で話し始めた。一言一言、区切るようにゆっくり喋った。
「もしもしぃー？　軽部でございマス。奥サマ、お元気ぃー？　四ツ葉ハウスなんか、行っちゃダメよー。」
　この人は自分の体を、ドラのようにして響かせている感じだった。声は部屋中に響いているのだが、決して不快ではなく、むしろユーモラスであり、上質なエンターテイメントを見ているようだった。客と少し話をして、軽部さんは電話を切った。
「小腹が空いたなぁ、不動さん、何かある？」
「クッキーならまだありますよ。」
　不動さんはお盆の上にカップを三つ並べて、紅茶のティーバッグを入れ、湯を注ぎ始める。僕は改めて軽部さんに挨拶した。軽部さんは、クッキーを口に入れ、不動さんから渡された紅茶を一口飲む。カップをゆっくりと机の上において、僕の方を初めて見た。
「オメェさん、何しにきたんだ。前の業界におればいいのによぉ。」
　そう言って僕の目をじっと見つめた。それはおとぎ話の住人の目ではなかった。明らかに勝負の世界を生き抜いてきた、と思われる厳しい目だった。僕はその目をじっと見つめ返した。これから僕は、この世界で生きていこうとしているのだ。やがて軽部さんは、紅茶をゆっくり飲み終えると立ち上がった。
「風見君なんかアテにしたって、ラチあかんぞ。」とだけ言い残して部屋を出て行った。
　ダイニッケンホーム名東展示場モデルハウスには、僕の他に三人の営業マンがいた。その内一人は、僕より一週間先に入社した新人営業だった。それに風見店長と嘱託社員の軽部さん、アシ

スタントの不動さんの七人でモデルハウスは運営されていた。モデルハウスの偉容に驚いたのも束の間、すぐに週末を迎える事になった。
　土曜日の朝には、同僚の営業マンたちと展示場外の植栽にホースで水をかける。それが終わると、延べ床面積百坪のモデルハウス内を掃除する。朝は、店長も軽部さんもいなかった。両開きの玄関ドアを大きく開け、来場者への手みやげ用花の苗を、玄関脇に置いて準備完了だ。いったん二階のスタッフルームに引き揚げる。先輩営業マン達はリラックスした様子だった。野呂さんはイチローのバットスウィングの真似をしている。同じく先輩の中地さんは、細身の体をダブルのスーツに包んで椅子に座り、コーヒーを飲んでいる。
　その二人と対照的に、僕ともう一人の新人、徳光君の表情は緊張で硬かった。長身の徳光君は椅子に座って、繰り返しアンケートを眺めていた。彼の実家は工務店を営んでいるとの事だった。
「それって、先週取ったアンケートですか？」と僕は尋ねた。
　住宅展示場に客が入ると、まずアンケートに記入してもらう事になっていた。住所と氏名に電話番号、建築予定はいつ頃か？、予算は？何人家族か？などと言った質問項目がある。僕の当面の目標は、まずこのアンケートをたくさん集める事だった。
「ハイ、三枚取れました。」と、徳光君は微笑んだ。黒ブチのメガネをかけて頬骨の出た長い顔は、どこか東北の農家の長男を思わせた。柔道でもやっていそうな、骨太ながっしりした体つきだ。それに比べてあまりにも声が優しく繊細だった。
「土日はお客様、結構来ますよ。アマミヤさんも、がんばってくださいね。」
「ありがとうございます。お互いがんばりましょう。」
　僕はそう言って彼と握手した。
　風見店長は、カタログを見ておけと言ったきりで、僕に何かを指導しようと言うそぶりすら見せなかった。金曜日の夕方、店長は僕に向かって言った。
「アンケート取れや。」
　指示らしいものはそれ一言だった。いきなり接客である。何をどうしていいのか、さっぱり分からなかった。
　スタッフルームには一台の白黒テレビが設置されていた。そこには玄関から入ってくる客の様子を、モニター出来るようになっていた。玄関口にはセンサーがあり、人が通るとチャイムも鳴る。
　午前十時を少し過ぎた頃、その日最初のチャイムが鳴った。
　ーピンポーンー
　モニターに客の姿が映った。まだ若い夫婦が、ベビーカーに載せた子供を、抱きかかえようとしているのが映っていた。
「行ってきます。」
　意を決したように徳光君が立ち上がった。接客する順番は決まっていた。朝、モデルハウスに出勤した順である。徳光君は今日一番乗りだった。僕も早めに着いたつもりだったが二番目だった。
　やがて二回目のチャイムが鳴った。モニターを見ると中年の夫婦二人連れだった。僕はネクタ

イに手をやり、きつく締め直した。
「じゃ、行ってきます。」
　宣言するかのように野呂さんに言った。野呂さんも大きな声で
「ハイ、いってらっしゃい。」と僕を送り出してくれた。一階のリビングに降りていくと、和室の方からボソボソと、徳光君と客の会話が聞こえた。リビングの方に向かうと、すでに中年夫婦の奥さんが、キョロキョロと室内を見廻している。ダンナの方は、奥さんと離れて、リビング内の暖炉を覗き込んでいた。僕は近くの奥さんの方に声をかけた。
「いらっしゃいませ、ごゆっくりご覧ください。」
「アラ、まぁ、ステキな家具よねぇ。これ、お高いんでしょ？」
　置いてある家具の値段なんか全く分からなかった。とにかくアンケートに記入してもらう事だ。
「はい、まぁ、それなりですね。アンケートは、ご記入頂けましたでしょうか？」
「ああ、主人が書きますから。」
　そう言って奥さんの方は、さっさとキッチンに向かってしまう。僕はダンナの方を見た。暖炉のそばに飾ってある、アンティークの蓄音機を興味深そうに眺めていた。
「ご主人、恐れ入りますが、アンケートのご記入、よろしくお願いします。」
「この蓄音機いいねぇー、どこで買えるのかねぇ。」とニヤニヤ笑っている。奥さんの方は、どうやらＬ型キッチンの方にいるらしい。ダンナの方は僕のアンケートを受け取ると、暖炉のそばで立ったまま住所と名前をボールペンで書き込んだ。アンケートの質問内容に、ちょっと首をかしげる様に考えていたが
「まぁ、今日は見に来ただけだから。」と質問事項には一切記入しなかった。
「ありがとうございます。」
　僕はアンケート用紙とボールペンを回収する。結局、この中年夫婦は常に別行動を取り、ダンナの方は何を話しかけても、へらへら笑っているだけだった。まともに会話らしい会話がないまま、二人は粗品の苗木を受け取って、モデルハウスを出て行った。スタッフルームに戻ると風見店長が座って煙草を吹かしていた。
「どうや？アンケート取れたか？」
「はい、取れました。」
「うむ、今晩行ってこいや。」
　それだけ言うとまた、タバコをスパスパ吹かした。アンケートに書かれた住所は名古屋市名東区となっていた。僕は棚から名東区の住宅地図を取り出して広げた。住宅地図には一軒一軒の家の番地と、家主の名前がびっしり記入されている。団地の場合には、巻末に載っている一覧表を見れば、何号棟の何号室には誰が住んでいるのかも分かった。注意深く地図を見ていくと、アンケートに記入された番地と名前が見つかった。一軒家だった。
「名東区ですか。いい客じゃないですか。」と、中地さんが住宅地図を覗き込んだ。
「夜の訪問って、何を持っていけばいいですかね？」と、僕は中地さんに聞いた。中地さんは丁寧に教えてくれた。一言メッセージカードがあるので、ご来場のお礼を書いて、専用封筒に入れて持っていくこと。準備しておくカタログの種類、設計プラン依頼用紙、施行実例の写真集など

を持っていった方がよいとの事だった。その間も風見店長は、全く僕に関心を示そうとはしなかった。この人は、自分が部下を抱えているという意識もない様子だった。もちろん、指導をしていこうという姿勢は全く見られない。
　野呂さんが僕に声をかけた。
「アマミヤさん、週報用紙、貰ってます？」
「いえ、まだ貰ってないですけど。」
「店長ダメですよぉ、ちゃんと教えてあげないと。」
　風見店長は、また、例のドロンとした目を野呂さんの方に少しだけ向けた。
「ああ、そうやな。」
　それだけ言うと、また、書類の束に向き直り、せっせと何か書き込んでいる。野呂さんは棚から週報用紙を取り出して、僕に一枚くれた。それは碁盤の目の様なＡ四版の用紙だった。左端の枠には、上から接客数、アンケート数、着座面談数、などという各項目がずらりと並んでいた。左下の方には設計プラン提出、見積もり提出、クロージング、申し込み、そして最後に「契約」と書かれてある。横軸の一番上の欄は曜日が書かれていて、右端にはそれぞれの項目の、一週間の合計数を記入する欄があった。この表で、営業マンが一週間、どのような営業活動をしたのかが、一目で分かるのである。今の僕の状況ならば、接客１、アンケート１、着座面談０である。この日の僕は三回接客する機会があったが、結局アンケートが取れたのは最初の客だけだった。
　夜になった。この日、軽部さんは、結局姿を現さなかった。中地さんは、早々と夕方には客先へ向かった。野呂さんは、午後七時頃に出かけていった。
「アマミヤ君、行かんのか？」風見店長は、僕をちらりと見ていった。僕は多少緊張していた。今朝の中年夫婦の家に、初めての夜間訪問をするのである。今まで営業経験というものはあるが、それは会社相手だった。前任者から引き継いだ部署を、挨拶回りして顔さえ出しておけばリピートオーダーがあり、売り上げは上がっていった。だが、住宅営業の相手は個人である。家は人生最大の買い物である。一般の人にとって、一生のうち家を建てるチャンスは、一回あるかないかだろう。
それを初対面の営業と客が商談するのだ。断られたらそれで終わりだ、と思った。何を言って話をつなげたらいいのだろう？　今、どんな家に住んでいて、どんな表情で僕と対面するのだろう？　モデルハウスの中での接客と違い、明らかに敵地に乗り込むという感覚だった。
　まずい事に自分が方向音痴であった事も不安だった。住宅地図のコピーは持っていても、暗い夜に狙った客の家に、ピンポイントでたどり着くのさえ困難な事だと思った。風見店長は立ち上がって自分も出かけようとしていた。
「まぁ、行ってこいや。」
　何をどういう風に話してこいとも言わなかった。
「じゃ、今から行ってきます。」と、徳光君の方を見た。彼も僕同様、明らかに緊張していた。口を一文字に結び、顔をこわばらせている。彼も今日、一枚アンケートを取っていた。
「徳光君も行けよ。」と風見店長は出入り口に向かいながら声をかけた。

「ハイ。」とだけ返事をして徳光君も立ち上がった。僕はカバンを持ってモデルハウスの外に出た。駐車場に向かいながら空を見上げた。静かに晴れた満天の星空だった。これからが仕事の本番だ、と気合いを入れ直してクルマに乗り込んだ。
　名東区は名古屋市でも、千種区と並んで比較的富裕層が多いとされる地域だ。僕は住宅地図を頼りにして、客先付近まではたどり着いた。夜という事もあり、一軒一軒の表札を確認していくのは、意外にも手間取る作業だった。そして、今日来た中年夫婦の家の表札をようやく見つけた。門柱にはインターホンのスイッチがあった。門扉の向こうは登り階段になっている。両側は低い植栽が植えられている。階段の奥はＬ字型に曲がっていて、門扉から直接、客の家は見えなかった。　僕は二度、三度前を行ったり来たりした。相手は赤の他人の家である。夜、いきなりチャイムを押して訪問することに、ものすごい抵抗感があった。何とも嫌な気分なのだが、これが仕事なのだから仕方がない。ふぅーっと深呼吸をして、インターホンの前に立った。左手にはアタッシュケースを下げている。門柱から直接本宅が見えないというのが、余計に不安になった。とりあえずインターホンを押すまでの事だ。エイッと気合いを入れてスイッチを押す。
　ヴィィ～～～
　インターホンからは、夜中に不釣り合いな程、大きな音がした。何の返事もなかった。しばらく待って、もう一度スイッチを押した。
　ヴィィ～～～
　ブザーの後にブツッと言う音がして、その後インターホンから声がした。
「はい、どちらさまですか？」
「あの、ダイニッケンホームのアマミヤと申します。あの、本日はご来場ありがとうございました。」
「ああ、展示場の人ね。」
　どうやら奥さんらしい。僕はとにかく門扉を突破して、家の玄関にたどり着かねばと思った。
「夜分にすいません。今日のご来場のお礼にと思いまして、ご挨拶に参ったのですが…。」
「あー、ただ、見に行っただけだしねー。」
「あっ、あの、お建て替えのご予定とかは？」
「ああ。ありませんよ。今度リフォームするから。壁紙とかカーテンとか見たくて行っただけだから、ごめんなさいね。それじゃあ。」
ブツッという音と共に、インターホンからの声は途切れた。
　リフォームかぁ、壁紙かぁ、と僕は力が抜けてしまった。なんだか、緊張したのが損したみたいで、バカ馬鹿しくなった。僕はカタログなどの入ったアタッシュケースを下げて、夜の道を自分の車の方へ歩いて行った。ドアを開けて、助手席にアタッシュケースを放り出した。ドアのポケットに入れておいた週報を取り出した。左端の中頃の欄に「夜訪」と言う欄がある。そこへボールペンで１と書き込んだ。これが今日、僕の営業活動の成果なのだ。
　入社して最初の土日を経験した、その二日後の火曜日。翌日の水曜は休みということもあり、営業部で新人営業の歓迎会を開いてくれた。夕刻から三つの展示場のスタッフが、いったん名古屋矢場町にある支店に集合し、そこから名古屋の中心地、栄の方向へ歩いて向かった。営業マンたちの車は、近所の二十四時間営業の駐車場に留めた。

三つの展示場の営業マンは、合計で十二人である。そこへ営業部長と各店長三人、神宮展示場と植田展示場の女性アシスタントが二人参加した。主婦である不動さんは不参加だった。また、軽部さんも持病の糖尿病があり、酒はダメという事で不参加だった。
秋の夕暮れはすぐに日が沈む。午後六時にもなると、すでに矢場町付近のオフィス街は、夜の街の顔になっていた。名古屋栄から矢場町にかけて、南北に大きく貫いている久屋大通を、栄交差点方面に歩いて行く。風見店長は遅れてくるとの事だった。
僕は名東展示場の営業マンぐらいしか面識がない。それに比べて野呂さんや中地さんは、他の展示場の連中と旧知の仲と言った感じで、冗談ばかり言いあっている。
皆二十代から三十に踏み込んだばかりの連中である。酒を飲む前から皆、異常なハイテンションではしゃいでいる。いじられ役の新卒営業マンは、野呂さんにヘッドロックをかけられているし、鬼ごっこの様な事をしている営業マンもいる。皆、スーツを着込んだ大人のビジネスマンなのだが。
神宮と植田の展示場女性アシスタントはどちらもルックスがよかった。彼女ら二人と一緒に宴会が出来るというので盛り上がっているのかな、と僕は思った。一緒に歩いている徳光君も、時折、視線を彼女たちに向けているのが分かった。
「徳光さん、どっちがタイプですか？」と僕は小さな声で尋ねた。
「いやぁ、僕はどちらとは…。」
徳光君は、彼女たちを見ていたのがバレたのが恥ずかしかったのか、口ごもって顔を赤らめた。
植田展示場のアシスタント、泉水さんは映画やテレビに出演している人気女優によく似た美人だ。目鼻立ちがスッキリとしていて、すらりと伸びた脚も細く、プロポーションも抜群だ。どこから見ても申し分ない美人である。営業マンたちは、ふざけあいながらも、それとなく彼女の近くにまとわりついているのが僕には分かった。神宮展示場の女性アシスタント、佐藤さんも充分魅力的だった。身長は低いが、顔立ちが幼く、かわいらしい女性である。彼女にセーラー服を着せれば、間違いなく女子高生で通るだろう。今日の歓迎会の最大の関心は、僕たち新人の事なんかではなく、彼女たちの近くの席をいかに確保するかである事は明らかだった。
今日の宴会の幹事は、神宮展示場の福本治朗店長だった。皆は、松坂屋デパートの角を西へ曲がる。夕刻という事もあって、歩道は帰宅を急ぐサラリーマンが多い。車道は路上駐車をしている車の間を縫うようにして、車が行き交っている。牛丼店や、コンビニ、消費者金融の看板などが立ち並ぶ雑居ビルの隣に、集合場所である居酒屋があった。客呼び込みの赤いのぼりが二本立っている。軒先は瓦で葺かれていて、玄関引き戸は縦格子で作られ、昔の旅籠の雰囲気を出していた。入り口には「本日のご予約」と書かれた二つの木の黒い札がかかっており、そのひとつに「ダイニッケンホーム様」と白い文字で書かれている。
「てめぇ、バカヤロー」
植田展示場の営業マンが笑いながらその札を殴る真似をした。
「ホームじゃねえよ。天下の大日本建材だぞ、コノヤロー。」
「このバッジが目に入らんか！！」
「へへッー。」と、別の営業マンがおどけてひれ伏す真似をした。皆、スリーピースのスーツや

、ダブルのスーツ姿であり、その襟元には大日本建材の社員の証である、ＤＫマークをかたどった、社員バッジが輝いていた。もちろん僕もつけている。初めて、この社員バッジをもらった時には、これにも驚いたものだった。社員バッジが入ったケースの裏には、銀座に本店を構える有名宝石店の名前が刻まれていたのだ。金メッキが施されたそのバッジは、僕にとって宝石のように輝かしく見えた。

店員に案内されて座敷に上がった。それぞれ好きなところに座ろうとする。長い木の座卓の末席の方に、女性アシスタントが座ろうとすると、神宮展示場の福本店長が言った。

「せっかくの歓迎会だから、新人さんの両となりに座ってあげてよ。」

僕と徳光君は新人席という事で、上座の近くに座らされた。

「部長もどうぞ。」

そう言って福本店長は営業部長に上座を勧めた。

「ウム、ありがとう。」

犬丸猛営業部長は、どかりと胡座をかいた。やや中年太りと思われる体である。その右隣に福本店長が座った。左隣は風見店長の席が空けてある。植田展示場の在間幸広店長は、次の席に座った。作務衣のような制服を着た店員が、両手にビール瓶を捧げて運んでくる。皆、ビールをテーブルの上にまんべんなく並べて行く。こういう場を仕切るのがうまい営業マン数人が、ビールの栓を抜いて皆のグラスに注いでいった。全員にビールが行き渡った頃、おもむろに部長がグラスを手に立ち上がった。今までざわついていた営業マンが急に静かになった。営業部長は眼光鋭く皆を一通り見回した。

「皆さん、お疲れさま。今日は忙しいところ、新人歓迎会に集まってもらってありがとう。」

営業部長が乾杯の音頭をとり、皆で型通りの乾杯をした。拍手の後、福本店長が軽い口調で「それじゃ、新人さんから挨拶していってね。」と言われたので、徳光君、僕の順番で挨拶した。意気込みを述べると言っても、右も左も分からない業界に飛び込んだのだ。ただ、がんばります、としか言えなかった。

犬丸営業部長は、僕たち新人営業マンにはそれほど関心がなさそうだった。犬丸部長がタバコを口にくわえると、そばにいた福本店長がライターで火をつけた。

営業部長の髪は耳がかぶさるまで伸ばしていて、モミアゲも豊かである。髪全体にゆるくパーマをあてて、手入れにも気を配っている感じだった。袖口にはクリスタルのカフスが光っており、左手にはロレックスの金時計が重厚な輝きを放っている。いかにもやり手の青年実業家と言った風貌だ。

宴会が始まると、泉水さんと佐藤さんが慣れた感じで、まず営業部長から順にビールを注ぎ始めた。

「おう、彩花ちゃん、うれしいねぇ。美人に注いでもらった酒はうまいねぇ。」

泉水さんから注がれたビールを部長は一気に飲み干した。空いたグラスには、すぐ佐藤さんがビールを継ぎ足した。そこへ風見店長が、パンパンに膨らんだカバンを提げて現れた。

「部長、遅れて申し訳ございません。」

頭は丁寧に部長に向かって下げているのだが、メガネの奥の目は、あいかわらずドロンとした

サバの目で表情がない。
「カバンぐらい車に置いてくればいいだろう。」と部長は自らビールの瓶を持って、風見店長のグラスに注ごうとする。ビール瓶の先をちょっとしゃくり上げた。
「ほらっ。」
「あっ、恐れ入ります。」
　風見店長は、あわててグラスを両手で捧げ持ち、ビールを受けた。
　「このすぐ近くのショールームで、今まで客と打ち合わせやったんですッ。」その言葉にはちょっとした自慢のニュアンスが込められているように感じた。
「ヨシオカさんだったね。確か土地なし客だったよな。」
「ハイ、それを土地紹介して、本契約に持ち込むのはさすがに大変やったですわ。」
　そう言って風見店長は、うまそうにビールを飲み干した。
「次も頼むぜ。もう行けるだろ、あの客。」
「はい、部長のクロージングお見事でした。おかげさまで今日のお昼に、お申し込み頂きました。」
　風見店長はカバンから「建築申込書」と書かれた二つ折りの上質紙を取り出した。
「うひょー、申し込み、また取ったの。」
　と福本店長が、覗き込んだ。
　植田展示場の在間店長は、下を向いてテーブルにひじをつき、グラスのビールを一口飲んだ。ほとんどバーコードと言っていい頭髪の頭を、軽く左右に振ってつぶやくように言った。
「いいねぇ、名東は。ウチの展示場じゃなぁ。」
　パンフレットにも載っているのだが、植田展示場のモデルハウスは、どう見たって建て売り住宅に、在間店長の毛を生やした様な外観だった。これでは来場者の数も少ないだろうと、住宅営業初心者の僕でも分かる。風見店長は、タバコに火をつけ、ポンプのように規則正しく煙を吸ったり吐いたりしている。
「風見君、家では禁煙なんだって？」と犬丸部長がおもしろそうに訊いた。
「ハァ、そうなんですッ。」
　風見店長は真剣な顔で、引き続きポンプのように煙草を吹かしている。
「かわいそうにねぇ。」
　部長はニヤニヤしながら、うまそうにタバコの煙を天井に向けて吐き出した。
「アマミヤ君、この前取った名簿の客、ちゃんと行ってるか？」と、風見店長がサバの目を僕に向けて言った。
「あっ、はい、今日も行きましたが、」と僕は手羽先のむしった肉を、急いで飲み込みながら答えた。
「やはり、リフォームの予定で、壁紙を見に来ただけとの事でした。」
「そうか。」
　風見店長はタバコの火を灰皿でもみ消しながら、
「そんなもん、客じゃねえッ。」と吐き捨てるように言った。それを聞いていた犬丸部長が口を挟んだ。

「オイオイ、営業の神様である風見君がそんな事言っちゃいかんな。アマミヤ君、徳光君もよく聞けよ。」
　犬丸部長は、特に風見店長の言葉に怒る様な素振りは見せず、僕と徳光君のほうに顔を向けた。
「アマミヤ君、一枚のアンケートの値段は幾らだ？」いきなりそう聞かれても、
「はぁ、まだよくわかりません。」としか答えられない。犬丸部長は得意そうにうなずいて語り始めた。
「アマミヤ君、徳光君、君たちが取ったアンケートは一枚五万円だ。」
　僕と徳光君は一気に緊張した。風見店長は上体をまっすぐにして部長の話を聞いている。神宮店の福本店長は、部長の話などおかまいなしに、うまそうに「どて煮」を口に運んでいる。犬丸部長は続けた。
「君たちの人件費、モデルハウスの減価償却費、展示場出展料、光熱費、更には支店の賃貸料、維持費、通信費。おまけに君たちが使っている駐車場代。これら一年間の固定費をだ、一年間でとれるアンケートの数で割ってみろよ。それが、一枚五万円になるんだよ。捨てる客なんて一人もいないんだぞ。」
　そう言うとビールをゆっくり口に運んだ。
「おっしゃる通りです！！」
　それまで、正座してじっと拝聴していた風見店長が、勢い込んで合の手を入れた。
「いやぁ、さすが部長ですわ。おっしゃるとおりです。ええか、アマミヤ君、徳光君、捨ててもええ客なんか、一人もおらんのやぞ！　一枚五万円なんやぞ！その通りですわ、部長！！」と、風見店長は大げさにうなづいた。そして、それまで灰皿に置いていた、吸いかけのショートホープを口にくわえ、大きく煙を吸い込んだ。ついさっき自分が言った、「客ではない発言」を、自ら全否定しても全く気にしていないようだった。風見店長のわざとらしい、へつらいぶりに、僕は何か珍しい動物を見ている様な錯覚を覚えた。他の営業マン達は、グラスを空けるピッチも早く、皆赤い顔をして、すでに出来上がっている感じだった。
「グラス空いてるじゃないですかぁー。」
と僕にビールを注いでくれたのは神宮展示場のアシスタント、佐藤さんだった。
「ありがとう、確か、佐藤さんでしたよね。」
「ハイ、佐藤奈々子です。」
「うらやましいなぁ、神宮も植田も、こんなきれいなアシスタントがいて。」
「あぁーっ、不動さんに言ってやろー。」
　佐藤さんはニコニコ笑っていた。
「奈々ちゃーん、オレにも注いでくれよ。」とグラスを差し出したのは神宮の福本店長だった。
「後で、メイドコスプレ見せてねー。」
「高いですよ。」
　佐藤奈々子は、セクハラまがいの福本店長の言葉を軽くいなしながら、慣れた手つきでビールを注いだ。徳光君は植田店の泉水彩花からビールを注がれて、必要以上に顔を赤くしている。相好を崩す、という言葉がこれほど似合う男もいないだろう。

「いいなぁー、彩ちゃん、スタイル良いし、あこがれなんですよ。私、背が低いし。」と佐藤さんは僕に話しかけてきた。
「いやぁ、佐藤さんも充分かわいいじゃないですか。モテるでしょ？」
「そんな事ないですよ。アマミヤさんこそ、　コーディネーターの資格持ってるなんてすごいじゃないですかぁー。」と佐藤さんは僕の二の腕を両手で軽く触れた。
「いやぁ、別にすごくはないよ。」
　内心うれしかった。僕はちょっと頬を赤くしてビールを飲み干した。佐藤さんがまた、グラスにビールを注いでくれる。
　やがて、宴もたけなわとなった。若手営業マンはビール瓶を持って、次々に先輩社員や部長、店長に注いで廻る。僕も酒を注ぎに行こうと立ち上がると、なぜか隣の佐藤さんが、僕の脇腹あたりを軽くつねった。彼女は恐らく酔っているのだろうと思った。う～ん、とすねる様な口調で、更に僕のシャツの脇腹の辺りをつねっている。ちょっと酒癖が悪い娘なのかもしれない。彼女をなだめるようにして僕は席を立った。ビール瓶を持って部長のそばに廻った。犬丸部長はリラックスした様子で壁に背を持たせかけ、グラスを持った手だけを、僕の方に突き出した。僕はビールを注ぎながら思い切って聞いてみた。
「部長、どうやったら、売れる営業マンになれますか？」
「うん？」と部長は赤くなった目だけをちょっと僕の方に向けて、その後すぐどうでも良さそうに視線を中空に向けた。
「まずは売れてる営業マンの真似をしてみる事だな。」犬丸部長は続けた。
　「風見君はあの通りの人間だけどね。良いワザ持っているんだ。毎月一棟の受注をしている。いいかアマミヤ君、この世界ではな、一ヶ月に一棟、必ず売ってくる営業マンは、神様と呼ばれるんだぜ。」
　そのかわり、と部長は僕の目をちらりと見てすぐ視線をそらした。
「何ヶ月も売れない営業ってのはなぁ。」と言葉を区切り、ビールを一口含んだ。目は中空を睨んでいた。
「害虫だ。要らんのだ。」冷めた目で、そうつぶやくように言った。

２　これが仕事

　この会社に入って一番驚いたのは、住宅営業マン用の新人教育マニュアルが存在しない事だった。一部上場企業なら、それぐらい用意しそうなものだが。
「だって、ホームだもんね。」
　不動さんがスタッフルームでお茶を飲みながらそう言った。
「ホームって？」と僕はティーカップを置いて聞いてみた。
「つい２年前まではダイニッケンホームって言う別会社だったのよ。営業不振で、社長が親会社の大日本建材に泣きついて入れてもらったの。」
　だから、大日本建材本社と、ダイニッケンホームでは、何から何までやり方が違うのだと不動さんは言った。最初、総務部長から、
「教育はＯＪＴです。」
と言われた本当の意味がようやく分かってきた。要するに新人教育のノウハウも持っていないので、ほったらかしにするという事であり、それが「ホーム」のやり方だということだった。
もう、自分で自分を教育していくしかないな、とため息まじりにお茶を一口飲んだ。
　僕は住宅に関する知識をどん欲に吸収していった。「失敗しない家作り」だとか、「初めての家作り」などと言うタイトルの本を、自腹を切って五、六册買い、片っ端から読み始めた。
　どの本も家のプランニングや、各種建築工法、建築法規の基礎知識、資金計画等が説明されている。
　都市銀行や労働金庫にも出向いて、住宅ローンの資料を貰って来た。住宅営業としての基礎知識を一から勉強するだけで、あっという間に二ヶ月が過ぎていった。
　十一月下旬の日曜日、僕はダイニングで客と話をしている軽部さんを見かけた。ちょうど僕は接客が終わっていた。僕の客は十分もせぬうちに逃げるように帰ったところだった。
　ー軽部さんのトークを盗んでやろうー
　僕はダイニングの隣の、リビングルームにさりげなく近づいた。テーブルの上のパンフレットを整理する振りをしながら、聞き耳を立てた。リビングに飾られた大きなクリスマスツリーの電飾がチカチカしている。何気なく客の方を見た。
　五十がらみの夫婦と、年頃の美しい娘さんだった。
　軽部さんがツルツルの頭、巨体、ダミ声で喋っている。すでに三人の客はダイニングテーブルにくつろいだ感じで座っていた。軽部さんは向かい合って座り、施行実例の写真集を、まるっこい指でめくっている。
　写真を指差しながら軽部さんがひと言喋ると、娘さんが愉快そうにコロコロと笑った。とても品のよいお嬢さんが、はしゃいでいるようにも感じた。
　軽部さんは自分の体の特徴全て、そのキャラクターの要素を総動員して、客を笑顔にさせているのが分かった。
　それは軽部さんのあの巨体、ツルツルの頭、鳴り響くダミ声でないと成立しないアクロバットであり、それはひとつの磨き抜かれた芸を見ているようで、こちらまで心地よかった。
　軽部さんの接客は長くかかりそうだった。僕は途中でスタッフルームへ戻った。不動さんが四

組の茶器を用意していた。
「不動さん、それ僕が持って行きます。」
「あら、そう。ありがとう。いい勉強になるでしょ、軽部さん見てると。」
　不動さんは、僕が軽部さんをスパイしているのを知っていたのだ。
「早く、一棟売れるといいわね。」
　不動さんは、にこりとして僕に茶器の載ったお盆を手渡した。お茶をこぼさないように慎重に階段を一歩一歩降りて行く。その間にもダイニングから軽部さんのダミ声が聞こえてくる。
「ご主人、奥サマ、いい？それにお嬢さんもよく覚えといてね。こんなモデルハウス見てもねぇ、何の参考にもならんからね。」
などと言っている。
「お茶をお持ち致しました。どうぞごゆっくりしていってください。」
　僕はそう言って紅茶の入った茶器を、まずご主人の方へ、そっと差し出した。父親は髪をキレイに七三に分け、黒ブチメガネをかけた、いかにも堅実そうな男性だった。
　ヒゲも綺麗に剃り、ベージュのＶネックセーターにピンクのシャツ姿だった。
　ちらりと娘を見ると、軽部さんの方を見て無邪気に微笑んでいる。清楚な白いブラウス、やや茶色い長い髪は、緩やかにウェーブしている。
　「お嬢さん、こんなおじちゃんと、家、一緒に見に行くかね？　おじちゃん、スケベだよ、大丈夫？」
　軽部さんは丸っこい指で自分の鼻先を指しながら言った。お嬢さんの方は、ティーカップを両手で軽く持ちながら微笑んだ。
「ふふふ、じゃ、軽部さんとデートね。」
「おっ、うれしいねぇ。わっはっハッハッ。」
　地響きのする様なダミ声が天然木フローリングの床に反射した。結局、軽部さんの接客は二時間以上に及んだ。次のアポも取り、現場見学をした後、ショールームを見に行くという約束を取り付けた。
　すでに夕刻になっており、ちょうど来場客も途切れていたので、軽部さんと不動さん、そして僕もそろって、玄関先でその客を見送った。軽部さんは玄関からモデルハウスの外に出て、客の背中に向かって声をかけた。
「もう、他は見なくていいよぉー。」あたりのモデルハウスにも聞こえる様な大声だった。
「お嬢ちゃん！　浮気しちゃダメよー。おじちゃん、泣いちゃうからねー。」
　駐車場へ向かっていた両親と娘は、笑顔で軽部さんに手を振っていた。そして父親はベンツのＥクラスのドアを開けた。車に客が乗り込むのを見届けた後、軽部さんは玄関からリビングに戻ってきた。
「聞いとったのか？」とつぶやくように言った。今までの笑顔と別人のように、クールな表情だった。
「まぁ、座れや。アマミヤ君。」
　僕と軽部さんは、リビングのたっぷりとした革張りソファーに腰掛けた。不動さんはダイニン

グで客の茶器を片付けている。
「どうかね、感想は？」と軽部さんは静かに僕に聞いた。
「なんで、あんな事出来るんですか？初めての客に。教えてください。」僕は素直に頭を下げた。
「アマミヤ君、営業の仕事って何だね？」
「たぶんー、仕事を取ってくること。そして、お金を回収する事、ですかね？」
「うん、普通の営業はそれでいい。だが、住宅営業は、」と軽部さんはひと呼吸おいて、僕の方に体を向けた。軽部さんは丸っこい左の手を下に、右の手をその上にかぶせて僕に見せた。
「ええか、アマミヤ君、お客さんはな、モデルハウスに入ってきた時、こんな風に貝になっとる訳だ。」
　そう言って今度は、二枚貝のようにかぶせていた手のひらを広げてみせた。
「これを、パカァーっと開かせてあげるのが、住宅営業のシ・ゴ・ト。」
　そう言って、僕の顔に丸っこい人差し指を向けた。僕は放心したようにその指を見つめた。

　翌週の土曜日には、風見店長の接客を見てみる事にした。「彼もいい技もってるんだ。」という犬丸部長の言葉を思い出した。
「店長、接客を見学させてもらっていいですか？」一応、僕は店長の了解を取っておこうと思った。風見店長はちょうどこれから接客に向かおうと、スタッフルームを出て行くところだった。
「ああ、ええよ。よう見とけや。」と僕を振り返って言った。店長に続いて僕も一階へ降りて行った。客は若い夫婦だった。店長は客の前に進み出ると、丁寧にお辞儀した。
「いらっしゃいませ。いつ頃お建てになりますか？」
　いきなり核心を突いた。
「いやぁ～、ちょっと見に来ただけなんで…。」と若い夫の方が、右手で頭をかきながら答えた。風見店長には何の表情もない。
「敷地はお持ちですか？」
「いや、まだまだ、これからです…。」
「ご予算はおいくらですか？」
　風見店長は客に尋問する様に続ける
「いやぁ～ご予算って言ってもねぇ～。」と口ごもっている客に対し、風見店長はもう一度お辞儀した。
「どうぞ、ごゆっくりご覧ください。」言い終わらないうちに、機械的に廻れ右をして、客から離れた。階段をすたすた上ってゆく。僕はあっけにとられて、店長の後を追ってスタッフルームへ戻った。
「店長、あのう。」
「客じゃねぇわ。あんなもん。」それだけ言うと、自分の席にどかりと座り、分厚いファイルを開けて、書類に何か書き込み始めた。
「こんな接客有りか？」と僕はあっけにとられた。

　わずか一分足らずで、店長は客を見極め、切って捨てたのだった。無駄で、余分な労働を一切排除すると言う、これが風見店長独自の営業スタイルなのか、と僕は言葉もなかった。風見店長は、そんな僕の方を見向きもせずに、ショートホープの煙をポンプの様に規則正しく吹かし続けた。

　相変わらず僕は、客から断られ続けていた。入社して三ヶ月、そろそろ結果を求められる時期だった。自分が持っているアンケートは三十枚程度になっていた。それらの客に昼間アポなしで訪問した。この訪問は社内用語で「突訪」と呼ばれていた。だが、しょせんアポなし訪問をやっているうちは、客に相手にもされなかった。いつも玄関先で追い返されてしまう。疲労感だけが残り、収穫は何もなかった。
　その日も訪問が終わり、夜の八時半を過ぎた頃、僕は展示会場の駐車場に戻ってきた。「ＴＢＣ名古屋東ハウジングセンター」はクリスマスのムードに染まっていた。
　全てのモデルハウスはイルミネーションで飾られ、ダイヤモンドを散りばめた様にキラキラ輝いている。
　ダイニッケンモデルハウスの勝手口からハウス内に入る。すでに室内の照明は、階段付近以外は消されて真っ暗だった。
　そこだけが明るい階段を、疲れた足取りで一段一段登る。パンフレット等を入れたアタッシュケースがやけに重い。スタッフルームのドアをガチャリと開ける。
「ただ今戻りました。」
「えらい、早いなぁ。」と言って僕をじろりと見たのは風見店長だった。立ったまま換気扇のそばでタバコを吸っている。
「ワシ、今から行ってくるわ。客と打ち合わせや。」と、得意そうに鼻から煙を出す。
「えっ、クリスマスイブですよ。店長、ご家族はどうされてるんです？」
「ほんなもん、気にしとって、この仕事出来んわ。夜の十二時超えても客の所におるのが一人前の営業や。」
　確かに、アポのひとつも取れずに、夜の九時前にすごすご帰ってくる僕など、この業界では洟垂れ小僧もいいところだ。
「アマミヤ君、正月はどうするんや？元旦は出るんやろな。」
　年末の休みから、せめて元旦までは神戸の実家にいたかった。僕の気持ちを見透かした様に風見店長は言った。
「徳光君は出る言うとるのに、なんで出んのや？」
　徳光君は僕と違い、すでに客から設計プランの依頼を一件受けていた。風見店長は僕の顔に、気持ち悪いぐらい顔を近づけてきた。
むっとタバコの臭いがした。僕の耳元でささやいた。
「徳光君はやっとるぞ。どうするんや？」
　ニヤリと笑いながら、もう一度耳元でささやいた。タバコ臭い。
「どうするんや？」
「はい、元旦出ます。」僕は唇を噛み締めた。プラン依頼一つ取れない自分が、ふがいなかった

。店長は僕の返事を聞いた後、膨らんだ黒革カバンを持ち上げた。スタッフルームから出て行く時に振り返って言った。
「正月は、ええ客くるぞ。」

　年末の十二月二十九日から大晦日まで、僕は神戸の実家で過ごした。兄と兄嫁、それに父と僕の四人で大晦日の夕刻、年越しそばを食べた。
「えっ、元旦からもう仕事しとるんか？」父親はそばをすすりながら、あきれた様に言った。
「まぁ、これが住宅営業言うもんや。しょうがないわ。」と僕は笑って言った。そばを食べ終えると、すぐに名古屋へ帰る用意をした。兄と兄嫁は僕に菓子や果物、家で作った餅を持たせてくれた。
「お前、これ好きやろ。ぎょうさん、持って帰れ。」そう言って兄は、青のり入りの切り餅をビニール袋にたくさん詰めて持たせてくれた。
「車混んどるやろ、気ぃ、つけてな。」
「うん。休み休み行くから大丈夫や。」
「仕事、無理すんなよ。ええな。」
「うん。」
　僕は大晦日の深夜、渋滞の高速道路を抜けて、名古屋へ戻った。

３　客を穫る

　元旦の朝は新年にふさわしく、穏やかに晴れていた。今年こそ、と僕は意気込んでいた。スーツも新調していた。黒い生地に銀の細いストライプの入ったダブルだ。ネクタイはこれも気に入って買った、煉瓦色と赤の格子模様を着用した。白い息を吐きながら、駐車場からモデルハウスに向け歩いた。
「明けましておめでとうございます」声をかけてきたのは徳光君だった。
「今年もよろしくお願いします」
　僕は笑顔で答えた。すでにどのモデルハウスも、玄関にしめ縄、門松を飾り、新しい年の客を迎え入れる準備が出来ていた。もちろん僕も徳光君も、昨年末の休み前に、粗品等の詰め合わせが入った福袋を大量に準備した。モデルハウスの中の押し入れ、ウォークインクローゼット、和室の縁側には、ぎっしり福袋が列をなしていた。
　新しい年を迎えた住宅展示場には、朝早くから多くの客が押し掛けた。クリスマスを過ぎた直後に、ハウジングセンターが事前に新聞広告を掲載していた。
「元旦から営業します。テレビで大人気、戦隊ゴレンジャーショー、もちつき大会、甘酒大サービス、各モデルハウスにて、福袋もあるよ！」という文字が踊っている。客のほとんどは、イベントや、このタダでもらえる福袋目当てだ。各モデルハウスをハシゴして廻り、両手に抱えきれないぐらいの福袋を持って、よたよた歩いているおじいちゃん、おばあちゃんたち。モデルハウス間の通路はまるで繁華街か、神社の縁日の様な賑わいだ。ダイニッケンのモデルハウスにも、常に客が出たり入ったりする。今日の出勤は、僕と徳光君、野呂さんの独身者三人だけである。
「いらっしゃいませー、アンケートご記入くださーい！」
「すいませーん！　福袋は勝手に持って行かないでください！」
　アンケートも書かずに、玄関先に並べてある福袋を、泥棒の様に持って行こうとする年寄り夫婦。その他にも子供連れ、初詣帰りの手をつないだカップル等が多い。営業マン三人は、スタッフルームに戻る事も出来ない忙しさで客に対応した。慌ただしく来場し、サッサと帰って行く客が多い中、僕は一組の客に出会った。母親と息子と思われる二人組である。
　二人は他の客と違い、ただ、玄関先で立ちすくんでいた。息子らしい青年は、まだ学生の様な雰囲気である。端正な顔立ち。髪はそれほど長くない。男性ファッション紙に出てくる様な、典型的な美男子と言えた。真面目な顔つきで、ゆっくりとモデルハウスの中を観察している。傍らの母親は、新年というのにこれから葬式に向かう様な、陰鬱で何とも頼りない様子だった。二人とも他の客と違い、福袋を一つも持っていなかった。僕は声をかけてみた。
「いらっしゃいませ。どうぞお上がりください」
　二人は大理石の玄関で靴を脱ぎ、イヴ・サンローランのスリッパをゆっくり履いた。母親の方は老けて見えた。更には、心配そうに何かおびえている様にも見える。そんな母親を、青年がそれとなく気遣っている雰囲気を感じ取った。アンケート用紙に記入をお願いすると、青年は真剣な眼差しで、一つ一つの項目を記入していった。アンケートの氏名欄には「青井涼介」と書かれていた。住所は豊田市。建築予算二〇〇〇万円未満、敷地は有り、そして建築予定は一年以内だ。いわゆる典型的なホット客である。

「ご案内させていただきます。わたくし、アマミヤでございます」と僕は名刺を両手で青年に渡した。青年は「あっ、どうも」と言って、僕の名刺を両手で受けとった。
「青井様、本日はご来場ありがとうございます。もう他のモデルハウスも、ずいぶんご覧になったんですか？」
「いえ、ここが今日、初めてですね」
「それは、ありがとうございます。もう、ご計画はだいぶお進みなんですか？」
「う～ん、何から手をつけていいのか……」
　青井涼介は、ちょっと困った様な顔をしていた。僕は記入されたアンケートを大切に両手に持って、二人をリビングの方へ招き入れた。
　このモデルハウスは木造である事。ツーバイフォー工法と呼ばれる、地震に強いパネル式の工法である事等を丁寧に説明した。二人は僕の説明を、真剣な面持ちで聞いていた。その間にも、他の客達は忙しそうにモデルハウスの中を動き回る。落ち着かないので、僕は二人をダイニングルームへ誘導した。
「実際に建てて頂いた方の写真を見た方が、参考になりますよ」僕はそう言って、ダイニングテーブルに置いてある、写真集を広げてみせた。母親は心配そうな顔で写真集を覗き込んだ。青年も写真集に自ら手をかけ、ページをめくった。
「今だ！」と思った。緊張で喉がちょっと渇いた。
「立ち話もなんですから、どうぞ座ってご覧になってください」
　青年は母親に座る様に促した。母親のために椅子を引いてやっている。そして、自分も並んでダイニングテーブルに着座した。やった、と心の中で僕はガッツポーズした。初めて、客を座らせる事に成功したのだ。さあ、これからだ。僕も二人に向き合う形で席に着いた。
「ご覧になって頂いております、この写真の家は、名古屋市の守山区に建っていますよ」と二人が見入っている写真を指差して、僕は説明した。
「予算は出来るだけ抑えたいんですよ」と青井涼介は言った。
「ご予算は二〇〇〇万円以内ですね。もちろん、建築可能ですよ。写真集の、こちらの建物のお客様は、約一千八百万円でお建てになりました」と、別の写真を指し示し、安心させた。そこへ、
「どうぞ、ごゆっくり」と、先輩の野呂さんがお茶を運んできてくれた。慌ただしい接客が続く中、他の客を放っておいてでも、僕の初めての着座面談をサポートしてくれたのだ。野呂さんのさりげない気配りに感謝した。青井親子は、熱い緑茶をそろってすすった。母親がほっとした様な表情を見せた。ひと息ついた後で「住むのは二人なんです」と青井涼介が言った。僕はペンとメモを取り出して話をじっくり聞いた。
　青井涼介は、今年中に結婚することが決まっている。相手は大学時代に知り合った熊本の女性である。遠方からはるばる嫁いでくる新妻のためにも、本宅とは別に新居を建てて迎えてやりたいのだ、と言った。青井家は代々農家である。土地はいくらでもあるので、好きな所に新宅を建ててもよい、と母親は言った。本宅には現在、農業を営む父親と母親、息子、そして寝たきりの祖父の四人で住んでいるとの事だった。息子の涼介は、昨年製薬会社に就職したばかりの新人営

業マンである。
「お互いたいへんですね」と僕は涼介に向かって微笑んだ。
「じゃ、もう研修は終わられたのですか？」と僕は尋ねた。
「そうです。今現場に配属になってます。いやぁー、研修にしろ現場にしろ、社会人は大変ですわ。上から怒られてばっかりですもん。ホント、学生の頃が懐かしいです」と涼介は首をすくめた。同じ営業マンとして、涼介の方も僕にシンパシーを感じている様に思えた。
「でもご立派ですよ。私なんか、まだ独り者だし。では、お嫁さんのためにも、いいお家を一緒につくっていきましょう」と僕は勝手に、青井家のパートナーである事をアピールした。そして無理のない資金計画案を作りたいと提案した。
「せっかくご新居を建てても、ローンの返済に苦しむようだと、本末転倒だと思うんですよ」
うん、うん、と二度涼介はうなづいた。お金の事になると、母親は再び心配そうな顔になった。
「頭金はどれぐらい要るんやろうかねぇ？」と不安そうな母親に僕は、
「総建築費の二十％が一つの目安になります。ですので二千万円の二十％、約四百万円程度ご用意頂ければいいですね」
　そう言いながら、僕は内心ヒヤヒヤしていた。しかし、僕の言葉に母親は安堵した様に「うん」と頷いたのだ。ラッキーだった。僕の方がひとまずホッとした。
「まずは大掴みに、家にかかる費用を見てみましょうか」僕はそう言ってテーブルの上の融資資料集を手元に引き寄せた。建築に関する費用のページを開く。そこで一つの円グラフを見せた。
「こちらが総建築費の内訳です。建物本体にかかる費用は全体の七割から八割。残りが付帯工事及び諸費用となります」
「付帯工事、諸費用……」つぶやく様に涼介が言った
「はい、その内訳ですが、付帯工事は屋外給排水、電気、ガス工事、必要に応じて浄化槽設置工事ですね。その他の工事として外構工事、カーテン、照明、エアコン工事などがあります。あと、諸費用として建築確認費用、融資関係の費用、そして登記費用と税金等です」
　言っている僕の頭の方がクラクラするぐらいだ。それでも目の前の二人は、僕の話に十分食いついてきている。さあ、もっと深く食らいつけ、と僕は切り出した。
「では、青井様の年収で、どれだけの融資が受けられるのか、ちょっと計算してみましょうか？」
「はい、お願いします」と涼介は少し前のめりになって答えた。さあ、食いついてきたぞ、と思った。いよいよ、初対面の客から年収を聞き出すのだ。僕は自分に落ち着け、と言い聞かせてから切り出した。
「ちなみに、月収は、おいくらぐらいですか？」僕はベテラン営業マンのふりをして、ゆったりと答えを待った。
「まだ、一年目なので、手取り十七万円程なんですけど」と涼介は答える。
「ローンのお申し込みは、税引き前の総支給額で計算出来るんですよ。ボーナスも、もちろん含んで頂いて結構ですよ」と僕はにこやかに答える。内心、僕はちょっと説明を失敗したなと焦った。
「ああ、よかった。じゃ、総支給二十二万円です。ボーナスは前期が五万、先月の後期が二十五

万円でした」
　僕はアンケート用紙の余白に、給与とボーナスの額をメモした。落ち着いて行け、と心に言い聞かせる。
「なお、金融機関の審査を受ける際に、年収というのは、昨年の一月から十二月までの、ボーナスを含めた収入を指すんです」さっき僕が言いそびれた事を言ったとたん、えっ、という様に涼介が緊張する様子が分かった。そう、年度での収入見込みでは、銀行は金を貸してはくれないのだ。僕は冷静に内ポケットから電卓を取り出す。ローン関連の資料のページを、あえてゆっくりとめくった。焦るな、落ち着け、計算間違いをするな、と自分に言い聞かせた。
「では、ご返済期間は最長の三十五年でよろしいですか？」と確認した。
「あっと、それから、これはあくまでも、目安としての試算です。実際には金融機関に融資の事前審査を受けて頂く必要がございます。勤続年数なども考慮されますので、まぁ、参考としてお考えください」と付け足した。僕は勤続年数の事も言い忘れていたのだ。内心ヒヤヒヤものだ。
「では、三十五年でお願いします」と固い顔で涼介が言った。
「わかりました。ところで、他に車のローン等は今、組んでいらっしゃいますか？」
「いえ、ローンはないですね」
「アンタ、就職祝いでクルマ買うてもろたでしょう。事故だけは、したらイカンよ」と母親が独り言の様に口をはさんだ。
「いいって、その話は……」と涼介はちょっと迷惑そうな顔をしている。
「ローンがないのは何よりですね。お車の運転は安全第一ですよね」と僕は母親に同調した。母親はウンと頷きながら、茶を一口すすった。
「では、今最も一般的に利用されております、住宅金融支援機構のフラット３５というプランで計算してみましょう」僕は微笑んでゆっくりと資料集の最新金利、そして、金利毎の借り入れ百万円あたりの返済額の資料を探す。びっしりと数字だらけの一覧表が出てくる。これだ。僕は電卓のボタンを一つ一つ慎重に押していった。まずは年収を計算する。青井涼介の昨年の年収は二十二万円×四月からの給料九ヶ月分、それにボーナスを加える。合計は二百二十八万円だ。収入が少ない。フラット３５の場合、年収四百万円未満なら、返済負担率は三十％以下だ。審査もあるし、目一杯借りられる保証はどこにもない。しかし、あくまで試算だと割り切って二百二十八万円の三十％で計算してみた。
　六十八万四千円と出た。これが、青井涼介が一年間に返済出来る限度一杯である。そして十二ヶ月で割ると、一ヶ月あたり五万七千円の返済額だ。今、知りたいのは幾ら借りられるかなので、特にボーナス返済は考えない。さあ、ここからだ。今、金利は三十五年固定金利の場合、二・六％だ。返済年数三十五年の、借り入れ百万円あたりの毎月返済額を、一覧表から探す。三千六百二十九円だ。五万七千円をこれで割ればいいんだ。電卓のボタンを押した。１５・７０という数字が出た。これに百万円を掛ければ出来上がりだ。一千五百七十万六千八百六円。借り入れは一万円単位なのだが、あえて一円の位まで出した方がそれっぽいのだ。
「これが今予想される、青井様の借り入れ可能額でございます」
　ほおーっという風に、涼介と母親はため息をついた。
「この金額に、頭金を仮に四百万円加えた場合、一千九百七十万六千八百六円が青井様のご新居

の総建築費となります」
　僕はホッとして答えた。何度もスタッフルームやクルマの中で、計算を練習した成果が実った瞬間だった。
　ここまでなんとか説明出来た事で、僕の方もやや余裕ができていた。どんどん客を誘導してゆこうと思った。
「当社はご承知の通り完全自由設計です」そう言って僕は、資料集の中から一枚のアンケート用紙を取り出した。各部屋の大きさはどれぐらいが希望なのか？　キッチンのタイプは対面型か、Ｌ型か？　などの質問が並んでいる。
「まずは設計プランを作ってみませんか？　このプラン依頼用紙にご記入してもらえればいいんです。初回設計料は無料サービスですよ」
「これ、今書くんですか？」と涼介が訊いた。僕は気を利かせて、
「もちろん、熊本の奥様とじっくり相談なさってください。その用紙は、今週の土日までに私が受け取りに参りましょう」
　涼介は納得したようだった。
「じゃ、彼女と相談しながら書いてみます」僕は頷いた。
「ええ、ぜひそうなさってください。女性の方はやはり、キッチンなどにこだわりがあるでしょうからね」そして、もう一度気合いを入れ直して、涼介と母親に向き合った。
「設計プランをお作りするにあたり、青井様の敷地を実際に拝見したいのですが、よろしいですか？」
　涼介は母親の顔を窺った。
「ああ、ええですよ」と母親は頷いた。
「家を建てる際には、現地調査というものが重要なんです」と僕は、資料集の現地調査のページを指差しながら説明した。
「まずは、敷地の形、高低差、境界杭の有無、前面道路の幅などを調べます。それから、いざ、家を建てようとすると、いろいろな法律の制約を受けるんです。例えて言うなら敷地には、目に見えない透明な箱がかぶさっていると思ってください」
　建てようとする建物は、その透明な箱の内側で建てる必要がある。もし、外側に飛び出てしまったら、それは違法建築なのだ。
「では五日の午後二時に、設計士と二人で現地調査にお伺いさせて頂きます。プラン依頼用紙は、翌日六日の夜八時に受け取りという事で」
「はい、いいです」実にすんなりとアポが取れる。まずは順調な滑り出しだ。僕はそれとなく腕時計をみる。接客開始から約一時間半経っていた。親子はダイニングテーブルからゆっくり立ち上がった。リビングを改めて見回しながら涼介は、ドーム型に外に突き出たティールームを指差した。
「あれ、めちゃくちゃカッコいいですね」
「皆さんに誉めて頂いてます。アールコーブというんです」
　よく、若いカップルがこの展示場に遊びにくる。中には、このアールコーブでお茶するのが

夢だった、などとうっとりする女の子もいるぐらいだ。だけど、青井涼介の予算で、こんなものを希望されたら、僕は首をくくらねばならないだろう。展示場の役割というのは、目立って客を集めること、そして入ってきた客を出来るだけ長く滞留させる、この二つだ。アールコーブや四百万円以上するシステムキッチンも、客をおびき寄せ、あり地獄の様に取り込んでゆく、仕掛けの一つに過ぎないのだ。
　青井親子は玄関で靴を履いていた。
「さあさあ、お母さん、これ！」僕は福袋を二つ捧げ持ち、母親に押し付ける様に渡した。
「二つぐらい、遠慮しないで、持って帰ってね」とひたすら親近感を抱かせる様に演出する。玄関先を出て、駐車場の方まで付き添う。この後で、他のメーカーに寄り道されてたまるものかと思った。
「ご丁寧に、どうも、すいませんねぇ」と母親は僕に頭を下げた。
「アマミヤさん、じゃ、うちの調査の方、よろしくおねがいします。あっ、ここでいいですよ、ほんとに」と涼介は、駐車場の車までついて行こうとする僕を制した。
「それではお母様、五日の午後二時にお伺いします。涼介さん、熊本の奥様によろしくお伝えください」と僕は頭を下げた。涼介は照れくさそうに、
「その奥様って言うの、まだピンとこないですわ」と頭をかいた。僕と青井親子は笑顔で別れた。
　僕は一時間半の接客で、ほとんど全神経を集中させていた。緊張のピークを超えたような感覚だった。足腰がふらつきそうになりながらモデルハウスに戻った。
「おめでとー。やったねー」
と声をかけてくれたのは野呂さんだった。
「おめでとうございます」とこれまた律儀に徳光君も祝福してくれた。二人の顔を見て一気に緊張の糸が解けた。
　とうとうやったのだ。やっと初めてのプラン依頼。そして初めての現地調査が取れた！二人の顔を見ながら、住宅営業という仕事で初めての喜びを噛み締めていた。二階のスタッフルームへいったん引き返すと、ほっと一息ついた。僕は自分でコーヒーを入れ、ひとときゆっくりと味わった。まだ軽い興奮状態だ。もうひとくちコーヒーを飲むと、さっそく住宅地図で青井涼介の家を探す。豊田市は広い。住宅地図も何冊かに分かれていた。そのなかから豊田市北部の住宅地図で、涼介の家は見つかった。地図を見る限り、周りの家も皆、敷地は広そうである。地図をコピーして、涼介のアンケート用紙にホッチキスで留める。そのあと、手書きでお礼のメッセージを書いた。
　午後から夕方にかけて、何組かの客をさばいた後、僕は粗品の花の苗木を持って、夜間訪問に向かった。展示場から東南へ三十分程走る。夜で、しかも周りは灯もまばらな農村地帯だ。うっそうとした森もあった。目印のお寺と水路を見つけ、ちょっとホッとする。その近くで涼介の家を見つけた。道路脇に車を止め、砂利道の路地を歩く。表の道路からは、かなり奥まった所にある家だった。母屋の玄関には、ぼうっとした電灯が頼りなげに点いている。古い、和風木造建築で切妻屋根の家である。暗がりに見渡してみると、狭い路地からは想像出来ない程、敷地は広かった。左手にはビニールハウスらしき物が、夜の闇の中に白っぽく浮かび上がって見えた。

　ネクタイを締め直し、ちょっと居住まいを正して玄関横のスイッチを押した。ゆっくり指を折りながら十秒数えて、もう一度スイッチを押す。しばらく待っていると、玄関の引き戸がゆっくりと開き、母親が顔だけを出した。昼も陰気くさい感じの母親が、夜はなおさら陰鬱に見えた。その母親の顔が、僕を見ると、あっと驚いた顔に変わった。
「夜分恐れ入ります。ダイニッケンホームのアマミヤでございます。本日はご来場、誠にありがとうございました」と僕は型通りの挨拶をした。
「ああ、これはどうも」と母親は恐縮した様な素振りを見せ、深くお辞儀をした。
「すぐ涼介呼んできますから」と言って、いったん奥へ引っこむ。そのあと、とんとんと急ぎ足で廊下を歩いてくる足音がした。
「えっ、アマミヤさん？」と涼介が、母親と言葉を交わしながら玄関先に出て来た。
「はい、アマミヤでございます。今日、ご来場のお礼を一言だけ言いたくて、駆けつけて参りました」と僕は勢い込んで挨拶した。涼介はびっくりした様に僕の顔を見た。
「すごいですね。わざわざここまで来るなんて。迷いませんでした？」
「はい、暗いのでちょっと迷いましたけど。でも大丈夫です」そう言って僕はメッセージカードと、粗品の苗木を涼介に渡した。
「夜分、本当に失礼しました。じゃ、今度、五日、現地調査にお邪魔しますので」
「ハイよろしくお願いします。僕もその時は、家に居る様にしますので」ありがたい言葉だった。涼介は帰ろうとする僕を、外の道まで見送ってくれた。
「住宅営業って大変ですね。こんな夜にまで」と感心したようだった。
「いえいえ、慣れてますから」と僕はちょっとベテランぶって答えた。夜間訪問をしてうれしい気分は初めてだな、と思いながら僕は展示場への帰路についた。
　翌日二日には、風見店長や軽部さんも展示場に姿を見せた。僕は青井涼介の現地調査依頼書に、必要事項を書いて店長に廻した。この書類には店長の承認印が必要なのだ。
「アマミヤ君、現調とれたのか」
「ハイ」
「やっぱりええ客、来たやろうが」
　ちょっと悔しい気もしたが、この業界の大先輩である店長の言った事が的中したのだ。
「元旦から出た甲斐があったな」風見店長は横目で僕を見ながら、書類にハンコを押した。
「設計にファックス入れとけや」と言いながら僕にその書類を渡した。まるで自分が現地調査をとって来たかの様な、得意そうな顔だった。

４　調査開始

　五日の午後一時五十分に、僕は青井涼介の家に着いた。一級建築士の出口修平も同行している。これからいよいよ初めての現地調査だ、と僕は意気込んだ。車のトランクから測量機材を取り出す。二人ともスーツの上から防寒用の作業ジャンパーを羽織った格好だ。
　約束の二時五分前に玄関のチャイムを押した。測量機材を担いだ出口さんは、敷地を睨む様に見廻していた。
「時間通りですね、アマミヤさん」
と涼介が玄関から顔を出した。
「青井さん、こちらウチの設計の出口です」と僕は紹介した。設計の出口さんは、急に柔らかな顔になり、涼介に挨拶した。気位の高い一級建築士が多い中で、そのまま営業マンにしても良い様な笑顔だなと思った。さっそく現地調査に取りかかった。今から始めるのは、家のラフプランを設計するために、必要最小限の敷地の測量データを得る作業である。次のステップの設計プラン提出までは無料サービスである。プロの測量士をつかった本格的な敷地調査は改めて行う。これは有料だ。さて、僕にとっては初めての現地調査である。何をすれば良いのかも分からなかった。出口さんはまず巻き尺を取り出して、僕に金具の付いた先端を持つ様に言った。僕はテープに印刷されたゼロの目盛りを、指示された場所に押し付ける。
「しっかり押さえて！！引っ張りますよ」と向こうで出口さんが叫ぶ。目盛りを読み取り、バインダーに挟んだ用紙にメモを取ると、「次は向こうへ！」と僕にまた測定ポイントを指示する。出口さんからの指示がされるたびに、僕はそれこそ犬の様に次のポイントへ小走りに走る。テープ測量と呼ばれるこの作業を一通り終わり、次は敷地の高低差を見る。出口さんが今度は三脚を用意する。道路から西側に伸びる路地のほぼ終点、涼介の家の玄関先に三脚は設置された。このポイントからは敷地がほぼ見渡せるし、前面道路からも見えるポイントである。出口さんは三脚の上に、望遠鏡を短く小さくした様な光学機器を取り付ける。そして水平になるようダイヤルを回して調整し始めた。こうして道路と敷地の高低差や、敷地がどのような起伏を持っているのかを測って行くのである。
　僕はその一連の作業を、少し興奮しながら見ていた。何しろ自分が取って来た、初めての客だ。営業以外の部署が、自分のために動いてくれるのも初めてで、素直にそれがうれしかった。
　客を捜すためのチラシ配り、昼夜のアポ無し訪問。これらは全て営業一人の孤独な作業だ。ほとんど無駄としか思えないような作業ばかりが続く。しかし今、ようやく僕は自分の客を捕まえたのだ、と言う実感が沸いた。
「アマミヤさん、スタッフ！」と出口さんが叫んだ。僕が訳も分からずキョロキョロしていると「そこの箱尺ですよ。物差しのデカイの！」と出口さんから指示が飛ぶ。何しろ僕は測量機材の名前一つ分からない、ど素人なのだ。ただ、彼は大きい声を出してはいるが、別に苛立っている様な口調ではない。僕はスタッフと呼ばれる箱尺を持った。三段に収納されたその大きな物差しを、ラジオのアンテナの様に、引き出して長くする。こんな簡単な作業でも、初めての現地調査という事で妙に楽しい。
「アマミヤさん、まずは道路のマンホールの上ね」

　そう言われて僕は、長く伸ばしたスタッフを立てて持ったまま、道路のマンホールへ走る。マンホールの上にスタッフを立てた。出口さんは、レベルと呼ばれる望遠鏡を覗き込んで、こちらの目盛りを読んでいる。
「ハイ、ＯＫです。次そこね」と指示が飛ぶ。このようにして、設計の出口さんが必要と判断したポイントを、いくつか測定した。これらの作業を、涼介は真剣な表情で見ていた。横には、やや前屈みの姿勢で、たよりなさそうに母親が寄り添っている。
「敷地の、どの辺りにお建てになる予定ですか？」と出口さんが、母親と涼介の方に聞いた。母親は、
「確か三百坪あるはずやからね。アンタがどこでも好きな所に建てたらええがね」
と涼介に語りかけた。
「ちゃんとお祓いは、せんといかんよ」と母親は続けて言った。ウンと頷いて、涼介の方は、
「やはりあの、平らなあたりが良さそうだと思うんですけど」と母屋の南西側を指差した。敷地内にはビニールハウスや農機具の収納庫、それに丁寧に畝が作られた畑があった。敷地が広いため、新居は母屋から十分な間隔を取って、建てる事が出来そうだった。恐らく涼介は、母屋の日当りの事も考えて、南西側を選んだのだろうと思われた。
　一通りの測量が終わり、機材を片付けていると、青井涼介が設計プラン依頼シートを持って来た。
「ちょうど設計の方もみえてるし、こんな感じでお願いしたいんですが、どうですか」
　僕がプランシートを受け取り、設計の出口さんと共に覗き込んだ。
　外観は南欧風に、とか、システムキッチンの天板は大理石を使いたい、食洗機も欲しい、床下収納を入れろ、二階の子供部屋は将来二つに間仕切れる様に、バルコニーは可能な限り広く、主寝室の隣にはウォークインクローゼットが欲しい等、様々な要望が、これでもかと余白にも書き込んである。
「リビングには、この窓を付けてほしいって。これ、彼女が昨日ファックスで送って来たんです」そう言って涼介は、もう一枚の紙を僕達に見せた。家庭用のファックスなので、白黒で解像度も悪かったが、明らかにボウウィンドウだ。弓形に外に張り出した出窓である。恐らく、どこかの住宅雑誌から見つけて送って来たのだろう。設計の出口さんは、プランシートを眺めていたが、
「ご予算はどれぐらいですかね」と尋ねた。僕はすかさず小声で
「本体一千五百万ぐらいで」と口を挟んだ。出口さんは何食わぬ顔で、ふ～んと軽く頷いた。
「じゃ青井さん、これお預かりします」と彼は涼介を安心させる様に言った。涼介は「よろしくお願いします」と深く僕たちに頭を下げた。
「プランが出来ましたら、またご連絡させてもらいますので」と僕は涼介に告げ、出口さんと共に機材を抱えて車に戻った。トランクに機材を収め、シートに座ってエンジンをかけると、出口さんが僕に話しかけた。
「アマミヤさん、早いとこ役所調査お願いしますね。旗竿敷地ですねぇ。ヤバいかも」と真剣な表情だった。

彼の説明によれば旗竿敷地とは、路地の奥に、敷地が広がっている土地のことを言う。竿の部分が路地で、旗の部分が奥に広がる敷地である。一個の土地は一筆と呼ばれる。旗竿敷地全体が一筆の土地なら、さほど問題はない。しかし、竿に当る路地の部分と、奥の敷地が二筆に分かれている場合もよくあるそうである。しかも、もしそれぞれの土地の所有者が違う場合などは、厄介な事になる。家を建てる敷地は、四メートル以上の幅の道路に、二メートル以上接していなければならない。これは接道義務と呼ばれる。青井涼介の旗竿敷地は、竿に当る路地が道路に二・五メートル接しているが、これではそもそも二軒分の接道にはならないのだ。

車を運転しながら出口さんの説明を聞いていた僕は、だんだん不安になって来た。あんなに広い敷地がありながら、家が建てられない事になるかもしれない。そして何より、その事で僕は、有力な見込み客を一件失う事になるかもしれないのだ。

二日後の月曜日、僕は不安な気持ちのまま役所調査に向かった。まずは法務局だ。

豊田市役所の南側にある法務局は、新しい現代的な五階建てのビルディングである。エレベーターで三階に上がる。ここが「法務局土地部門」のフロアである。右手に待合室があり、順番を待っている人が青いソファに腰掛け、備え付けのテレビを見たりしている。

まずは入り口近くの記入台で「地図、地積測量図等の閲覧、写し交付申請書」という用紙に、青井涼介の住所や、他の必要事項を書きこむ。書き方の分からない所は窓口で問い合わせながら記入した。四番の窓口で印紙を買って貼付け、「各種証明受付・交付」と書かれた三番窓口へ提出する。ラミネート加工された紙の番号札を貰ってしばらく待っていると、電光掲示板に自分の番号が表示された。再び窓口へ行き、一枚のモノクロの地図を受け取った。

それは公図と呼ばれている。土地の輪郭を表す細い線と、番地を表す数字だけが、ごちゃごちゃと印刷されている。道路地図の様に、ガソリンスタンドや、コンビニだと分かる様な表示はまるでない。地図というには、あまりにも無味乾燥なＡ三版の図面である。青井涼介の敷地とおぼしきあたりを眺めてみたが、細い区画ばかりで、どこにも母親の言った様な、三百坪もの敷地はなさそうだ。何しろ、公図を申請するのは初めての体験だ。申請書類を書き間違えたのだろうか？それとも係員が他の公図を出してしまったのか？

「すいません、これって何か間違ってませんか？」と僕は係員に問い合わせた。係員は公図と申請書類を見比べて、

「ああ、ここはですね。枝番が振られてますね。全部で十二の敷地に分かれているんですよ」

そのひと言で、目の前が真っ暗になりそうだった。なんだか厄介な素性を持った敷地のようだ。僕は不安な気持ちで、その十二に分かれた登記簿謄本、すべてを取る事にした。謄本は一部千円である。ここに来る時、財布の中に一万五千円入れて来ていたのは幸いだった。だが、いざ出て来た謄本を一目見たとき、僕はさらに頭を抱えたくなった。十二に分かれた敷地のうち、地目が畑というのが八つもあったのだ。家を建てるには地目が宅地でないとだめなのだ。「三百坪あるからね。どこでも好きな所に建てたらええ」と言った涼介の母親の顔が浮かんだ。あの広大な土地のほとんどは、家を建てる事が出来ない土地だったのだ。不幸中の幸いと言えば、路地の敷地の所有者は青井某となっていた事だ。恐らく父か祖父だろうと思った。公図の枝番と謄本を一つ一つ付き合わせてみた。母屋のある敷地が地番二百十の一だ。ここは地目が宅地になっている、面積は二百三十・三八㎡だった。現地調査のとき涼介が、ここに建てたいと指し示した南西の

敷地は、地番が二百十の三であった。ラッキーな事に地目は宅地になっている。面積も百二十・四五㎡あった。だが、これだけでは、家が建てられる保証はどこにもない。
　法務局の次はすぐに市役所に向かう。正面玄関入り口で都市計画課を探す。西庁舎の五階だった。エレベーターで、五階フロアに上がってみるとなんだか薄暗い。節電しているらしく、廊下の灯がついていない。手を伸ばせば届きそうな低い天井の廊下には、書類を詰めた段ボールが山積みになっている。都市計画課と札がかけられた部屋に入る。ここで、敷地に関する法的規制を調べるのだ。カウンター越しに職員に声をかけた。担当した職員はさほど役人ぽい感じのしない、体育教師の様な男だった。青井涼介の住所を伝えると、「ハイ、そちらは……」と言いかけたので、僕はあわててメモを取り出す。
「よろしいですか？そちらは市街化調整区域ですね。建ぺい率六十％、容積率二百％、防火指定なし、法二十二条規制有り、その他は建築基準法通りです」
　またしてもだった。都市計画法によって市街化調整区域の土地には、基本的に家を建てる事が出来ない。だが今は、とにかくあの敷地の素性を調べる事だ。他の部局も廻り、水道の埋設状況や道路名称、排水先などを調べて、いったん展示場へ引き揚げた。
　スタッフルームでは風見店長が、いつもの様に分厚い書類に向かっていた。
「店長、現調やったお客さん、旗竿敷地で市街化調整区域です。おまけに土地が十二に分筆されてるんです。接道もありません。どうしたらいですか！」と僕は泣きそうな顔で言った。風見店長は、
「ふ～ん、ややこしい物件やな。誰か設計か、工務の者にでも聞けや」相変わらずの素っ気なさだ。この人をアテにした自分が甘かったと思った。そばにいた中地さんが、
「謄本と公図は取って来てるんですよね」と言ってくれたので、十二冊の謄本と公図を差し出した。
「二百十の三が唯一建てられそうなんですが、接道がないみたいなんですよ」と泣きそうな顔で中地さんに訴えた。「住宅地図はありますか？」と中地さんに聞かれ、僕は住宅地図を差し出す。中地さんは謄本と公図、住宅地図を丹念に見てくれた。公図を見ながら何か気になったようだった。
「これってアカミチじゃないですかね」
　中地さんは鉛筆の先で公図を指した。青井涼介の敷地は、東側に南北に走る道路があり、そこから路地が西へ向かって伸びている。その路地の終点から南西方向に、大きく敷地は広がっていた。中地さんが鉛筆で指したのは道路の反対側、敷地の西側の端、中程だった。確かにそこに、細く赤い筋が表示されている。敷地と敷地に挟まれた、細い赤い線なのだが、法務局でそれを見た時には、さして重要な意味を持つとは思いもしなかった。現地ではこのあたりに他の家はなく、鬱蒼とした雑草が生えている。
「母屋の南西側が二百十の三ですね。これは宅地になってますわ。赤道がここから北西方向に伸びていて、恐らく道路につながってますね。もし、この赤道が認定道路であれば、接道がとれるかもしれませんよ」
　大げさかもしれないが、中地さんが神様の様に思えた。この西側の細い赤道について調べるために、再び僕は法務局と市役所へ向け車を走らせた。

　市役所に着くと、まず道路管理課へ向かった。そこで青井涼介の敷地につながっている赤道の事を尋ねた。この道が認定道路なら、敷地二百十の三は接道があるという事になる。係員は、「アカミチ？　ああ、リドウ、里道の事ですね」と言って机の上のパソコンで調べ始めた。僕が持って来た公図と見比べる。係員はあっさりと答えた。
「はい、市道ですね。平均幅員二・二メートルです」接道はあった。道はつながっていた。
「ありがとうございました」僕は係員に礼を言い、うれしさをこらえて都市計画課へ向かった。クリアすべき問題はあと一つ。市街化調整区域に家を建てる方法である。
　中地さんから聞いたところでは二つの方法があるらしい。一つは農家の分家として建てる方法、そしてもう一つは母屋の離れとして建てる方法だ。都市計画課の痩せてメガネをかけた係員は、実に丁寧に教えてくれた。
「え～、農家の分家につきましては、まずは開発行為の許可が、必要でして……」といろいろと手順を説明してくれる。ここで一つ問題が発生した。分家住宅を建てる場合、本家を引き継ぐ後継者が、もう一人必要なのだ。青井家は息子一人しかいないのだ。これでは分家住宅は建てられない。残された方法はひとつ。母屋の離れとして建てる方法だ。そこで建築指導課へ廻り、二、三確認してから、設計課の出口さんへ電話をかけた。彼も僕からの連絡を待っていたらしかった。
「役調の方はどうでした？」と聞く出口さんに対して、青井家の資料を後からファックスで送ると伝え、今分かっている事を報告した。
「離れとして建てるしかなさそうなんですが」
「そう言う状況じゃ、しょうがないでしょうね。キッチン抜きのプラン作ってみますよ。完了検査後にキッチンを入れるという方向で行きましょう」
「よろしくお願いしますね」
　僕は彼にすがる様な気持ちで電話を切った。離れとして住宅を建てる場合、キッチン、トイレ、浴室、洗面のどれか一つ以上をなくしたプランを作る必要があるのだ。「離れ」である限り、その建物が独立で「居宅」としての機能を果たしてはいけないのだ。あくまで母屋と対になって機能しなければならないのである。
　さて、ここまでの状況を、早急に青井涼介に伝えたいと思った。涼介の携帯電話に連絡してみると、今、豊田市内にいるので、すぐに会おうという事になった。
　豊田市役所の駐車場でしばらく待っていると、白いサニーが駐車場に現れた。ハンドルを握っているのは、白いワイシャツに濃紺のネクタイを締めた涼介であった。涼介もすぐにこちらを見つけたようであった。僕は涼介の車に駆け寄り、声をかけた。
「お仕事中にご連絡してすいません。早くお伝えしたかったもので」
「ちょうど時間空いてたんですよ、ここ、どうぞ」と涼介は、営業車の助手席を片付けた。若者らしく、コンビニの袋が散乱していたり、キャラクターグッズがルームミラーからぶら下げてある。他に仕事用のカバンや段ボールなどが、雑然と置かれた車内である。僕は助手席へ座り、カバンからメモを取り出した。車の中はヒーターが効いて暖かい。
「青井様の敷地なんですが、いろいろとお伝えしたい事が多いんですよ」

「何かあるんですか？」と涼介はきょとんとしている。僕は涼介に、今までの役所調査の結果を、順序立てて説明した。まず敷地が十二の区画に分かれていること。そのうち建築可能なのは二百十の三番地である事。接道は赤道というものを使う事、市街化調整区域のため、通常では家は建てられない事、そのため母屋の離れとして新居を建てる方向で考えている事を伝えた。なお、その際はキッチンを抜いた形で役所の完了検査を受ける事、それが通ってから、キッチンを取り付ければ問題はないだろうと思われる事、などを話した。
　一連の話を、涼介は冷静に聞いていた。説明が終わると、ほっと一息つく様にシートの背もたれに体を預けた。
「まさか、そんな事になってたんですか」とため息をついた。少し頭の中が混乱している様子だった。あの広い敷地のうち、家を建てられるのは、ごく一部の敷地だけだと言う事実は、やはりショックだったのだろう。
「それでも、アマミヤさんの言うやり方なら、建てられるんですよね」と涼介は向き直った。
「大丈夫です。建ちます」と僕は涼介の目をしっかり見つめて頷いた。はっきり言って不安な部分だらけだが、後は設計の出口さんに任せるしかない。彼は社内の一級建築士の中で、最も客の立場に立ってものを考える設計だと評判だった。彼なら何とか問題を解決してくれると期待していた。
「でも、よくここまで調べてくれましたね。アマミヤさんすごいですよ」と涼介は感心した様に僕を見た。
「いえいえ、営業として当たり前の事をやっただけですから」と受け流したが涼介は
「僕も営業マンなんですが、仕事って言うのは、そこまで熱意を持ってしなきゃいけないんですね」としきりに感心した様子だった。住宅営業としては、ごく当たり前の事をしたに過ぎなかった。だが、客が担当営業をどのように信頼するのかは、客の好き勝手である。客との相性という事もあるが、これほどたやすく信頼を得られる事は、ラッキーとしか言いようがない。やはり、早めに涼介に連絡を取った事は正解だったのだろう。その後涼介と別れて、僕は展示場へ戻った。

５　夢と金

　初回の設計プランが出来上がったのは四日後であった。名古屋支店の設計課で、僕はそのプランと対面した。僕はまるで自分の家が出来上がって来た様な、気持ちの昂りを覚えた。図面はＣＡＤで描かれた、百分の一の平面図と立面図だった。設計課の打ち合わせ用テーブルで、僕は出口さんと共にそのプランに見入った。
「良いプランですね」
「そう言ってもらえるとうれしいですよ。後はお客さんが納得するかですね」と彼はテーブルの上に置かれた積算資料を見ながら口を固く結んだ。僕は図面と共にプリントされた積算資料を見た。ＣＡＤで図面を描けば、自動的に費用はコンピュータで積算される。本体工事費という欄には一千六百八十七万九千五百円という計算結果が出ていた。当初、一千五百万円と目論んでいた僕の思惑とは、百八十万円ばかり離れている。それでも僕は、やはり設計の出口さんに感謝したい気分だった。
　僕はプランと積算資料を持って展示場へ向かった。ここからは営業の仕事だ。資金計画書とプレゼンテーションボードの作成である。まずは展示場のパソコンで、資金計画書のフォームに、建物本体価格や、その他必要な費用を入力してゆく。設計料や地盤調査費用、確認申請費用は、営業が勝手に動かす事の出来ない固定費用である。後は、これから外注に見積もりを出す屋外給排水が、幾らするかだ。その他契約の印紙代金、地鎮祭の費用、表示、保存登記費用、融資費用などの諸費用欄を入力する。カーテン、照明、エアコン、外周りの外構工事などは、あえて入力せず空欄とした。これらの費用を入れて総合計費用を出してしまうと、予算オーバーにはなるし、このハウスメーカーは高い、という先入観を持たれてしまう。とにかく安く見せて、契約に持ち込める資金計画にする事が大事なのだ。営業マンに課せられているのは、客の夢を実現する事や、客に満足を与える事ではない。会社にとって営業マンの仕事は、あくまで契約を取ってくる事なのだ。カーテンや照明、エアコンの費用の問題は契約の後になって解決して行けば良い、と僕は考える事にした。
　後はプレゼンテーションボードの作成である。ここはインテリアコーディネーターの資格を持つ、自分の腕の見せ所と言えた。見開きでＡ２版の大きさのボードに、着色した平面図、立面図、を貼付ける。そしてキッチン、浴室、洗面、トイレ、建具にいたるまで、どのようなグレードの部材が使われているのかを、一目で分かる様に、カタログなどから切り貼りして、見栄えのいい様にレイアウトする。これにはある程度のセンスが必要だ。ただ単にＣＡＤから出力された図面を見せられても、客は心が弾まない。どうやったら客に欲しいと思わせるか、また、どんなにこの設計プランが素晴らしいかを分かりやすく伝えるのが、プレゼンテーションボードの役割である。やっている作業そのものは、紙を切り抜き、糊で貼付けるという、極めてアナログな作業である。
　青井涼介と初めて展示場で出会ってから、すでに二週間が経とうとしていた。外注から屋外給排水、浄化槽の見積もりも出そろい、資金計画書が出来上がった。風見店長は、プレゼンボードの修正を延々とやっている僕に向かって、少し苛ついた口調で聞いた。
「アマミヤ君、もうアポは取ってあるんやろうな」

「はい、次の日曜日、午前十時です」
「うん、ワシも行くわ」
　別に、風見店長に付いて来てほしいとも思わなかったが、店長として、客へのプレゼンテーションに同席する事は、当然の職務なのだろうと思った。そのくせ風見店長は、青井涼介のプロフィールや、現地調査の状況などを聞こうともせず、ましてや設計プランなどは何の関心もないかのようであった。
　次の日曜日、スタッフルームでいつも通り風見店長は、ポンプの様に規則正しくタバコをふかしていた。今日は僕という新人営業マンの、初めてのプレゼンテーションという事もあってか、風見店長のポンプの動きは少し早めの感じである。僕はプレゼンボードや表紙を付けた資金計画書、そして顧客用の資料ファイルなどを何度も見直した。何日も前からプレゼンボードを前にして、何をどの順番で説明しようかと何回も練習してきたのだ。
「さあ、行くか」と風見店長は、灰皿でタバコをもみ消しながら立ち上がった。余り自分の車に乗せたいとは思わない人物なのだが、僕は店長と一緒にモデルハウスを出て、車に乗り込んだ。多少、車中がタバコ臭くなった気がした。意外にも風見店長は、僕の車の中でタバコを吸おうとはしなかった。車は展示会場のゲートを出て豊田市方向へ向かう。
「ところで資金計画はちゃんと出来とるんやろな？」
「ええまぁ……。ちょっと予算オーバーですけど」
　僕のその一言を聞いて、とたんに風見店長は怒りのこもった口調で言った。
「何やて！　予算オーバー？　君、それでワシを客先に連れて行く気か？」
「はぁ、すいません」
「すいませんやないやろ！　どうするんや！」
　僕は車を走らせながら、総予算は二千万円と聞いている事、青井涼介の親からは頭金四百万円は出そうである事を伝えた。
「概算ですが、借り入れは一千五百七十万が限度だと思います。今回の資金計画では建物本体と付帯工事、諸経費で二千四十八万円になってます」
「外構工事やカーテン、エアコン、照明は？」と風見店長が問い詰める。
「入ってません」
「う～む」
　風見店長は陰鬱な顔をして唸ってしまった。すでに外注先からカーテンと照明はそれぞれ三十万円づつ、エアコン工事は六十万円の見積もりが出ていた。本来、上司であるなら、部下の資金計画をもっと早くチェックしておけば良い事だ。僕は他人事の様に、素知らぬ顔で運転を続けた。だが確かにツメの甘い資金計画である事は確かだった。これで契約が取れなければ、その不利益は誰でもない、僕自身が被る事になるのだ。年間四棟の契約が取れなければ正社員にはなれない、という条件が重くのしかかる。
　ヒリヒリとした焼け付く様な緊張感のまま、車は青井涼介の家の近くに着いた。僕は大きなプレゼンボードと、他の資料の入ったカバンを提げて車を降りる。風見店長は手ぶらである。路地を西側に歩き、涼介の家の玄関前に二人揃って並んだ。店長は南側に広がる敷地を見て、

「えらい、広いなぁ」と感心した様に言った。僕は内心、何を今更と思った。この三百坪に及ぶ土地のうち、家が建てられる敷地はごく一部にしか過ぎないのだ。敷地の広さを見て、風見店長の機嫌は少し良くなったかのようである。とり澄ました顔で、玄関前に行儀良く立っている。僕は玄関のチャイムを押して姿勢を正した。さあ、いよいよプラン提出だ、と気合いを入れ直した。しばらく待つと、玄関から現れたのは母親である。いつもの陰鬱な調子で、僕たち二人を中へ招き入れた。僕と店長は居間へ通された。そこは、絨毯が敷かれた、八畳程の広さの和室である。部屋の真ん中にテーブルが置かれている。それを挟んでソファと椅子が二脚置かれている。二人は母親に勧められて、入り口に近い椅子の方に座った。母親が廊下の方へ下がるのと入れ違いに、涼介が入って来た。店長と僕は改めて立ち上がり、挨拶を交わした。
「店長の風見でございます。今日は貴重なお時間を頂き、ありがとうございます」
　風見店長は全く抑揚のない口調で挨拶し、四十五度の角度でお辞儀をした。相変わらず無表情なまま、涼介に名刺を両手で手渡した。
「あっ、これは、わざわざどうも」と涼介は、名刺に書かれた店長という肩書きに、少し恐縮した様に、首だけぺこりと下げてお辞儀した。南側のソファに涼介が座った。
「大変お待たせ致しました。いよいよプランが出来上がってきましたので、どうぞご覧下さい」と僕は、さっそくプレゼンボードを開いて涼介の方に差し出した。設計の出口さんが作ったプランを元に、僕が手作りしたプレゼンボードを見て、涼介は「ほうっ。」と目をこらした。
　やがて母親が、盆に茶碗と急須を載せて現れた。テーブルの上に、緑茶の入った茶碗を、ゆっくりした動作で順番に置いて行く。その後、涼介と同じ様に南側のソファに座った。ソファの背後はアルミサッシの吐き出し窓になっており、レースのカーテンがかかっていた。入ってくる光は薄明るい。僕の方からは逆光になった。母親の陰鬱な顔は日陰になり、より暗く見えた。今回も、なぜか父親は現れない様子だった。プレゼンボードを覗き込んでいる涼介に、僕はプランの説明を始めた。
「まず外観をご覧下さい。南欧風にというご要望にお応えして、バルコニーや建物の角、玄関周りに、一部、割石調のタイルを貼りまして、その雰囲気を演出しております。屋根は寄せ棟。総二階建ての建物です」
　次に室内を説明する。
「東向きの玄関から玄関ホールを抜けますと、左手に十畳のリビングスペースが広がります。南側には奥様のご要望通り、ボウウィンドウをしつらえました。開放感は抜群、たっぷりとした陽射しがリビングに注ぎ込みます。ここに趣味の良いカーテンをアレンジして頂ければ、室内がよりハイクラスに見えると思いますよ。このリビングの北側に、六畳のダイニングキッチンのスペースが取ってあります。ここに、後から設置する予定のキッチンには、ダイニッケンの〇〇シリーズの食洗機付きシステムキッチン。人工大理石の天板もご要望通りとさせて頂いております。また洗面、浴室もダイニッケンの〇〇シリーズから、お好みの色をお選び頂けます」
　僕は次に二階の平面図を指し示す。
「階段を上って頂いて、二階東側に主寝室がございます。もちろん、ウォークインクローゼット付きです。その南側には、十畳の子供部屋のスペースがあります。こちらは、将来二部屋に間仕切り可能です。バルコニーは、両方のお部屋から出入り出来ますので、どちらのお布団も簡単に

干して頂けると思いますよ」
　僕は母親が出してくれた緑茶に手も付けず、無心になって説明を続けた。涼介は真剣にプレゼンボードに見入っている。母親も相変わらず心細げな表情ではあったが、首を伸ばしてプレゼンボードを興味深げに眺めていた。
「一階、二階を合わせました延べ床面積は、百二十四平方メートル、約三十七・五一坪でございます」と一気に説明してしまうと、僕は「失礼して、頂きます」と言って、母親の入れてくれた緑茶を一口すすった。すでにぬるくはなっていたが、喉を潤おしたおかげで、緊張が和らいだ。涼介は、ただじっとプレゼンボードを見つめていた。あまりに真剣な表情が、やや不機嫌なのではないかと、僕を不安な気持ちにさせる。
「う～ん」と唸る様に何度か頷き、
「いや、ありがとうございます」と涼介は、僕と店長に向かって軽く頭を下げた。僕はややほっとしたが、それも束の間、
「このプランの見積もりは、もう出ているんですか？」という涼介の問いに、僕は改めて身構えた。
「ええ、こちらに建物本体のお見積もりをご用意してあります」とカバンから数十ページに及ぶ積算見積もり書を差し出した。涼介はしっかりと見積書を両手で受け取った。彼の目は、一ページ目の総合計金額一千六百八十七万九千五百円という数字を見つめている。小出しにしても仕方がない、僕はこちらから切り出した。
「先日お話し致しました通り、本体価格以外にも、家を作るには様々な費用がかかります。こちらがその明細となります」とＡ四版の白い光沢の表紙が付いた、資金計画書をカバンから取り出した。それまでむっつりとしたままの風見店長が、素早く横目でそれを見たのが分かった。僕は資金計画書の一ページ目を示しながら説明する。
「本体工事の他に、設計料、地盤調査料、宅地内給排水工事費、それにこちらの地域では浄化槽設置工事費がかかります。この合計金額が税込み一千九百九十八万六千二百二十五円でございます。ここに諸費用としまして、契約印紙代金、表示、保存登記費用、融資関係費用、それに地鎮祭費用を加えますと、総合計金額が、二千四十八万四千六百二十五円となります」
　涼介が軽く唇を噛んだのが見えた。母親は意外にも、さほど驚いた様子もなく、僕の説明を聞いている。
「設計料というのは無料サービスではないんですか？」と涼介が口を開いた。確かにプラン依頼用紙には、無料サービスと謳われている。うかつだった。僕はそんな質問が出てくるとは予想していなかったのだ。一瞬言葉に詰まった。そこへすかさず風見店長が割り込んだ。
「ご契約頂きますとね、本設計と言うて五十分の一の、もっと詳しい図面を何枚も作るんですわ。その費用ですねぇ」と澄ました顔であっさりと答えた。
「地盤調査っていうのは？」と続けて涼介が質問した。今度は僕が、カバンから地盤調査のパンフレットを取り出して涼介に見せた。
「この写真でご覧頂く様に、スウェーデン式サウンディング法というやり方で、地盤の堅さを測るんです。長く安心してお住まい頂くために欠かせない調査なんです」とつたない説明をした。何しろ、僕自身まだ一回も本物の地盤調査の現場を見た事もないのだ。

「どうですか？ご予算の方は合いそうですか？」と風見店長が聞いた。
「設計プランは良いと思います。すごく気に入ってます」
「ありがとうございます」僕と店長は同時に頭を下げた。
「ですが、予算的にはもう少し考えさせてください」
「いつ頃お建てになりますか？」と店長は改めて聞いた。
「う～ん、出来れば夏までにはなんとかしたいですね」
「ウチ以外にお見積もりは取られてますか？」
「……ええ、もう一社」と涼介は言いにくそうに答えた。風見店長は強引な感じで質問を続ける。
「そのもう一社のプランと見積もりは、いつ出てくるんですか？」
「もう今週には出ますね」
「ご予算は全体でいくらでお考えですか？」
「う～ん、二千万円までと考えているんですけど」
「お父様は二千万円で了解されてるんですね」と風見店長は続ける。
「まぁ今回の件は、お前に任せると言ってくれてますから」と涼介は答えた。
「アマミヤ君、写真集持っとるか？」といきなり風見店長は言い出した。僕は急いでカバンの中から、ごそごそと施行実例写真集を取り出す。風見店長はその写真集をめくりながら、
「ここね。これ〇〇スーパーの社長さんのお宅ですわ。これ私が担当しました。あ、それからこの大きい家。これプロ野球選手の〇〇さんの家ですわ。これも私が担当しました」と次々にまくしたてた。涼介は、この地域なら誰でも知っている、大手スーパーの社長や、有名プロ野球選手の名前を聞いてびっくりしたようすだった。
「よかったら、今度現場ご案内しますんで」
「はぁ」と少し気後れしている涼介を見て「アマミヤ君、スケジュール表あるか？」と風見店長が僕に尋ねた。僕はカバンの中から「ご相談からご入居まで」という資料を取り出す。風見店長はそれを指で指しながら、
「今はここのプラン提出ですわ。この後、ウチとお話を進めるという事に決まりましたら、建築お申し込みになります」
　僕は浅黄色の建築申込書を取り出す。店長はそのＡ四版二つ折りの用紙を開いて、お客様の署名欄を指しながら、
「ここですわ。ここにサインして、実印押してもろたらええんですわ。それとお申込金は五十万円です」とさらりと言ってのけた。　僕には恐ろしくてとても言えない様な「申し込み」だとか「五十万円」などという単語を平気でぐいぐい客に押し付ける店長に、
「ああ、この人はいつもこんなやり方で、契約を取って来たんだなぁ」と感じた。この後、簡単に契約に至るまでのスケジュールを説明した。三日後に、プラン変更の要望を聞くため、再度訪問するアポを取り付けて、初回プレゼンテーションは終わった。帰りの車の中で、風見店長は僕に向かって、
「アマミヤ君、一万円札、五十枚数えた事あるか？」と聞いた。

「いえ、ありません」
「いかん、いかん。練習しとけ」
　店長から言われた通り、この日以降僕は、展示場に居る時、一万円の大きさに切ったチラシ五十枚を数える練習を始めたのだった。僕が不器用にチラシを数える様子を見ていた不動さんは、「みんな最初は数えられないのよね。でもよかったじゃない」とにっこり微笑んだ。確かに、札束を数える練習が出来るステップにまで、階段を上って来た感じがした。申し込みまで後少しだと思った。

６　痛い時間

　提出したプランについては、先方はおおむね満足している様子だった。後日、再度訪問し、プラン変更の要望点を訊いた。キッチンや階段下に、更に収納スペースが欲しいとか、主寝室の窓は出窓にしてほしいとか、女性が思いつきそうな細かな要望だった。恐らく九州にいる婚約者の意向なのだろう。その要望をすぐに設計の出口さんに伝え、変更プランを作成してもらった。
　一月下旬の月曜の夕方、新規に取れた名簿の客に初回訪問をしていたとき、僕の携帯電話がブルブルと震えた。風見店長からだった。
「もしもし、今ええか？」
「はい。どうぞ」
「今晩、展示場で営業会議する事になったんや。七時に集まってくれんかな」
「分かりました」と僕は電話を切った。
　毎週火曜日の午前中に名東展示場の営業会議は開かれていた。それは前日の月曜日に名古屋支店で開かれた店長会議での決定事項を、風見店長がだらだらと営業マンに報告するだけの、形式的な会議である。それが急に今晩とはどういう事だろう。僕は客先訪問を早めに済ませて展示場へ向かった。
　スタッフルームのドアを開けると、タバコの煙がむっと鼻をついた。いつも風見店長が座る席に、犬丸営業部長がタバコをくゆらせながら座っていた。
「ご苦労様」
　僕をちらりと見て一言だけ言った。店長は犬丸部長の横に、恐縮した感じで座っていた。すでに野呂さんや中地さん、徳光君もいる。軽部さんと不動さんの姿はなかった。僕はドアに近い席にカバンを置いて座った。
「よし、始めようか」と犬丸部長が口を開いた。
「今朝、風見君から、皆の見込み客の進捗状況を聞いた」
　犬丸部長は、僕たち営業マンをゆっくりと見回した。
「風見君」と犬丸部長は店長に声をかけた。
「いい展示場だよな」
「ハイ」
「ダイニッケンホームの中でも一番金のかかった展示場だよな」
「はい、その通りですぁ」
「正月の経費も、幾らかかったか知ってるよな」
「ハイ」
「神宮は今月二棟、植田も二棟やるんだってさ。名東は？」
「契約一件、申し込み一件の予定です」
　スタッフルームに言いようのない重苦しい雰囲気が漂った。
「それで良いのかよ」
「ハァ」
「それしかやれねえのかって聞いてんだよ」

「申し訳ございません」
「情けねぇなぁ。俺も年の初めから声を荒げたくないんだよ。だけど風見君、もうちょっと俺の顔も、立ててくれても良いんじゃないか？なにか俺に恨みでもあるのかよぉ」
「いえ、とんでもございません」
「だったらよぉ、やる事は分かってんだろ」
　しょうがねぇなぁ、とつぶやきながら、犬丸部長は新しいタバコに火をつける。皆押し黙ったままだ。とにかく早く、この犬丸部長の怒りの嵐が過ぎ去ってくれればいい。皆そう思っているようであった。
「アマミヤ君よぉ」
　犬丸部長の言葉が僕の心臓を刺激した。
「青井さんって、もうプランも見積もりも出してるんだよなぁ」
「ハイ」
「どうしてクロージングしねぇんだよ？」
「まだ、プランの修正を、今、やっている所でして、それが……」
　僕はしどろもどろになって答える。
「バカやろう！」
　犬丸部長の怒声が響いた。
「申込金も貰わずにプラン変更やってるのかよ？　とんでもねぇな。風見君よぉ、君がついてて、この、ていたらくは何なんだよぉ」
　犬丸部長はイライラしたように、タバコの灰を灰皿に落す。椅子に背を持たせかけ、足を前に組み直した。風見店長は慌てた様に、
「はい、申し訳ございません。さっそくお申し込み頂く様にしますので」と言った後、すぐに僕の方に視線を向けた。
「行ってこいや」
「はぁ？」と僕が困惑していると
「今から行ってこいや。申し込み、貰うてこいや」
　めちゃくちゃな話だと思った。修正プランは、つい先日、涼介に渡したばかりだ。だが涼介は、それについてもう一度、彼女の方に見せてから返事をしたいと言っていた。そして何より涼介は、予算の方を気にしていた。予算オーバーな資金計画のまま、涼介から申し込みを貰う自信など、僕にはまるでなかった。
「行ってこいや」
　もう一度風見店長が、強い視線をこちらに向けた。嫌な雰囲気がスタッフルームにたちこめる。他の営業マンは無言で机の上を見ているが、風見店長と犬丸部長の視線は、ずっと僕に向けられたままだった。痛い時間が過ぎて行く。
「分かりました。行ってきます」
　僕はカバンを持ち上げた。唇を噛み締めた。無理強いすれば、今日で青井涼介という客を潰してしまうことになると思った。その結末の舞台に、無理矢理、自分が引きずり出された屈辱感で

、体が震えた。僕は目を充血させ、カバンの把手を強く握り締めた。モデルハウスを出ると、暗い駐車場へ足取り重く歩いて行った。車に乗り込み、シートに腰掛けるとハンドルに頭をつけた。そのまま目を閉じる。僕の頬に悔し涙が一滴流れた。
　車は夜の道を涼介の家に向けて走っている。僕はただ、口を真一文字に結んでハンドルを握っていた。もう、この道は何回も通った。いかに方向音痴な僕でも、暗闇の中、何も意識する事なく車を走らせている。やがて涼介の家の目印である寺が見えた。その近所に車を止めた。カバンを左手に下げて、車から降りる。涼介の家の玄関へ通じる路地に、一歩踏み込むと、一月の夜の闇に砂利を踏みしめる音がした。玄関に近づくと、何か南側の方で明るいものが見えた。パチパチと何かが弾ける様な音がする。周りにも焦げた様な臭いが伝わって来ていた。僕は玄関口から南側に向けて広がった敷地を眺めた。そこでは大きな火柱が上がっていた。山の様に積み上げられた枯れ草や廃材、木切れ等を燃やしているのだ。その炎に照らされて、一人の若者の姿が見えた。涼介だった。
「あれっ、アマミヤさんじゃないですか」
　先に涼介の方が、僕に気づいた。涼介は頭に白いタオルを巻き、手には軍手をはめている。
「こんばんわ」と僕は涼介に近づきながら挨拶した。
「いやぁ、びっくりしました。すごい炎ですね」
　実際、暗闇の中で燃えている炎は、目に眩しい程の光を、周りにまき散らしている。僕は炎のそばにいる涼介の横に並んだ。
「どんど焼きって奴ですね」と僕は涼介に語りかけた。涼介は炎の中に、長い生木の棒を突っ込んで、枯れ草の山の形を整えている。目は眩しそうだ。
「何度も大変ですね。アマミヤさんも」
　涼介は僕を見てにこりと笑った。何の屈託もなさそうなその笑顔が、僕には少しうらやましく思えた。僕は笑顔を返す事が出来なかった。
「実は、今日お伺いしたのは……」と僕は少し口ごもった。
「青井さんも、営業マンですから、お分かりでしょうね。月末なんですよ。営業成績の事です」
　涼介は僕を見つめた。炎がその頬を片側だけ照らしている。
「ええ分かります」涼介は頷いた。
「大変、厚かましいお願いなんですが」と僕は言いよどんだ。しかし、今言わなければもう言う時はなかった。
「建築お申し込みを頂けませんか」
　炎はなおも涼介の頬を照らしている。僕の目と涼介の目が合った。涼介の口元が動いた。
「分かりました。サインします。」
　何が起こったのか、よく分からなかった。僕は涼介と炎を交互に見た。
「よろしくお願いします。アマミヤさん」
　涼介は僕に頭を下げた。僕はカバンの把手を、両方の手で強く握りしめた。
「本当ですか！　ありがとうございます。こちらこそ……」
　それより先、僕は言葉が出なかった。信じられなかった。僕はまだ、事の次第を確認出来なかった。涼介は僕に申し込みをすると言ったのだ。

「じゃ、中へどうぞ」
　涼介の方が冷静だった。僕を母屋の中へ招き入れた。居間のソファに座りながら、涼介は頭に被っていたタオルをほどいた。白いタオルに少し灰がかかっている。僕はカバンの中から建築申込書を取り出す。
「では、こちらにサインをお願い出来ますか」
　少し声がかすれた。僕はテーブルの上に建築申込書を開いて、涼介の方に差し出した。　「実印が要るんでしたね。」と涼介は言い、いったん二階の自室に上がって行った。涼介のいない居間で、僕は放心状態のままだった。何事が目の前で進みつつあるのか、まだ信じられない。エアポケットに入った様に、体がふわふわした。トントンと階段を下りる音がして、涼介が戻って来た。僕はボールペンと印肉を、申し込み用紙の右側に置いた。捺印用のゴムの下敷きも、テーブルの上に置いた。涼介は無言のままボールペンを取って、「甲、住所、氏名」という欄に、母屋の住所と自分の名を記入した。その下には「乙、住所、氏名」欄となっており、大日本建材株式会社住宅事業本部の住所と社名、そして社印が押されていた。涼介はボールペンを置いて、黒いシボ模様の印鑑入れから実印を取り出した。僕が用意した、携帯用のフタ付きの印肉に、軽くポンポンと二回印鑑を押し付ける。僕は申込書の「印」と記された部分の裏側に、ゴムの下敷きを差し入れた。涼介はそれを待って、申し込み用紙の捺印欄に、静かに、そして力強く実印を押し付けた。もう一通同じ様に申込書を作成し、一通は僕が持ち、もう一通を涼介に手渡した。
「ありがとうございました」
　僕は申込書を表彰状の様に両手で捧げ持ち、涼介に礼を言った。
「それじゃ、アマミヤさん」と涼介が口を開いた。
「会って欲しい人がいるんですよ」
「はい」
「うちのおじいちゃんです」
　そう言って涼介は立ち上がり、僕を奥の部屋に行く様に促した。居間と壁を隔てた隣の部屋は、やはり畳敷きである。南側の窓にはグレーのカーテンがかけられている。蛍光灯の光が部屋全体を青白く見せていた。その部屋の中央に、病院で使われる様な、白いパイプのベッドがしつらえられ、ひとりの老人が寝かされていた。老人には、ピンク色の毛布の上から、厚手の掛け布団が掛けられていた。布団の白いシーツは、蛍光灯に照らされて青白い。老人の鼻には、酸素吸入の管が付けられている。枯れ木の様な老人は、眠っているようだった。かすかに呼吸している音が、この老人が生きている、唯一の証とさえ言えた。
「おじいちゃん！　おじいちゃん！」
　涼介は老人の耳元に口をつけ、大きな声で呼びかけた。老人の耳には補聴器がかけられている。
「うっ、うっ」老人はかすかに目を開けた様であった。
「うっ、うっ、うっ」
　老人は涼介に気づいたようであったが、すぐまた目を閉じた。
「おじいちゃん、分かる？」
　老人はかすかに目を開けて頷いた。

「おじいちゃん、この人にね、僕の家、建ててもらうからね！」涼介は老人の耳元で叫ぶ様に言い、僕を指差した。
「この人に、建ててもらうからね！」もう一度涼介は強く叫んだ。その時だった。老人は、布団の中から両手をゆっくりと出した。
「うっ、うっ、うっ」
　そして、その両手を僕の方に向けたのだった。僕はベッドのそばに歩み寄った。
「うっ、うっ」
　老人は、か細い手を僕の顔の方に伸ばす。僕は膝をつき、その手を、両手で包み込む様に抱きとめた。涼介が僕を指して再び言う。
「この人だよ！　おじいちゃん！　この人に建ててもらうからね」
「うっ、うっ」
　老人は二度、かすかに頷いた。
「アマミヤと申します。よろしくお願いします。一生懸命やらせて頂きます。一生懸命やらせて頂きますから」
　僕はそう言って老人の手を強く抱いた。涙が両の目から、ぼたぼたとこぼれた。涙は老人の手にも落ちた。もう何も言葉は要らなかった。ただひたすら、この人たちのために仕事をしよう、そう思った。青白い光の中で、僕はいつまでも老人の手を抱きしめていた。

7　ブラックホール

「おはようございます。ダイニッケンホーム名古屋支店でございます」
　朝のオフィスに女性社員の声が爽やかに響いた。名古屋支店のオフィスの窓からは、朝陽がたっぷり差し込んでいる。総務部の机では、女性社員が伝票を処理したり、電話応対をしている。僕は彼女らの横に座っていた。　「村上さーん、二番に久留島造園の山崎さんからです」フロアの一番奥の工務課に向かって、総務の森下さんが大きな声で呼びかける。受話器を電話本体に置くと、彼女が僕のほうを見て声をかけた。
「アマミヤさん、青井さんからの入金、五十万円、確認出来てますので。ここにアマミヤさんの印鑑下さいね」
　僕は目の前に差し出された社内伝票に、シャチハタのハンコを押す。その書類はすぐに石橋総務部長の、未決のラベルが貼ってあるプラスチックトレーに入れられる。森下さんは、もう次の伝票処理の作業に取りかかっている。
「アマミヤ君、ちょっといいかな」
　営業部の窓際の席から声がかかった。犬丸部長だった。僕は総務の机の列を廻り込んで、犬丸部長の机の横に直立不動の姿勢で立った。犬丸部長は机からおもむろに立ち上がった。
「アマミヤ君よくやってくれた。ありがとう」そう言って部長は、右手を僕の方に差し出した。先日の展示場での様子が、嘘の様な紳士的な態度だった。
「ありがとうございます」
　僕は深く頭を下げ、その手を両手で強く握り返した。
「早く本契約に持ち込め。頼んだぞ」そう言って犬丸部長は、僕の肩をポンと叩いた。満足そうな微笑みを浮かべて、再び机に座った。
「では失礼します」僕は一礼して、今度は更に奥の設計、工務の机の列に向かった。僕を見つけた設計の出口さんが、右手にステッドラーの製図用シャープペンシルを持ったまま、「この間の出窓の件なんですけどね」と話しかけてくる。僕と出口さんは打ち合わせ用のテーブルに座り、青井さんのプラン変更に伴う、設備仕様の打ち合わせに取りかかった。図面を指し示して説明する一級建築士の話を聞きながら、「これが申し込みを貰うという事なんだな」という実感を噛み締めていた。もう青井涼介は僕だけの客ではないのだ。これからは、設計や専属のコーディネーターが付き、そして工事監督も付いてくれる。僕にとって、それはダイニッケンホームというシステム全体が、ようやく始動してくれたかの様に思えた。そしてそれを実現させたのは誰でもない、僕なのだ。僕はそのうれしさで胸がいっぱいになった。
「じゃコーディネート打ち合わせは〇〇日の予定で」
「ＯＫです。青井さんに日程確認します」
「敷地調査依頼書と、地盤調査依頼書もお願いしますね」
「分かりました。作っときます」
　工務課長がそばを通り過ぎる時、
「アマミヤ君、青井さんの家までの案内図、作っといてよ。住宅地図のコピーだけじゃダメだよ」

「はい、すぐやります」と僕は笑って答えた。やるべき仕事が増える、忙しい、という事が、こんなにうれしい事だとは思わなかった。もう僕は、アポなし訪問だけを、バカの一つ覚えの様に繰り返している営業マンではないのだ。
　支店での打ち合わせが済むと、僕はエレベーターで一階に下りた。一階のフロアは大日本建材のショールームになっている。僕はショールームの重い玄関ガラスドアを押して、表通りへ出た。僕は四車線道路を横断し、南側の駐車場に停めてある、自分の車に乗り込んだ。ここの駐車場だって、もう後ろめたい思いをして使う事はないのだ。自分がその費用の一部を、間違いなく稼ぎだしているのだ。僕は満足げに車を展示場へ向け走らせた。

　次の日曜日、その日は午後から青井涼介がショールームに来る事になっていた。朝の十時、そろそろ展示場に最初の客が来場する頃だ。僕は展示場のスタッフルームで、玄関のモニターテレビを見ていた。野呂さんや中地さんとコーヒーを飲んでいた時、僕の携帯電話がブルブルと震えた。客先で失礼がないように、いつも携帯電話はマナーモードにしているのだ。僕は二つ折りの携帯のディスプレイ画面を見る。電話は涼介からだった。
「お早うございます。青井さん」僕はにこやかに挨拶した。
「アマミヤさん……」
　少し間があった。午後のショールームでの打ち合わせ時間の変更だろうか？　ふとそう思った。涼介は一呼吸置いた後、言葉を区切りながら話しを続けた。
「誠に、申し訳ありませんが、今回の、お話は、なかった事にしてください。入金した五十万円の、返金をお願いします」
　僕の体から、一瞬にして血の気が引いて行くのが分かった。背中から冷気が襲ってくるようだ。
「どういう事でしょうか？」
「ちょっと、やむを得ない事情がありまして」
「やむを得ない事情、と言いますと？」
「う～ん」
「何か、ご心配の事でもあるのですか？奥様の事情とかでしょうか？」
　野呂さんと中地さんが、心配そうにこちらを見ている。しばらく涼介は黙っていた。一体何があったというのだ。もしかして、結婚そのものが破綻したのか？　そこまで僕は憶測してしまった。
「実は……」涼介が口を開いた。
「はい」
「契約しました。四ツ葉ハウスさんと、昨日契約したんです」
「えっ、契約！」
　これはタチの悪い冗談だ、そう思いたかった。だが僕の口から出た「契約」という言葉が、スタッフルームの空気を一瞬にして凍りつかせた。野呂さんは、頭に手をやって眉をしかめた。中地さんは、ゆっくりとティーカップを皿に置き、下唇を噛んでいる。

「そう言う訳ですので」と涼介の声が、僕の耳に虚ろに響く。僕はすがる様な思いで、言葉をつないだ。
「今日、お時間空いてますよね。お会い出来ませんか？　なんとかお願いします。もう一度だけ」
「……う～ん……」
「三十分、いや、十五分で結構です。今日の午後、お会い出来ませんか？」
　しばらく沈黙があった。
「お話しすることは、特にありません。今まで、本当にありがとうございました。感謝しています。では、失礼します」
　ブツッ、と言う電話の切れる音がした。僕は携帯電話を持ったまま、ただぼんやりと立っていた。何も考えられない。どうしたらいいのか分からない。
「アマミヤさん」と野呂さんが、真剣な表情で僕に声をかけた。
「どこと契約したんですか？　青井さんは」
「四ツ葉ハウスです」僕はぽつりと答えた。
「また四ツ葉かぁ」と中地さんが苦々しい表情になった。四ツ葉ハウスは日本のツーバイフォー住宅に関しては、受注実績、施行実績共に、押しも押されぬナンバーワンの存在だった。著名なタレントやスポーツ選手をＣＭに起用し、富裕層を中心とした客層に、圧倒的な人気を誇っていた。いわばダイニッケンホームの天敵とも言える存在だ。その高級指向のツーバイフォーメーカーが、あろう事か、二千万円未満の低価格帯にまで進出して来ていた。僕が入社してからも、社内では何人もの営業マンが四ツ葉ハウスと競合し、ことごとく負けていた。僕たちが無言で固まっていた時、スタッフルームのドアが開いた。風見店長だった。珍しくにこやかな顔だ。
「アマミヤ君、どうや、これが青井さんの契約書や。よう見とけや。もう、支店で社印押してもろうたんや」そう言って契約書類をヒラヒラさせて僕に見せた。恐らく後はその契約書に、青井さんの署名と、実印だけを貰えば良い様にしてあるのだろう。だが室内で硬い表情のまま立ちすくむ僕たちを見て、風見店長も異常に気づいたようだ。
「どないしたんや」そう言って、僕と野呂さんの顔を交互に見た。
「青井さん、四ツ葉ハウスと契約したそうです」と野呂さんが告げた。そのとたん、いつも死んだサバの様な目をしている風見店長の表情が一変した。大げさに眉をしかめ、釣り上げられた魚の様に、大きく口を開けた。悲嘆にくれたその口からは、声にならない声を出そうとしているかのようだった。肩をがっくりと落し、今にもひざまずきそうな程だ。やがて、目だけが僕をぎょろりと恨めしそうに見つめた。ようやく、絞り出す様な声で風見店長が唸った。
「どないするんやー！」
　声は少しかすれていた。
「どないするんやー、アマミヤ君、ええっ！　　どないしてくれるんやー。ワシはなぁ、さっき支店で、この契約書に、支店長直々にハンコ押してもろうたんやぞ！どないしてくれるんやぁー」手に持った契約書類をバンバン叩きながら風見店長の怒りが一気に爆発した。僕は返す言葉もなかった。
「すいません。申し訳ありません」と小さな声で僕は謝った。

「確かに向こうは契約と言うたんか？」
「はい。昨日、契約したと」
「契約かぁ」とつぶやくように言って、風見店長は椅子に座った。僕は立ったままだ。やがて風見店長の目は、いつものドロリとした死んだサバの目に戻った。
「契約した言うんやったら、どないしょうもないな」
「今からひっくり返すには、違約金が必要でしょうしね」と中地さんが冷静に言った。
青井さんが違約金を支払ってまで、四ツ葉ハウスとの契約を破棄し、ダイニッケンに戻ってくる合理的な理由はどこにもない。契約というのは、それほどまでに神聖で重いものなのだ。僕は負ける事によってそれを思い知らされた。
「部長へ報告せないかんなぁ」そう言って風見店長は、僕の方をドロリとした目で睨んだ。
「アマミヤ君、覚悟しとけよ。部長にエライ怒られるぞ」
　僕は全く身の置き所がなかった。大げさではなく、目の前に刀を置かれたら切腹したい心境だ。ヤクザの様に小指を落してけじめがつくのなら、それでもかまわないとさえ思った。モニターテレビに来場客の姿が映った。「ピンポーン」という、いつものチャイムの音。野呂さんがさっと身を翻す様に、スタッフルームから玄関に向かう。
「アマミヤ君はここにおれよ。もう今日は接客せんでいい」
　風見店長は僕に座る様に言い、自分は電話に手をかけた。そして支店の短縮ダイヤルのボタンを押した。風見店長は受話器を耳にあてながら、ごくりと唾を飲みこんだ。
「もしもし、風見ですわ。犬丸部長お願いします」しばらく沈黙の後、
「あっ部長ですか、エラい事ですわ。本当に申し訳ありません。実は……」
　そして青井涼介が四ツ葉ハウスと昨日契約した事を伝えた。風見店長は受話器を耳に当てたまま何度も頭を下げた。
「本当に申し訳ございません」
「はぁ、おっしゃる通りです」
「いえ、そんな事は……」
「あっ、ハイ。おっしゃる通りです」
「ああ……いえ……その……」
「はっ、失礼致します」
　風見店長は受話器を持ったまま、深々と頭を下げた。電話を切る音が相手に聞こえない様に、ゆっくりと受話器を置いた。次の瞬間、僕をキッと睨みつけた。
「犬丸部長すぐ来るそうや。どないするんや？　えっ、アマミヤ君、どないするんや！」
　僕は正に針のむしろに敷かれたようだった。とにかく誠心誠意、部長に謝るしか方法がない。一時間程経って、部長は展示場に姿を見せた。スタッフルームのドアを、勢いよく大きく開けて入って来た犬丸部長は、設計の出口さんを従えていた。僕は部長が口を開く前に先に部長の前に進み出た。
「本当に申し訳ございませんでした。私の責任です」
　犬丸部長は、一番奥の机に大きく足を広げてどかりと座った。僕は直角に近い角度で、ただ頭を下げ続けた。犬丸部長は僕の謝罪を全く無視した様に、風見店長に声をかけた。

「風見君、君が付いててどういう事なんだ。ええ？なんなんだよ。このザマはよォ？」
　風見店長が、すぐに僕を押しのける様にして犬丸部長の前に進み出る。
「はぁ、本当に申し訳ございません。電話でお話ししました通り、私も先ほど聞いたばかりで」
「全く、この前の申し込みは、誰のおかげで取れたと思っているんだ。ええ？聞かせて貰おうか」犬丸部長の問いかけに、風見店長と僕は、ほぼ同時に答えた。
「部長のおかげです」
「よく分かってるじゃねぇか」
　犬丸部長は腕組みをして目をつぶり、天を仰いだ。
「別に俺はよぉ、俺の顔に泥を塗られたから怒ってるんじゃないんだよ。アマミヤ君、分かるか？」
「ハイ」
「何が分かってるんだ？」
「あっ、はぁ」
「何が分かってるのかって聞いてんだよ！このボケェー！」
「申し訳ありません」ただ僕は頭を下げる。
「二人共。分かってないようだな。いいか、これはな、ダイニッケンホームの大看板に、泥を塗られたんだぞ。分かってるのか！」
「ハイ！分かっております」風見店長と僕は再び頭を下げる。
「あ～あ。こんなバカ相手に話すると、俺も疲れるよ、全く。ええ？　どう思う、出口君よぉ？
　君も苦労してつくったプランがパァになっちまったんだからなぁ」と出口さんの方に、わざと哀れんだ様な眼差しを向けた。
「悔しいだろう？出口君」
「ええ、そうですね」と出口さんはカバンを抱えたまま頷いている。
「で？どういう理由で青井さんは断ってきたんだ？」再び犬丸部長の追求が僕に廻って来た。
「はい、四ツ葉ハウスと契約したからと」
　犬丸部長は頭をかきながら
「アマミヤ君、キミ、日本語も分からんのか？」
　犬丸部長は、今度は風見店長に訊いた。
「何の理由で四ツ葉ハウスと契約する事になったんだ。ええ？風見君よぉ、教えてくれよ、俺にわかる日本語でよぉ」
　風見店長は平身低頭のまま答えた。
「いえ、よく分かりません」
「今なんて言った」
「まだよく分かりません」
　その一言を聞いた次の瞬間、犬丸部長は立ち上がった。机の上のものを、手でブルドーザーの様に払いのけた。机の上に置いてあった茶器や菓子箱が宙を舞った。コーヒーカップは床に落ち、弾みで壁に当たって砕け散った。飲みかけのコーヒーが、あたりの机や、風見店長や、僕のス

一ツにまで飛び散った。
「バカ野郎！」ついに犬丸部長の怒りが爆発した。
「客から断られた原因も分かってねェだと？てめぇら、今までここで何してやがった！」
　犬丸部長のスリッパを履いた右足が、机の横腹を蹴り飛ばした。「ドシュッ」という、鋭さと鈍さを併せ持つ音がした。蹴りつけられたスチール机には、横腹に大きくクレーターの様な窪みがついている。
「客は理由もなく、ホイホイ契約書にサインしてくれるのかよ、ええ？　風見君」
「いえ、絶対にそんな事はありません。必ず契約する理由があります。はい」
「そうだよ、アマミヤ君。客が契約する時には必ず理由があるんだ。その理由はまだ聞けてないってことだな、アマミヤ君」
「はい、おっしゃる通りです」
「オイ、椅子！」と犬丸部長は風見店長にあごをしゃくった。風見店長は姿勢を低くして、椅子を犬丸部長の後ろに、うやうやしく持って行った。まるで舞台の上の黒子のようだ。犬丸部長は椅子にどかりと座ると、
「資金計画書だ。早く出せ。本体見積もりもだ」と僕に指示した。タバコを取り出し口にくわえる。すかさず風見店長がライターで火をつけた。その後すぐに灰皿も用意された。僕はカバンの中から、青井涼介様とワープロで書かれた、資金計画書と本体見積書を出した。犬丸部長に「これです」と手渡す。犬丸部長は右手にタバコを持ち、左手で本体見積書を見る。額に若干しわを寄せながらパラパラとそれを見た後、資金計画書を手に取った。
「おい、電卓！」
「はっ」と風見店長が電卓を犬丸部長に差し出す。
「てめぇ、バカか！俺に計算させるつもりかよぉ」
「はっ、申し訳ございません」と風見店長は電卓を持ったままオロオロしている。犬丸部長はタバコをいったん灰皿の上に置いた。ダブルのスーツの胸ポケットから、金色の細身のボールペンを取り出す。
「全く、よくまぁ、こんな甘い資金計画作ったもんだなぁ、呆れるぜ。出口君、君も大変だなぁ。こんな連中にこき使われてよぉ。まあ、俺もこき使われてるんだけどな、この連中によぉ」
　犬丸部長は悪態をつきながら、資金計画書にペンを走らせる。やがてその資金計画書を、立ったままの風見店長の足元に放り投げた。
「それで行け。早く計算しろ」
「はっ」と風見店長は両手で資金計画書を表彰状の様に捧げ持つ。
「アマミヤ君、何やっとるんや、早う計算せいや！」ときつく僕を叱った。僕は急いで資金計画書の計算をやり直す。犬丸部長が添削した資金計画書は、建物本体価格を五％削り、設計料金を無料。次いで屋外給排水工事も値引きされていた。また、カーテン、照明は各二十万円相当品をサービス。更にはエアコン四十万円相当をサービス工事にする、との注意書きがなされている。
「総合計は幾らになった？」
「ハイ、今やってます」

「何やってんだよ全く、早くやれよ」
「ハイ」
　僕は必死になって電卓を叩いた。間違えてはいけない。それでいて早く計算しなくてはいけない。口の中がカラカラになった。
「出ました。総合計一千九百三十八万三千二百一円です」
「うむ」と犬丸部長は頷いた。
「出口君、さっき書いたラフプランだ」
　出口さんはカバンから手書きのラフプランを取り出した。コピーもすでに二枚取ってある。
「これ持って、二人ともサッサと青井さんとこに行ってこい。四ツ葉なら、これぐらいは楽にやってくるはずだ。青井さんがまだ渋るようだったら、すぐ俺に連絡しろ。いいな」
「ハイ、分かりました」風見店長は申し訳なさそうに頷いた。僕はすでに虚脱状態になっていた。緊張の度合いを通り越してしまっている。
「出口君も済まんなぁ。この連中に付き合ってやってくれ」
　はい、と頷いて、出口さんも立ち上がった。僕達三人は急いで青井涼介の家に向かった。モデルハウスから出て行くとき、庭の雑草をむしっていた不動さんが、「お疲れさま」と独り言の様につぶやくのが聞こえた。

　出来ればこのまま、どこまでも走り続けていたい、そんな心境で僕は、車のハンドルを握っていた。しんと静まり返った車内には、風見店長と設計の出口さんが、まるで置物の様に固まってシートに座っている。涼介の家に着いた三人は、砂利が無造作に敷かれた細い道を通って、その玄関に並んだ。涼介の家の近所には、四ツ葉ハウスのものらしい車の姿はなかった。玄関のチャイムを押してしばらく待ったが誰も出てこない。もう一度チャイムを押して待っていると、玄関から顔を出したのは涼介本人であった。
「ああ、アマミヤさんですか」と言った涼介の表情には、すでにどこかよそよそしい雰囲気がありありと伺えた。
「まぁ、どうぞ。上がって下さい」
　三人は居間へ通された。居間の南側のアルミサッシにはレースのカーテンがかかっている。冬の午後の弱い陽射しが、レースのカーテンを通してなお淋しげに感じる。居間は昼間とは思えないほど薄暗かった。涼介はいつも通り南側のソファに座った。部屋が薄暗い上に、逆光になる事によって、涼介の表情は読み取りにくかった。僕は半ば無駄だと分かってはいるが、話しを切り出した。
「今回の四ツ葉ハウスとのご契約、考え直して頂く訳にはいかないでしょうか？」
　涼介は無言である。硬く口を真一文字に閉ざし、テーブルをじっと見つめている。風見店長が割り込む様に口を挟んだ。
「資金計画を作り直して来たんですわ。まぁ、もういっぺんだけ、目を通してやって貰えませんか？」そう言って僕の方へ目配せをした。僕は資金計画書を急いでカバンから出し、テーブルの上に広げた。風見店長が続ける。
「えらい勉強させてもろうとるんですわ。カーテン、照明、エアコンもサービス工事にさせても

ろてます。本体価格も、もちろん頑張らせて貰いますんで」
　その後すぐに設計の出口さんが、手描きのラフプランをその横に並べた。
「価格を抑えるために、誠に勝手ながら、プランを変更させて頂きました。床面積を若干小さくさせて頂き、コストダウンを図りました」と説明する。
「総額は一千九百万円台ですわ。えらい安うなりましたわ。これはお買い得ですわ」と風見店長が押し付けがましく言った。それらの言葉を涼介は、ほとんど聞いていないかの様に思われた。体は微動だにしない。しばらく沈黙があった。
「もう決めた事なんです」
　涼介がぽつりと言った。
「父からも、強く、四ツ葉さんにしろと言われてまして」と言葉を濁した。すかさず風見店長が口を挟んだ。
「そしたら涼介さんは、ダイニッケンの方がええ訳ですね？」
　ウ～ンと考えこんだ後、涼介は答えた。
「アマミヤさんには本当に感謝しています。でも、もう決めた事ですので」
　風見店長の目が鈍く光った様に見えた。
「四ツ葉さんは本体価格おいくらなんですか？」
「総額で二千万円を切ってます」と涼介は答えた。
「カーテン、照明、エアコンは？」と風見店長が畳み掛けるように聞いた。涼介は事務的に答える。
「もちろんそれも入ってます。本体価格は一千四百万円台です」
「えっ、そんな……」風見店長は絶句した。念のため出口さんが「床面積はどうですか？」と質問した。
「四ツ葉さんの方が広いです」
　僕と出口さんもただ、ため息をつくしかなかった。この期に及んで、了解もなく勝手に縮小プランを作り、コストダウンを図ろうなどというダイニッケンの企みは、姑息な手段としか見られないだろう。おまけに縮小プランには、要望されていたボウウィンドウなど、金のかかりそうなものは全てカットされていた。その真四角のプランは、何の魅力もない、ただの出来の悪い、建て売り住宅を思わせた。完敗であった。結局、三人は肩を落として帰るしかなかった。風見店長は、部長に電話で相談する気も失せたようだった。
「しょうがないわ。まあ三人で部長に怒られようや、なぁ」と風見店長が独り言の様につぶやいた。
　展示場に帰ると、スタッフルームには相変わらず犬丸部長が、椅子にふんぞりかえって待っていた。
「部長、申し訳ありませんでした」と僕が頭を下げる。
「あれはアカンですわ。四ツ葉が二百万円も安いですわ。一千四百万円代ですわ」と風見店長。
「床面積も向こうが広いです」と出口さんが続ける。僕達三人のそれぞれの謝罪と報告は、犬丸部長もある程度予想していたらしく、すねた子供の様に横を向いたままだ。ボールペンで灰皿を

、神経質そうにカチカチ叩きながら
「うむ。それでちゃんと資料は引き揚げて来たんだろうな？」
　誰も返事をしなかった。
「プランは？　見積もりは？　プレゼンボードは？　そのまま置いて来たのか！」
「ハイ、申し訳ございませんん」と僕は頭を下げた。
「バカやろう。サッサと返してもらってこい！」
　僕は犬丸部長の怒声を背に、スタッフルームを飛び出した。展示場の外に出ると、すでに黄昏時で、夕日が辺りを淋しげなオレンジ色に染めていた。勝負に負けた事の屈辱に、押しつぶされそうだった。きっと敗戦処理のため、ファンからヤジと怒声を背に受けながら、マウンドに向かうピッチャーの心境は、こんなものなんだろうと思った。
　僕は再び青井涼介の家に向かい、頭を下げて、設計プランと見積書、僕が手作りしたプレゼンテーションボードを引き取った。これらの作業は、男女の関係を清算するのとよく似て、とても冷ややかで事務的に行われた。これで青井涼介との関係は全て終了した。帰り道、夜の闇は次第に深くなりつつあった。その闇は、一筋の光も逃さず飲み込む様な、ブラックホールに思えた。僕は夜の闇の中で、そのままブラックホールに向かって何処までも吸い込まれていこうと思った。

８　出現

　ダイニッケンホーム名古屋支店のフロアに春の爽やかな朝陽が差し込んでいる。設計と工務の机の列、明るく照らされた南側の窓際には、一組のソファセットがあった。本来ならこのソファセットは、支店長や部課長クラスが、打ち合わせや相談に使うのだろう。しかし、いつの間にかその一角は、営業や工務、設計たちの喫煙場所になってしまっていた。たっぷりとした、座り心地のよさそうな革張りソファに、どっしりと腰掛けているのは軽部さんだ。タバコをくゆらせながら、にこやかに工務課の人達と話をしている。ブラインドから差し込む朝陽が、立ち昇る紫煙を階層的に照らして行く。
「軽部さん、あのサービス工事、なんとかしてくださいよ」
「な～に言うとるだ。あれぐらい工務の方で何とかせにゃいかんわ」
　軽部さんはにやにやしている。そこへ総務の女性事務員が、熨斗で包まれた清酒を、重そうに持って来た。清酒は一升瓶二本を、ビニールひもで丁寧に縛ってある。
「おう、ありがとうねぇ」と笑いながら、軽部さんは清酒を受け取る。今日は地鎮祭なのだろう。これから、現場の祭壇にお供えするのだ。他にも着工中の物件の上棟式について打ち合わせしている営業もいたし、完成引渡について工務と話している営業マンもいる。ここだけは朝陽がスポットライトの様に彼らを照らしている。彼らとは全く対照的に、北側の日の当らない壁際の椅子に、やる事もなく座っている五人の営業マンがいた。その中には僕と徳光君も入っている。二人とも、南側の陽の当る営業マンたちの会話を、ただうらやましげに見る事しか出来ない。月初の全体会議が始まるまでのこの時間は、まだ、契約棟数ゼロの営業マンにとっては、全く身の置き所は何処にもなかった。
　午前九時を五分ほど過ぎた頃、石橋総務部長が別室から現れ、総ガラス張りの南側フロア中央に立った。背の低い、ずんぐりした石橋部長の立ち姿は、現代的で機能美に溢れた支店フロアと、全く似つかわしくなかった。どこかの田舎の村人たちによって作られた、道端のお地蔵さんのようである。
「お待たせしました。それでは四月の全体朝礼を始めます。まずは先月の受注報告からですね。犬丸部長お願い致します」
　石橋部長に代わって、中央に進み出た犬丸営業部長が、ダブルのグレーのスーツに身を包み、やや突き出た腹の前で手を組んだ。左手にロレックスの腕時計が鈍く、重苦しい光沢を放つ。
「それでは先月の受注実績をご報告致します。契約した営業マン諸君は前へ」
　そう言われて四人の営業マンが前に進み出て、一列に横に並んだ。犬丸部長が報告を続ける。
「まずは神宮展示場、鈴木君、一棟。契約金額一千八百二十五万円。おめでとう！」
　皆が一斉に拍手した。同じ様に三人の営業マンの名前と契約金額が報告され、その度に皆が拍手した。僕も徳光君も、彼らに賞賛の拍手を贈る。ここで支店長が、契約出来た営業マン一人一人と握手を交わしてゆく。
「おめでとう」と一人づつねぎらいと賞賛の声がかけられる。
「それでは支店長よりお言葉を頂きます」と進行役の石橋部長が言った。濃紺のスリーピーススーツ姿の金山支店長が、皆の方に向き直った。黒い靴は、一点の曇りもなく磨き込まれている。

上品なドット柄のエンジのネクタイは、男性ファッション誌に出てくるモデルが締めたものの様に、絶妙のバランスでディンプルが形作られている。
「先月受注出来た営業マン諸君、おめでとう。皆さんもご承知の通り、今や住宅産業は危機的な状況と言われております。つい何年か前は住宅着工件数が百万戸を割ったと業界を震撼させましたが、今やそれも八十万戸割れが目前に切迫しておる状況です。まさにワンドッグイヤーという言葉に象徴される様に、時代の変遷はエモーショナルで、ダイナミックな動向をますます加速させております。その様な現状を踏まえ、競合他社との戦いに勝ち抜く強靭な営業力が、今こそ渇望されているときなのです。その中で我が社が勝ち残って行く道をどう模索して行くのか？契約出来なかった営業マン諸君には猛省を促したい。営業は売ってナンボの世界であります。他社の方が見積もりが安かったから。他社の設計の方が魅力的だったから。そんな言い訳など、私は聞く耳を持ちません。どんなに高かろうが、どんなプランであろうが、どんなに知名度が低かろうが、何が何でも売ってくる、売ってみせる。そんな気概を持って日々の営業に邁進して頂きたい。以上であります」
　支店長は厳しい目で、最後に僕たち売れない営業マンを眺め回した。この後、工務課、設計課、総務部より報告事項があり、全体朝礼は終了した。
　十二階の名古屋支店のフロアから、僕はエレベーターホールに出た。
ーサッサと展示場へ行こう。ー
　僕の頭の中は、今抱えている見込み客の事で一杯だった、僕と同じ様に、何人かの営業マンや工事監督が、それぞれの展示場や、あるいは工事現場へ向かおうと、下りのエレベーターが来るのを待っている。そこへ風見店長が慌ただしく駆け込んで来た。各店長は定例通り、全体朝礼の後は、引き続き店長会議に出席する事になっている。これには支店長も同席する。
「アマミヤ君ちょっと待てや！」そう言って風見店長は僕を引き止めた。風見店長は僕の肩を抱いて、自分の方に引き寄せた。ものすごく気持ち悪い。店長は僕をエレベーターホールの片隅へ連れて行く。そして辺りに聞こえない様に、わざわざ僕の耳元に口をつける様にしてささやく。そんなことしなくてもいいのに。
「多田さんは、どないなってるんや？来週ぐらいには申し込み貰えるんか？」風見店長の口から、タバコのヤニの臭いがぷんと鼻を突いた。
「まだ分かりません」と僕も小声で答える。
「分かりませんではアカンやろ。今から店長会議なんやぞ。ワシは支店長や部長に、また怒られなアカンやないか。どないしてくれるんや」と一呼吸置き、もう一度、
「さあ、どないしてくれるんや？」と嫌らしい顔で僕に詰め寄った。
「はぁ、申し訳ありません」と僕は小さな声で謝る。
　ここが我慢のしどころだ。僕はグッとこらえる。風見店長からの、ねっとりする様な叱責はもう慣れっこだ。風見店長は一度後ろを振り返り、さも周りに知られるのが嫌な様に、僕にささやき続ける。
「青井さんみたいな失敗は、もう出来んのやぞ。このままの成績やったら、えらい事になるんやぞ。分っとるんか？」

「ええ、分ってます。出来るだけがんばりますので」僕の返答に風見店長は、鼻をならす様に一息し、
「ほな、しゃあないな。多田さんは有力見込み、いうことで報告しとくわ」
「はい、ありがとうございます」
　僕の言葉を無視する様に、風見店長はさっさと踵を返して、磨りガラスの向こう側、支店フロアの中へ姿を消した。
「やれやれ、なんとかやり過ごした。」と僕は内心ほくそ笑んでいた。
「今に見ていろ」
　自分の眼がいつの間にか、獲物を狙う様な獣じみた眼付きなっているのが、自分でもよく分かった。有力見込み客として風見店長が報告する事になった多田さんからは、実はすでに建築申込書にサインをもらっていたのだ。入金はまだしていない。それで良いと僕は思っていた。今はこの客を表に出したくはなかったのだ。情報は隠すに限る。風見店長に言われるまでもなく、青井さんの時の様な失敗は二度としたくはない。それを誰よりも強く心に刻んでいるのは他でもない、僕自身なのだ。
　僕はあの失敗で学習したのだ。
　申し込みなど何の当てにもならない。大事なのはあくまでも「契約書に客がサインをすること」であり、契約金を客からもぎ取ってくる事なのだ。
　僕は十月に入社して以来、六ヶ月間受注ゼロだった。しかし僕はこの六ヶ月間で多くの事を学んだ。その中で最も重要な事は、住宅営業の世界は「結果が全てである」という事だった。極論すれば途中のプロセスなど、どうでもいいのである。勝てばそれでいいのだ。住宅営業マンの仕事は、０点か、百点満点か、勝ったか負けたかの、どちらかしかないという極めて特殊な世界だった。
　また、住宅営業は野球選手とよく似ていた。今年打率三割でホームラン王に輝いたとしても、次の年に一割しか打てなければ自由契約、つまりクビである。住宅営業を何年も続けていくという事は、野球で言えば毎年三割バッターで居続けなければいけないという事を意味していた。この仕事は強靭でタフな神経を持っていないとやっていけない。
―今に見ていろ、いつか見返してやる。―僕はこの業界で生きていくことを固く心に誓った。いまの僕が狙うもの、それは申し込みのプロセスを飛ばして、いきなり本契約に持ち込む手法、いわゆる一発契約という奴だった。
　ボーンという、下りエレベーターの到着を告げる、くぐもった音がした。シュッという軽い音と共にドアが開く。僕はひとり、エレベーターに乗りこんだ。僕は振り返り、一階へのボタンを押した。エレベーターホールを無言で見つめた。エレベーターのドアは、僕の異様にぎらついた視線を断ち切る様に、ゆっくりと閉まった。
　次の日曜日の午後、僕と設計の出口さんは、多田さんの家族に初回プラン提出をした。何と自分でも信じられない事だったが、僕はプランも見積もりも、何もなしで多田さんに建築申込書にサインをもらったのだった。もちろん申込書の金額欄は空欄にしてある。風見店長に申し込みを報告しなかったのは、そう言う事情もあった。
　多田さんの設計プランは二世帯住宅である。今回のプラン提出では、展示場一階の和室を使

った。僕はとても落ちついた心境だった。一階の和室は、八畳間が二間続きで南北にレイアウトされている。僕達は南側の和室に座っていた。床の間に向かって左手に、書院の窓がしつらえられ、障子からは、まろやかな光が差し込んでくる。床の間の右手には違い棚も設けられ、この部分だけは本格的な数寄屋建築の様式に則っている。
　床の間を背にして、たっぷりとした座布団に胡座をかいて座っているのが、若夫婦の父親、多田正義である。さっきから、どうも厚みのありすぎる座布団が尻にあわないのか、時折尻を持ち上げて、座り直す様な仕草をしている。その右側に若夫婦二人が座った。奥さんの膝の上には、今年一歳になる女の子が抱かれている。知らない所へ連れてこられた赤ちゃんは、目の前にいるスーツ姿の僕と出口さんを見て、母親の胸に顔を押し付けた。
「多田さん」と僕は父親の方を向いて、微笑んで話しかけた。
「どうしていきなり建築申し込みしてくれたんですか？」力の抜けた、リラックスした質問だった。自分も成長したもんだと、我ながら感心した。これまでの数々の失敗の経験が、僕を「住宅営業マン・アマミヤ」という役者に変えたのだ。僕はその役柄を演じていた。
「だってさぁ」と父親は答えた。
「見りゃ分かるでしょ。この人らの格好さぁ」と若夫婦の方を右手で指差した。
　若夫婦は二人共に髪を染めていた。ダンナの赤く染められた髪の毛は短いのだが、整髪料で固められ、その先端は天に向かって逆立てられている。耳からは、カミソリの形をしたピアスがぶら下がっている。奥さんの方は、金髪のロングヘアーの一部を紫に染めている。上着は二人共に黒の革ジャンパーで、シルバーのチェーンがじゃらじゃらとついていたり、ところどころに鋲が打ってある。ダンナの方は黒のぴったりしたジーンズに黒地の革ベルトを締めている。これにも金属を思わせる小さな四角錐の突起が、規則正しく並んでいた。奥さんは黒革のミニスカートにいくつも楕円形の穴の開いたタイツをはいている。玄関に脱いで来た靴は、ダンナが黒のコンバース。奥さんは大きなベルトが四つほどついた、いかつい黒のブーツである。明らかにパンクバンドのメンバーを思わせる格好だ。こんな連中が住宅展示場を歩く事自体、場違いな感じがする。ただ、目の前にいる奥さんの、穴空きタイツの膝の上には赤ちゃんがいて、パンクな母親の顔をあどけない顔で見上げている。この児のおしめを替えたりする場合もあろうかと考えて、今日は和室にしたのである。
　父親の多田正義は、黒い引き締まった顔を緩ませて愉快そうだった。
「今回の立ち退きの話も決まったしさ。そろそろ建て替えの準備もせないかんと思ってね」
　父親は茶碗の緑茶を一口うまそうにすすった。有田焼の茶碗を茶托にゆっくりと置きながら、
「試しにね、孫の面倒は母さんに任せて、二人だけで下見に行ってこいと、俺はこの二人に言った訳さ」
　下見の結果に父親は、してやったりと膝を打って納得したそうだ。
「アマミヤさんとこは、上場しとる会社でしょ？」
「ええそうです。東証、大証一部上場でございます」
「やっぱりねぇ。俺の睨んだ通りだよ。大きい会社はさぁ、社員教育がちゃんとしてる訳さ」
「はぁ、ありがとうございます」
　僕と出口さんは深く頭を下げた。この言葉を風見店長に聞かせてやりたいものだ、と僕は皮肉

な感じで聞いていた。
「アマミヤさんだけだった訳よ。ちゃんと俺たちに頭下げてくれたのは。こんな格好してててもサ。ちゃんと俺らの話、聞いてくれたでしょ」と息子の多田栄造が言った。
　父親と息子は、共にトラックの運転手をしている。主に瓦やブロックなどの建築資材を運搬しているという。名古屋の南に位置するＴ市は、瓦の製造で全国的に有名である。そこに出入りする、運送業者のトラックドライバーなのだ。若夫婦のなれそめは聞いていないが、二人とも楽器は何も出来ないそうだ。週末にこういう格好をして、パンクバンドのライブで盛り上がる事を、楽しみにしているのだという。
　本当に人は外見では分からない。しかもこの多田さんは、とびきりホットな客なのだ。
父親の多田正義が住む家の西側には、北西から南東方向に緩やかなカーブを描いて、県道が通っている。この道路の道幅を広げる事になったのだ。拡幅工事に伴って、その道路は若干位置を東側へずらす事になった。予定では、多田さんが今住んでいる家の、西側の壁の所まで道路がかかる予定なのだ。これに伴い多田さんの敷地も一部、収用される事になった。更には、建物の建て替え費用や仮住まいの費用もかかる。昨年から、役所の担当者と度重なる補償交渉の結果、父親は相当の補償額を勝ち取る事に成功した。ハウスメーカーにとっては、まさによだれの出そうな美味しい話である。鎖をジャラジャラさせた、パンクファッションの若いカップル。まさかこの二人が、本当に家を買いに来たとは、どのハウスメーカーも思わなかっただろう。僕ももちろん、二人を最初に見たときはそう思った。恐らく二人はデートの帰りだろう、粗品目当てで立ち寄った、冷やかしのカップルだと思ったのだ。展示場の不動さんからは、
「客の中にはね、うちの展示場の備品、盗んで行く人もいるから、変な人来たら見張っててね」と言われていた。浴室や洗面、キッチンには、以前、高価な海外ブランドの石けんやシャンプー、ポプリ、入浴剤、タオルなどがディスプレイされていたが、全て盗まれてしまったという。今は盗まれそうな小物は一切置かない事になっている。
　パンクファッションの若い二人連れを、僕は半分監視するために、また、ついでに営業トークの練習台にするつもりで、出来るだけ丁寧に応対した。意外にも、建物の構造の話も、若い二人は真剣に聞いていたし、施行実例などの資料を見せながらの説明でも、二人の目線が同じ様に動くのが分かった。
　家を建てる客と、建てない客との違いは、いくつかの特徴がある。営業マンが説明している時、夫婦二人の目線が揃ってこちらを見ている、というのは、まず間違いなく建てる客の特徴だった。
　若い二人は、ちゃんとアンケートに住所を書き残していった。そこで夜間訪問をかけてみた。行ってみると、比較的小綺麗な賃貸マンションであった。
　二階の通路、一番奥の部屋を訪問した時、この二人は夫婦であり、子供までいる事を知った。そして親の立ち退きの件や二世帯住宅を考えている事を聞き出した。僕はすぐに父親、多田正義の家にも訪問をかけた。それからは、まるで動く歩道に乗っているかの様に、スムースに全ての物事が、良い方向へ向けて進んで行った。
　僕は青井涼介の時の失敗を冷静に分析していた。あの時涼介は、全て自分に任されていると言

っていた。僕はそれを鵜呑みにした。いつまでたっても、父親はなぜか現れなかった。そして電撃的な四ツ葉ハウスとの契約。あの時涼介は、父親からの強い意思表示があった事を僕に告げた。何の事はない。結局、最後の決定権は、しっかり父親が握っていたのだ。僕はそれを見抜けなかった。四ツ葉ハウスはそれを見抜き、父親との交渉に成功したのだ。だから僕は負けたのである。

今回の多田親子もやはり同じだ。結局、土地と金を握っている者が決定権者なのである。他の者はいろいろ雑音をまき散らすだろうが、そんな事はどうでもいい。

僕はターゲットを多田正義一人に絞り、幾度かの自宅訪問と展示場での応対、引渡し済み物件の見学などの行動をとった。僕は念には念を入れた営業活動に心がけたが、多田正義本人は、僕との初回面談で、もうここにすると決めていたそうだ。

「一番最初に、うちに挨拶に来たハウスメーカーにしようと思っていたんだわ。それがアマミヤさんだった訳さ」と父親は語った。僕が差し出した建築申込書に、父親はあっさりサインと実印をくれたのである。

　モデルハウスの和室では、初回設計プランのプレゼンテーションが続いている。和室の床の間には水墨画の軸が掛けられている。床は畳床で、そこに備前焼の小振りな壺が飾られている。これだけだと展示場としては地味に思えるが、壺に生けられた薄桃色の生け花が華やかさを添えている。ただし、これは造花である。今、その床の間の斜め前には、鋲を打った革ジャンパーに、髪を赤や金に染めた若夫婦が座っている。床の間を背にした父親の多田正義は腕を組んで、設計プランと資金計画書を睨んでいる。
「いかがでしょう？」と僕は父親の顔色をうかがう。
「まぁ、母さんにも見てもらわんといかんしなぁ」と父親は息子夫婦の方を見て、はぐらかす様に言った。今回のプランは一階部分三十二坪が、ほぼそのまま真上に立ち上がった様な総二階建てだ。父親世帯が住む一階、若夫婦が住む二階を合わせた延べ床面積は、六十三・五二坪。建物本体価格は二千八百五十八万六千二百五十円。坪単価は四十五万円の設定にしてある。ダイニッケンホームとしては、かなり頑張った坪単価だ。大ぶりな座敷机の上には、僕が作ったプレゼンテーションボードも載せてある。先ほどから若奥さんの方は、プレゼンボードに貼付けてある、システムキッチンや洗面台、浴室の写真をじっと見つめている。これらの写真はカタログから、僕がカッターナイフで丁寧に切り抜いて、台紙に貼付けた物である。
「栄造さん、プランの方はいかがですか？」と僕は聞いてみる。
「うん、いいんだけど、ちょっといいですか」
「はい」
「システムキッチンってさあ、他にないの？　うちの嫁さん、こう見えても料理うまいんですよ」と多田栄造は、若い妻への配慮を見せた。確かにこのプランでは、価格を抑えるために、設備は全て標準仕様品である。設備仕様をグレードアップすれば、当然値段も上がる。建物本体以外にも、カーテン、照明、エアコンに始まり、敷地全体を巡らす簡単な土留めと、玄関周りの外構工事、それに浄化槽の費用もかかる。資金計画の総額は三千九百九十万円。かろうじて四千万円は切るという額にしてある。
「もちろん、他のシステムキッチンへのグレードアップは出来ますよ。ぜひ、当社のショールームでご覧になってください。ご予算内で、なんとか収まる様に調整してみましょう」と僕は玉虫色の返事をする。若夫婦は僕の国会答弁の様な返答では、どうも不満のようだった。若い母親の膝の上では、子供がそろそろ飽きて来たのか、手に持っていたおもちゃを、辺り構わず投げたりしている。
「このプランは多田様の家作りの、たたき台ぐらいに思ってください。ご契約頂けるなら、ウチはプラン変更でも何でも、多田様がご満足頂けるまで、トコトンお付き合いしましょう」
　我ながらカッコいいセリフを言ったものだと思た。こういう場面では「これから長いおつきあいが始まるのですから」等というのが営業マンの常套句になっている。だが、その歯の浮く様なセリフを言った営業マンのほとんどは、次の年にはすでに退職している。それがこの業界の実体なのだ。僕自身、来年までこの会社にいられるかどうか分かったものではない。しかし、多田さんが契約してくれるのなら、当然、完成引渡まで、パートナーとして付き合う覚悟だ。

「出口さんもいいですよね」と僕は横にいる設計者に同意を促した。
「もちろんいいですよ。ご契約頂けるなら、プランぐらい何度でも書き直しますから」と頼もしい返事をしてくれる。
「だったら」と父親の多田正義が口を開く。「家建てるなんて、一生のうち、そうザラにない事だしね。どうかな、息子んところのキッチン、考えてもらえんかね」
「来た」と思った。
　僕はサッカーのゴールが目の前に見えるようだった。そこに今、ふわりとパスされたサッカーボールが宙に浮いている。後はこれをゴールに押し込むだけだ。
　切れ味の良い、鮮やかなシュートなど要らない。ヘディングでもいい。膝で入れてもいい、尻でもいい。どんな不様な格好でもいいから、ゴールネットさえ揺らしてしまえばこっちの勝ちだ。僕は口の中が乾くのを感じた。これからボールを、ゴールに押し込むのだ。
「では、システムキッチンをサービス工事という事で、ご契約書にサイン、頂けますか？」
「うん。いいよ」
　ゴールネットが揺れた。決まった。
　僕は自分に、ゆっくり、落ち着け、と言い聞かせた。
「では、ここでしばらくお待ち頂けますか。店長の了解を得て参りますので」
「ああ、ハイ、いいですよ」
　僕と出口さんは多田親子に一礼して、和室の襖を閉め、急いで二階に上がった。スタッフルームのドアを開けると、いつもの様に換気扇のそばで風見店長が、ポンプの様にタバコを吹かせている。僕と出口さんを、いつものドロリとした眼で見つめた。
「どないや、多田さんは？」とのんびりした口調で尋ねた。
「いけます。契約取れます」
　店長の眼付きが、「契約」という僕の言葉に、急に反応するのが分かった。僕は続けた。
「条件があります。若夫婦のシステムキッチン、客の好きな様に変更してあげてほしいんです」
「それをやったら契約する言うとるんやな？」
「そうです」と出口さんが横から言葉を挟む。
「よっしゃ。早よせい。ＯＫや！ワシすぐ挨拶にいくわ」
　風見店長は、急いでタバコを灰皿に押し付けると、僕と出口さんより先に立って、二階のスタッフルームを出ていく。階段を慌ただしく駆け下りた。
　僕と設計の出口さんは、再び多田さんの前に正座した。今度は中央に風見店長が、やや前のめりの姿勢で正座している。風見店長は時折、横目で若夫婦の出で立ちを、ちらちらと見ている。
「初めまして、店長の風見でございます。このたびは我が社を選んで頂きまして、本当にありがとうございます」とまず父親の多田正義に頭を下げ、両手で恭しく名刺を差し出した。父親は名刺を片手で受け取りながら、
「あなたが店長さんね、よろしく頼みますわ。こっちが、うちの息子夫婦と孫です」父親が言い終わらないうちに、店長は素早く次の名刺を取り出す。パンクな若夫婦へ、体ごと頭を下げながら、

「どうぞよろしくお願い致します」と名刺を渡す。名刺は息子の多田栄造が片手で受け取った。名刺に印刷してある「店長」の二文字をじっと眺めた。その後、名刺を妻の前へ置いた。父親がここで口を開いた。
「さっきも、アマミヤさんに話したんだけどね」
　そう父親が言ったとたん、風見店長が、
「息子様ご夫妻の、システムキッチンの件でございますね。ハイ、伺っております」と体を乗り出す様にして答えた。眼は父親の方を串刺しにしようか、というほど真剣に見つめている。
「どうでしょう、店長さん。ここは一声、店長さんのお力で、この若い二人を助けてやって貰えんでしょうか。お願いしますわ」と父親は、風見店長に向かって、丁寧に深く頭を下げた。
「ああ、何をなさるんです。どうぞお顔を上げてください。もう、そんな事なさらないでください。ご契約頂けるのなら、ワタシ喜んでお勉強させて頂きますので」
　風見店長は大げさな仕草で身を乗り出し、父親の顔を両手で上げさせようとする。
「そしたら……」と父親は風見店長を見つめる。
「ええ、もちろんご要望通りに、サービス工事とさせて頂きます」
　父親はほっと息を吐いて、感心した様に首を軽く左右に振る。
「さすがやねぇ。一部上場企業の店長さんは違うねぇ。いやぁ、店長さん、それにアマミヤさん、出口さん本当にありがとう」
　そう言って父親は、胡座をかいていた足を正座に直し、深々と僕たち三人に頭を下げた。
「いけません、いけません。頭をお上げになってください」と風見店長は、再び大げさなジェスチャーで、三文芝居の様な仕草をする。僕は店長の猿芝居を横目で見ながら、
「では、栄造さんご夫妻のキッチンにつきまして、弊社の名古屋支店一階のショールームでお打ち合わせ致しましょう。その時に、ご契約書にサインと実印を頂くという事で、よろしいですよね」
「ご契約金額は百万円ですわ」風見店長が間髪いれずに後を継いだ。
「ほんなら、その時に百万円と実印持っていきますわ。現金で持っていくでね。領収書用意しとってね」と父親が言う。そこへ不動さんが、お盆にお茶のお代わりを持って現れた。
「喉が乾いたでしょう。お茶のお代わりどうですか」とゆったりと、紅茶を父親の方へ差し出す。
「お孫さん、女の子？　何ヶ月ですか？」と聞く。
「女の子の初孫ですわ。『そら』という名前です。今、十ヶ月で、そろそろ伝え歩きするんですわ」と父親は、顔をほころばせながら答えた。不動さんは、パンクな母親の方にも紅茶を置きながら、
「初めてだから大変でしょう。母乳で育ててるの？」とやさしく語りかけた。
「うん、母乳」と奥さんは素っ気なく答える。不動さんは赤ちゃんの方に向かって、
「そらちゃーん」と手を振る。そらちゃんはうれしそうに手足をばたつかせた。これから、この子が暮らす家を作っていくのだ、と僕は思った。

１０　サイン

　一週間後、僕たちは、名古屋栄の支店の一階にあるショールームにいた。息子の多田栄造夫妻は、システムキッチンを陳列した一角にいた。夫の髪の毛は相変わらず赤い。今日も鋲を打った革ジャンに、ジーンズと言ったスタイルである。
　奥さんの方は、紫がかった赤のレザージャケットに豹柄のミニスカート。黒の網タイツにベルト付き黒のブーツという格好だ。二人ともキッチンの扉を開けしめしたり、ＩＨヒーターの操作盤を押したり、シンクや調理スペースの使い勝手を確認したりしている。
　父親の多田正義は、打ち合わせテーブルに座り、ベビーカーに載せたそらちゃんをあやしている。設計の出口さんは、若夫婦に付きっきりだ。
「これカッコいいじゃん」とさっきから息子の栄造が、電動で上下に動く、吊り戸棚を動かしている。吊り戸棚のスイッチを押す指には、ドクロのリングが鈍く光っている。
「シロッコファン、て何なの？」と奥さんが設計の出口さんに聞いている。そんなやり取りを横目で見ながら、僕と風見店長は、父親の多田正義の前に契約書類を広げていた。父親は契約書の方を見ない。しきりに、そらちゃんを乗せたベビーカーを前後に揺らしている。しびれを切らした様に、風見店長が切り出した。
「どないですか、ここにご住所とお名前、書いてもらうだけですわ」
　そう言って契約書の「注文者、住所、氏名」の欄を指差した。その下の欄は「請負者、住所、氏名」の欄になっており、大日本建材株式会社住宅事業本部の本社住所、社名と朱色の社印がすでに押されていた。契約書の一ページ目、左上には、すでに一万五千円分の収入印紙も貼り付けられ、割り印が押されてある。後は多田正義のサインと実印を貰うだけの状況だ。
　ショールームが入った、このビルの十二階オフィスでは、この契約書を受け取るため、犬丸部長がタバコをくゆらせながら待っているはずだった。
「どないですか？　もう、サイン頂けませんか？」風見店長が少し焦った感じで迫る。父親はずっと押し黙ったままだ。
　そこへ、全身ピンクのスーツの上下を着た中年女性が現れた。小太りでスーツは窮屈そうだ。首からぶら下げる、チェーン付きの金縁メガネをかけ、厚ぼったい唇に大げさに赤い口紅を付けている。名古屋の中心地のショールームへ来るのを楽しみにしていた様に、安物のネックレスやイヤリング、指輪、とにかく光る物は全て身に付けて来た、みたいな出で立ちである。これも安物の香水の臭いで、僕はくしゃみが出そうになる。
「あのシステムキッチン。あれ、いいわよねぇ、アマミヤさん」
「奥様、申し訳ございません。オプションという事で、差額が発生致しますが」と僕は多田正義夫人に、申し訳なさそうに返事をする。夫人は全く意に介さない様子で、
「あのトイレの手洗い付きの収納棚。あれもいいわよねぇ。スッキリ収納出来て」
「はぁ、申し訳ございません。あれも差額が、恐らく二十万円ほど出てしまうと思います」
「アラ、そうなのぉ？　せっかくのいいお話だったのにねぇ。息子もオタクに決めるつもりでいたのにぃ。せっかくのいいご縁だと思ったのにねぇ。残念ねぇ、ねっ、そらちゃん」とわざとらしく夫人は、そらちゃんを覗き込む。僕はちょっとうんざりして、風見店長の顔色を伺う。風見

店長も考えあぐねている。いつもの陰鬱なサバの眼が、より深く、暗く、沈んだ眼になっている。
　いよいよ契約書にサインという段取りになった時に、奥さんの多田福子が割り込んで来たのだ。次々に要求をエスカレートさせる。契約書へのサインを人質に取って、「あれをよこせ、これもよこせ。」と言い始めたのだ。
「キッチンにもカップボードがないと、使い勝手が悪いわよねぇ。そんなの付いてて当たり前よねぇ、アマミヤさん？」と、多田夫人は横目で僕の顔色を伺う。
「ハァ、そうですか」と言うしかない。僕は少し体がふらふらする。胃も痛かった。今日が契約日という事で、昨日から緊張のあまり、一睡もしていない。食事も喉を通らなかった。
　先週の約束では、息子夫婦のシステムキッチンを自由に選んでよければ、契約書にサインする、との事だった。今回のプランでは、息子夫婦の二階のシステムキッチンは幅二メートル五十五センチ、いわゆる二五五〇タイプの一列型。最もシンプルな形式である。標準仕様で、せいぜい三十四万円。それをどのように好きなオプションで飾り立てようと、差額は最高でも百五十万円以内で収まるはずであった。しかもそれはカタログ価格である。仕入れ値を考えれば、ダイニッケン側としては、それほどの大きな値引きにはならない。
　本体工事を現金値引きするよりも、メーカーにとってはサービス工事にした方が、損失は遥かに少なくて済むのだ。そう言う計算もあって、先週は風見店長も簡単に合意した訳だが、多田夫人が横入りして来たために、大きく目算が狂ってしまった。
　今、このビルの十二階では、犬丸部長が今か今かと契約書を待っているはずだ。
「ご主人、奥様、それではシステムキッチンの変更、カップボードの追加、それにトイレの収納棚のサービス工事。これをウチが飲めばサイン頂けますね？」と風見店長が念を押した。夫人の厚ぼったい唇が、さもうれしそうに大きくニヤリと微笑んだ。大げさな付けまつ毛の細い小さな眼が、メガネの奥で喜びの色に変わる。それを見て夫の多田正義は、
「まあ、それでええのやないですか」と答える。
「少しお待ちください」そう言って風見店長は席を外した。ショールームの奥に行き、携帯電話をかけている。犬丸部長に了解を得ているのだろう。ずいぶん時間がかかった。その間、風見店長は携帯を耳に当てたまま動かない。僕は手に汗をかいていた。やがて、店長の上半身が急に動いた。何度か空中に向かって頭を下げた後、急いで席に戻って来た。
「すいません、えらいお待たせしました。多田さん、ＯＫです。営業部長のＯＫが出ました。さあこちらにサインしてください」
　そう言って契約書を多田正義に突き出した。ボールペンを差し出す。
「ここですわ。ここにサインですわ」
　そう言って契約書の住所氏名欄を、とんとんと指差す。多田正義は、軽いため息をつく様にしてボールペンを握る。僕は印肉を机の上に置いた。印鑑を押す時に使う、ゴムの下敷きも用意した。多田正義の右手に握られたボールペンのペン先が、契約書の上に静かに降りようとしている。僕と風見店長は、ボールペンのペン先をじっと見つめた。ペン先が契約書の紙に触れたその瞬間、

「ところでさぁ。」と夫人が突然喋りだした。
ーまたかー
　僕と風見店長は大きく息を吐いた。僕はもう緊張で吐き気がしていた。
「お風呂はカビがよく生えるのよぉ。さっき見たんだけど、あそこの浴室乾燥暖房機、あれがあると助かるのよねぇ」と夫人は僕と風見店長を交互に見る。
　その顔でニタァーッと笑った。
　見てはいけないものを見ている感じだ。
「ああ、ええです、ええです。分かりました。浴室乾燥暖房機ですね。付けさしてもらいますので」と風見店長は何度も頷いた。
「もうこれで最後ですよ。これでサインお願いします」
　風見店長に促されて、夫の多田正義はゆっくりと契約書に、住所と名前を書き込んでゆく。僕と風見店長はそのペン先をじっと見つめた。二通の契約書にサインを書き終えると、父親はセカンドバッグから実印を取り出す。僕は契約書の裏に、緑色のゴム製下敷きを敷いた。父親が印肉に印鑑をつける。そして署名の右側、点線で丸く縁取られた捺印欄に、実印を力強く押す。それから各ページの折り目の真ん中に、割り印を押していった。契約書一冊目に続き、二冊目にも同じ様に実印を押してゆく。こうして契約書類は完成した。
「それじゃこれ、お金」と父親は、焦げ茶色の使い込んだ革のセカンドバッグから、厚ぼったい封筒を取り出す。札束は僕の前に置かれた。
「失礼致します」
　僕はその封筒を両手で持ち上げ、軽く一礼する。中の一万円札の束を取り出した。それを眼見当で半分に分けた。とんとんと札束を机の上で揃えて整える。それから左手の小指と薬指に札束の端を挟んだ。左手の親指で外側へ弓なりに反らせる。右手でゆっくりと一枚一枚、パラリ、パラリと数えてゆく。
　これまで毎日のように、チラシで作った札束を数える練習をした。ここでミスをするわけにはいかない。札束を持つ手が震えている所を客に見せてはいけない。相手には、もしかするともうバレているのかも知れない。僕が住宅営業一年目の素人だと言う事だ。だが、客の前では、経験豊かな営業マンを装わなくてはいけない。僕は二つに分けた札束を数え終えた。
「確かに、ご契約金、百万円、お受け取りさせて頂きました。こちらが領収書でございます」僕は緊張の糸を途切れさせない様、そう言いながら領収書を差し出した。契約は全て滞りなく終了した。
ー終わったー
　うれしいというよりも、この緊張感から解放される事にほっとした。
「これから、どうぞよろしくお願いします」父親の多田正義が、改まった様子で僕と風見店長に深く頭を下げた。
「恐縮でございます。こちらこそよろしくお願い致します」
　風見店長はそう言って父親の両手を握った。僕も父親と握手した。なんだか夢の中にいる様な感じだ。まだ契約したという実感が沸かない。
「そしたら、さっそくご契約させて頂いた事を、営業部長に報告してきますわ。上で待っとるん

ですわ」と風見部長は苦笑いしながら、エレベーターフロアに向かった。僕はそのままショールームに残り、多田親子につきあう。
　しばらくすると、犬丸部長自ら風見店長を従えて、一階のショールームに現れた。晴れやかな営業用の笑顔だった。多田親子に名刺を差し出しながら挨拶をする。
「部長の犬丸でございます。この度は、ありがとうございます。いやぁー、多田さん、厳しいですね。僕も風見君も冷や汗かきましたよ」
「えらい、ご無理を言いまして。」と多田正義は恐縮したようだった。
「多田さん、今回は特別に支店長決裁を頂きましたのでね」と犬丸部長は恩着せがましく言う。
「もう、ワタシ、支店長に首締められそうになりましたよ。今後とも、何卒、お手柔らかにお願いしますね」と釘を指し、部長はさっそうとした足取りで、ショールームから外へ出て行った。今日、支店長は休みなのだが、きっと犬丸部長は支店長に電話で絞られたのだろう。
　契約手続の後、ショールームの打ち合わせ室で多田親子に昼食を出した。仕出し屋からは松花堂弁当を用意させた。三時にはお茶と春らしい和菓子を出した。システムキッチン等の細かな打ち合わせが終わったのは、午後四時を少し過ぎた辺りだった。ショールームの駐車場から帰って行く多田親子を、三人は揃って見送った。
「アマミヤ君、車が次の交差点曲がるまで頭下げとけよ」と風見店長は、僕と出口さんに注意を促した。言われた通り僕達三人は、馬鹿丁寧な長いお辞儀を、表通りの歩道上で行った、通行人がチラチラと見ながら通って行く。上目遣いに車が見えなくなったのを確認すると、三人はようやく体を戻した。
「本当にお疲れさまでした、出口さん」と僕は、ずっと客に付き合ってくれた設計の出口さんに感謝した。
「いや、頑張ったのはアマミヤさんですよ」と出口さんも僕をねぎらってくれる。
「店長ありがとうございました」と僕は素直に頭を下げた。風見店長は僕に右手を差し出した。僕はその右手を両手で握った。
「うん、ようやった。アマミヤ君、これでええんや。上に何言われてもな、契約したらそれで勝ちなんや」
　恐らく犬丸部長に色々と嫌みを言われたのだろう。しかしこれで店長としても、名東展示場は、今月一棟の契約報告が出来るのだ。出口さんは、資料とファイルを抱えて十二階のオフィスへ戻る。僕と店長は、各自の車で展示場へ戻った。
　名東展示場の駐車場に着くと、僕の体は雲に乗っている様にふわふわした。きっと睡眠不足と、食事を摂っていない事によるものだろう。オレンジ色の西日が眩しい。モデルハウスの勝手口から中に入ると、リビングでは軽部さんが、一組の客と立ち話をしていた。階段をゆっくりと上がった。スタッフルームのドアを開けると、
　ーパンッーという乾いた音と共に、ちょっと焦げ臭い様な臭いが鼻を突いた。細かい紙の糸くずの様なものが空中を舞っている。
　ーパンッー
　もう一度音がする。クラッカーを鳴らしているのは、中地さんと野呂さんだった。徳光君もいる。不動さんもいた。皆笑顔だった。拍手で僕は迎えられた。握手を求められる。野呂さん、

中地さん、徳光君と、僕はがっちり握手した。
「おめでとう」
　不動さんが声をかけてくれた。
「本当にありがとうございました」
　僕は不動さんの丸っこい、小さな手を握った。その手は、モデルハウスを影で支える、母親の手だった。涙がにじんだ。そこへ風見店長もドアを開けて入って来た。あまりの大騒ぎぶりにちょっと驚いた様子だったが、すぐ徳光君の方を見て、
「どうや、アマミヤ君やったぞ。二世帯住宅やぞ。それも申し込み無しの一発契約や！」
「すごいですね」と徳光君が本当に感心した様に言った。
「二棟分ですよ、アマミヤさん。これからが大変なんだから」と中地さんが笑顔でいう。
「しんどかったら、半分僕が貰うから」と野呂さんがおどけて言う。皆が笑った。風見店長も珍しく笑顔だ。そこへゆっくりと、スタッフルームのドアが開いて、軽部さんがその巨体を現した。ちょっとびっくりした様に、眼を開いて僕を見つめた。
「アマミヤ君、契約したのか」
「ハイ、ご心配おかけしました」
「そうか、うん、おめでとう」
　軽部さんは、ゆっくりと右手を僕の方へ差し出した。僕は、その右手をがっちり握った。軽部さんの目を、真正面から見つめた。その顔は笑ってはいなかった。ただ、僕の右手を強く握り返してくれた。髪の毛が一本もない軽部さんの丸い顔は、涙で歪んで見えた。
「現金客なんだろ。気をつけろよ。気を抜いちゃいかんぞ」
「ハイ、ありがとうございます」
　軽部さんの大きく丸い手を握りながら、僕はようやく、自分は本当に契約したのだと思った。たった一棟だけど、とにかくゴールネットにボールを蹴り込んだのだ。それはとても不様なゴールだったかもしれない。しかしその不様なゴールへの道が、いかに大変なのかは、この部屋の連中が誰よりもよく知っている。
　僕はその人達から賞賛されているのだ。
　野球で言えば、サヨナラ満塁ホームランをスタンドへ放り込んだルーキーの様なものである。スタンドのファンから拍手の嵐に包まれながら、僕はゆっくりとダイヤモンドを一周しているのだ。まさにそれはウイニングランだった。対戦相手のチームは、僕に何も手出し出来ない。ただ僕が、ゆっくりとダイヤモンドを廻る姿を、見守る事しか出来ないのだ。
　審判がゲームセットを宣言するのは、僕がホームベースを踏んだときだ。いつ試合を終わらせるのかも、僕自身の思うがままなのだ。グラウンド内の注目は、全て僕へ注がれている。
　誰もが自分に向かって拍手している。
　僕はあらゆる全能感を味わいながら、照明灯の光の中、ホームベースを踏み締めた。

１１　暗雲

　五月一日。月初の全体朝礼。僕は晴れやかな顔で皆の前に立った。朝陽が眩しく差し込む十二階のフロアの南側、犬丸部長が僕の名前を読み上げる。
「名東展示場、アマミヤ君、契約金額三千四百九十二万一千百六十三円」
　皆がどよめく。今回契約出来た営業マンの中では、三千万円台は僕ただ一人。受注金額はトップだ。グレーのスリーピース・スーツに身を固めた金山支店長と、僕はがっちり握手した。
「アマミヤ君、これでいいんだ。がむしゃらに行けよ」そう言って支店長は、僕の肩をポンと叩いた。今回の受注は、風見店長、犬丸部長、そして金山支店長の協力と理解がなければ、とても実現出来なかった。かなりの額の、サービス工事を了解してくれた金山支店長には、本当に頭が上がらなかった。しかし金山支店長は決して怒ってはいない。それは風見店長が言ったように、この業界ではどんな形であれ、契約したヤツが勝者でありヒーローなのだ。
　全体朝礼が終わり、エレベーターホールに出た僕は、ひと時、勝者の気分を味わった。他の展示場の営業マン何人からか、握手を求められる。僕は胸を張って握手に答えた。高揚感に包まれながら展示場へ車を走らせた。
　世間では今、ゴールデンウィークの真っ最中だった。今日、多田親子はプラン打ち合わせのため、展示場に来る事になっていた。なるべく早くプランを確定させなければ、内装の色決めや、土地の地盤調査、そして確認申請など、次のステップへ進めない。ところがこの日、打ち合わせを始めたとたん、いきなり大きな問題が発生した。
「これ、南向きの建物ではないんだね」と父親の多田正義が切り出したのだ。設計の出口さんが答える。
「はい、南西を向いております。図面の下側が新しく出来る道路の予定境界線です」
「こういう図面の書き方ってさぁ、不親切じゃないの」と父親が、やや、むっとした表情で言った。
「と申しますと？」
「俺ら素人だで。図面の下側が南や、と思うとったんやわ。まさか下が西っていうのはさぁ」息子の多田栄造が続けた。
「このリビングとか、寝室とかの窓があるでしょ。すると、これは全部、南向きじゃなくて、西に向いてるという事でしょ？」
「ああ、いえ、正確には南西という事なんですが……」と出口さんが説明する。
「俺が言いたいのはさぁ。西日がまともに当るんじゃないのかって言うこと」と栄造は図面を指差しながら、やや語気を荒げる。
「そう言う、西日が強く当る様なプランを作るのが、不親切じゃないかって思う訳さ」と、父親の正義が優しい口調で釘を刺す。
「誠に申し訳ありません。私共の配慮不足があったかもしれません」と僕はひとまず多田親子に謝った。
「出口さん、多少、建物を南側に振ってみる事は出来ませんか？」と僕は設計の出口さんに打診した。

「やってやれない事もないでしょうが」と出口はちょっと口ごもった。
「それだと、ご要望の駐車スペース四台分が取れないでしょうね」
「それはイカンわ」と父親の多田正義が不満そうに言葉を挟む。
「息子の嫁さんの軽四もあるしさぁ。しょっちゅう、親類も来るんだわ。どうしても四台分必要なんだわ」
　結局この日の話では、設計プランを一からやり直す事になってしまった。まさか契約が済んでから、こんな事になるとは予想もしていなかった。多田親子は笑顔を見せる事なく帰っていった。この火種、大火事にならなければいいが、と思いながら僕はスタッフルームへ戻った。
　そこには珍しく犬丸部長が座っていた。
「よぉ、アマミヤ君。どうだ、次の見込み客は？」
「いえ、まだですね」と僕は答える。傍らには風見店長が、いつもの様に書類の束の前で座っている。今日はタバコは吸っていない。もう一人、徳光君が黒縁メガネの顔を、ややうつむき加減にして、神妙な面持ちで座っていた。中地さん、野呂さん、不動さんはこの場にいない。犬丸部長が何をしに来たのか、恐らく見当がついていて、下で接客をしたり、庭の掃除でもしているのだろう。
「なぁ、徳光君よ」
「はい」
「この反省文でいいのかよ」
「はぁ」と徳光君は神妙に頭を下げる。
「風見君の話だと、君、設計プランばかり描いてるらしいな。えぇ、違うか？」と犬丸部長は徳光君を問い詰める。
「僕は、いえ、私は親が工務店をやっているものですから、設計プランを描けるのが自分のセールスポイントだと思ってまして」
「だからダメなんだよ」と犬丸部長は徳光君の弁解をあっさり切って捨てた。
「風見君、売れない住宅営業マンの共通点は？」
　風見店長は上体をまっすぐに伸ばし、
「すぐに他社とのプラン合戦に持ち込む事ですわ」
「その通り」
　満足そうに犬丸部長は微笑む。確かにそれは、住宅営業初心者が陥りやすい罠だった。客から依頼があれば、新米営業はついうれしくなる。客を逃してしまう事を恐れる。だからすぐに設計プランを持っていくのだ。だが、客は一社だけに設計プランを依頼しているのではない。何社にも設計プランを依頼しているのだ。そして何通りもの設計プランを前に、素人である客は途方に暮れるのだ。こんな客は、いつまでたっても迷い続ける。契約に結びつかない。
「徳光君、いつまでこんなマンガ描いて遊んでるつもりなんだ」
「いえ、遊んでるつもりはありません」
　徳光君も、真剣な眼で犬丸部長を見返した。
「よぉーし。そうか、遊んでないのか」

「ハイ」
「だったら、なんで受注出来ないんだ」
「それは、その……」
「徳光君」
「はい」
「この業界では、それを遊んでいるって言うんだ。君はこの半年、仕事もせずに遊んでたのさ」
　徳光君は、決して遊んでいた訳ではなかった。彼は営業の最前線で戦った、僕たちの仲間だ。僕も、彼が彼なりに努力していたのはよく知っていた。客への訪問もさぼっている訳でもないし、電話訪問も人一倍やっている。単調なチラシのポスティングだって尋常な数ではない。しかし彼はまだ結果を出せていない。
「徳光君。君の反省文、これは一体なんだ。どういうつもりでこれを書いたんだ」
「はい、今まで受注出来なかった原因は何かと、いろいろと自分なりに考えまして」
「そうだな。他社の方が安くって、設備もよくって、設計プランもいいんだな」
「ハイ」
「おまけにツーバイフォーは、まだ日本であまり知られていないからだ、という事だな。それが言いたい訳だな、君は」
「ハイ」
「風見店長」と犬丸部長は呼びかけた。
「悲しいよなぁ。君も大変だな。こんなバカを誰がウチに入れたんだ。俺は本当に悲しいよ」
　しかしバカ呼ばわりされた徳光君も僕も、大阪本社で副社長以下、専務、取締役等、経営トップ五人がずらりと並んだ最終面接をパスし、採用されている。犬丸部長の言動は、僕たちの採用を承諾した、経営トップへの批判と受け取れなくもない。
　それにしても徳光君は、気の毒にもずっと晒し者だ。犬丸部長の執拗な心理的攻撃を、うまくかわす事が出来ず、真正面で受け止めてしまっている。これでは徳光君は精神的に持たないかもしれない。僕はこの痛ましい光景を見ながら、早くこの場から逃げたいと思った。
「アマミヤ君よぉ」と僕の心を見透かした様に、犬丸部長が今度は僕に声をかけて来た。事務用の椅子にふんぞり返って座り、大股に足を開いている。右手に挟んだタバコを一口吸い込み、ふーっと天井に向かって煙を吐く。犬丸部長の体から吐き出された煙は、遠慮なく部屋一面に広がった。
「アマミヤ君。キミ、客から、土下座したら契約してやるって言われたらよぉ、どうするよぉ？」
ーそら来たーと思った。ここで変な答えをしてしまったら、それこそ犬丸部長の思うツボだった。僕はもう十分、犬丸部長の部下へのいじめパターンと、それを受け流すコツの様なものを学習していた。僕はわざと笑顔を作った。そしてちょっとおどける様に
「ええっ！　部長、マジですか？　土下座だけで契約してもらえるんですか？　じゃ喜んで！　何回ぐらいご希望ですか？」と間髪入れずに答えてみせた。
　犬丸部長は天井を見上げながら、一瞬ニヤリとした。そしておもむろに上体を起こし、徳光君の方に向き直った。

「なっ、徳光君。アマミヤ君なら分かってるんだよ。これが契約出来る営業マンだよ」
　そう言って徳光君が書いた反省文を、ゆっくりと本人の目の前で真っ二つに破いた。その後、破れた二枚の紙を丁寧に重ねて、真ん中からもう一度破いた。それをぞうきんを絞る様に両手で握り潰し、澄ました顔で灰皿の上に置いた。徳光君の膝の上の両手が、ぎゅっと握りこぶしになるのが見えた。
「すいません、それじゃ僕、多田さんとこへ行ってきます」
　僕はカバンを持ってスタッフルームの外へ出た。こういう時に契約客を抱えているというのは、ありがたい事だとつくづく感じた。特に何も咎められる事なく、ぼくはこの嫌な空気から逃がれる事が出来た。厳しいかもしれないが、徳光君にとってこれは、乗り越えなければならない壁だと僕は思った。
ーなんとか乗り越えてくれー
　僕は心の中で、徳光君にエールを送った。

　もう契約が終わった多田親子に、多くの時間を割いている場合ではなかった。僕は焦っていた。九月末までに、あと三棟の受注をしなければ、僕は正社員にはなれない。残り四ヶ月間で三棟の受注は、ベテラン営業マンでもなかなか達成出来る数字ではなかった。一年目の新人営業マンにとって、それはほぼ不可能に近い数字なのだが、それでも僕には、やるしかないのだ。
　一年間のうち、集中的にアンケートがとれる時期が三つある。盆と正月、そしてこの五月、ゴールデンウィークである。
　住宅営業マンは、この三つの時期にひたすらアンケートを取りまくる。まさに全力を傾ける。その大切な五月のゴールデンウィークは、多田親子の打ち合わせなどで、ほぼ費やしてしまった。新しいアンケートもほとんど取れていない。こんな事をしていられない。気は焦るばかりだが、しかし多田親子は、幾度も設計変更を繰り返していた。
　金曜の夕方、展示場にいた僕に、設計の出口さんから電話があった。
「今、メールでそちらに送りましたんで」
「お疲れさまです。どうもありがとう。さっそくプリントアウトしますね」
　僕はパソコンの前に座り、電子メールの添付ファイルを開けた。ＣＡＤソフトがゆっくりと起動し、しばらく待つとモニター画面いっぱいに、新しい多田さんの平面図が現れた。僕はファイルメニューから、印刷をクリックする。Ａ三サイズの用紙をプリンターの背中に入れると、プリンターはさも大儀そうな音を立てて、じりじりと平面図を印刷してゆく。出て来たＡ三の紙を、僕は事務机の並んだ中央に広げてじっと見入った。
「多田さんのですか？」と不動さんが展示場案内のチラシを折る手を休めて、僕の方を覗き込んだ。
「いいプランになりました？」
「いや、結構厳しいですよ」と僕は答えるしかない。明日はもう多田親子がやってくる。とりあえずこの目の前のプランで、どれだけの魅力を伝えられるかだ。
「二世帯住宅って大変でしょう。二つの家族の面倒を見る訳なんだから」
　不動さんが柔らかい口調でそう言ってくれる。そこへドアを開けて風見店長が入って来た。い

つもの様に全く目に表情はない。大きな黒いカバンを事務机のそばに置くと、「ふうっー」と大げさにため息をついて椅子に座った。それからいつもの通過儀礼の様にタバコに火をつけ、ポンプの様に規則正しく煙を吸い込む。エネルギー源のニコチンとタールを、体の中にたっぷり取り入れると、黒い使い込んだカバンの中から、角二サイズの茶封筒を取り出した。そこから何枚かの紙の束を引き抜き、僕の方に置いた。
「アマミヤ君、それキミの分や」
　見ると、客が記入したアンケートが二十枚ほどある。
「何ですかこれ」
「アンケートや」
「いや、分かってますけど。どこから廻って来たんですか？　これ」と僕はアンケートの内容を詳しく見始める。
「徳光君や」と風見店長は素っ気なく答えた。更に他のアンケートの束を、何等分かに分けようとしている。
「どういう事ですか？」
　悪い予感がした。
「うん？」と風見店長は、相変わらず死んだサバの様な目をして、僕を不思議そうに見つめた。

「辞めたんや、徳光君」
「ええっ！　本当ですか」とびっくりしたのは不動さんの方である。僕は当ってしまった予感に、身震いがする思いだった。悔しさがこみ上げてくる。
「店長」
　僕は風見店長を見つめた。
「どうして留めなかったんですか？」
「ん？」と風見店長は、相変わらず怪訝そうな顔をしている。
「しょうがないやろ。徳光君の方から、辞める言うてきたんやから」
「でも店長、それを引き留めてあげるのが、店長の仕事じゃないですか」と不動さんも眉を八の字にして店長を問い詰めた。
「うーん、そう言われてもなぁ。もう辞表も出とるしなぁ」
　この人には何を言ってもダメだと思った。部下を守ろうとか、育てようとか言う気持ちなど、最初からない人なのだ。僕は目の前のアンケートをもう一度見つめた。誰が見てもただの紙切れである。しかし、住宅営業マンにとって、アンケートは貴重な財産である。
「アンケート一枚五万円だぞ！」
　いつか犬丸部長に言われた言葉が頭をよぎった。徳光君はどんな想いで、この一枚一枚を手放したのだろう。なんだかいたたまれない気持ちがして、僕はスタッフルームの外に出た。壁に贅沢なタイルがはめ込まれた階段を駆け下りた。この階段の手すりには、凝った彫刻が施されている。こんなわざとらしい高級感の演出が妙に虚しい。まるでお城の様なモデルハウスの外に出た。

　徳光君にお別れの挨拶だけでもしたかった。僕は携帯に登録してある、徳光君の電話番号を探した。ディスプレイに表示された彼の電話番号を見て、少し迷ったが、通話ボタンを押した。何回かの呼び出し音の後、電話がつながった。
「はい」
　暗く沈んだ徳光君の声が聞こえた。
「アマミヤです」
　僕は後の言葉が続かなかった、こんな時、何を言えばいいのだろう。全く適当な言葉が思い浮かばない。
「アマミヤさん、いろいろとお世話になりました。実は僕……」
　そう言った徳光君も、その後言葉に詰まってしまった。僕は悔しさで胸がいっぱいになった。僕は唇を噛んだ。目には少し涙がにじんだ。わざと顔を上げると、展示会場の駐車場が見えた。これから客先へ訪問に行こうとしているのだろう、ダークスーツにアタッシュケースを提げた営業マン達が、数名歩いていくのが見える。
　僕は管理事務所が入っているセンターハウスの裏手に、静かに歩いていった。周りには誰もいない。それでも僕は、ダイニッケンのモデルハウスに背を向けて、身を縮めるように携帯電話を耳に当てていた。
「今、聞いたところなんです。徳光君の事。いきなりだったもんで。なんと言っていいか」
「すいませんアマミヤさん、心配かけまして。僕には、もう、無理です」
「何かあったんですか？」
　返事はなかった。だが電話はまだ切れていなかった。電話の向こうで、徳光君がただじっと感情を押し殺そうとしているのが分かった。
「……部長から……」
「犬丸部長ですか？」
「……ええ」
　やはりと思った。先日の犬丸部長からの厳しいプレッシャーが、徳光君にはキツかったのだろう。僕とほぼ同じ時期に入社して、まだ一棟も受注がない。追いつめられ、何処にも逃げ道はない。その緊張感にもう耐えきれず、会社を辞めてしまったのだ。僕は彼の緊張を柔らげるつもりで話しかけた。
「気にする事ないですよ、犬丸部長の事なんか。適当に聞き流しておけばいいじゃないですか、あんな人」
　電話の向こうで徳光君は黙ったままだった。でも電話は切ろうとしていない。やがて携帯電話の向こうで、かすかにではあるが、徳光君の呼吸が荒くなるのが分かった。その呼吸には震えが加わり、やがて明らかな嗚咽に変わった。
「大丈夫ですか？」
「すいません、大丈夫です」徳光君は、こらえていたものを吐き出す様に続けた。
「言われたんです、部長から」
「何をですか」僕は彼の言葉を静かに受けとめた。しばらく、また沈黙があった。何かを言おうとしているが、徳光君は言い出せない様子だった。僕はそれを察した。

「いいですよ、徳光さん。言いたくなければ。無理する事ないんですよ」
「……言われたんです」
　再び徳光君が答えた。
「はい」僕はじっと聞き入る。
「……俺の……股の下を……くぐれって言われたんです。犬丸部長から」
　電話の向こうで、再び徳光君の嗚咽が聞こえた。僕は唇を噛んだ。携帯を握りしめ、いつまでもその場に立ち尽くした。

１２　異動

「これ、改良とは言えんよなぁ」
　新たに一から作り直した修正プランを前に、父親の多田正義が腕を組んだ。
「二間続きの和室がなくなっとるがね。それに、坪数も三坪減っとるがね。もっと安くなるのが筋じゃないかね」
　結局この日、プランは確定するまでに至らなかった。多田親子からまた、新たな変更の要望があったのだ。その修正プラン提出は、一週間後になる。来週はもう六月だ。打合わせが終わり、僕と出口さんは、モデルハウスの外へ多田親子を見送った。リビングへ戻ると、不動さんが多田親子のティーカップを片付けていた。
「アマミヤさん、店長が呼んでましたよ」
「あっ、そうですか」と僕は返事をして、ゆっくりと二階への階段を上った。僕にとって風見店長は、徳光君の事があってからというもの、一緒の空気を吸うのも嫌な人だった。スタッフルームのドアを開けると、風見店長は受話器を持ったまま、僕の顔をちらりと見た。少し慌ただしい様な雰囲気が伺える。
「店長、何かあったんですか？」
「アマミヤ君、キミ、明日から神宮店や」
「はぁ？」
　僕は体が固まる思いがした。自分が今、何を言われているのか理解出来ない。店長は続ける。
「その件で明日、支店で会議があるから。朝九時や。営業マン全員支店に集合や」
「何かあったんですか？」僕は繰り返し訊いた。風見店長は少しイライラした口調で答えた。
「ワシにも分からへんわ、そんなもん。とにかくエラい事になっとるぞ」
　風見店長はそれだけ言うと電話にかじりついた。そして他の営業マンや店長たちと連絡を取り始めた。

　翌日、朝八時四十五分に、僕は支店十二階のフロアに出向いた。重い磨りガラスの扉を、よいしょっと開けると、中は静まり返っていた。一番手前の総務の机には、三人いる女性社員のうち、二人が席に着いていた。淡々と事務処理をこなしている。
　総務の次、営業の机の列には誰もいない。一番奥の工務、設計の方を見ると、スタッフが窓際のソファで、いつものように朝の喫煙、コーヒータイムを楽しんでいる。このフロアに、支店長、部長、店長クラスの姿は一人も見当たらない。
「今日は営業マン全員集合と聞いたんですけど」と僕は、総務の森下さんに尋ねてみた。
「ああ、なんかそれ、変更になったみたいですよ」と森下さんは、僕の方に首だけ向けて答えた。全く人騒がせな事だ、と僕は少し怒りを覚えた。
　この名古屋支店だけの事らしかったが、朝令暮改はあたりまえ。支店からの指示や連絡事項が、度々変更されるのだ。僕達末端の営業マンの予定など、全くおかまい無しに、トップからの指示はコロコロ変わる。もしかすると昨日の「明日から神宮店」という指示も変更になるかもしれ

ない、と僕は淡い希望を持った。
「風見店長は来てるんですか？」と僕は再び尋ねてみた。
「ええ、もう皆さん会議に入ってますよ」と森下さんはあっさり答える。そこへ石橋要総務部長が、奥の会議室のドアを開けて出て来た。まるでお地蔵さんが歩く様に、上体を動かさず自分の机の前まで歩いて来た。机の右側の引き出しを開けて、プラスチックのファイルを取り出す。引き出しを締めようとした時、僕と目が合った。
「ああ、アマミヤ君、ちょうどいい所に来たね」
　そう言って、もう一度机の中央の薄い引き出しを開けて、一枚の紙を取り出し、僕に差し出した。
「もう風見店長から聞いてると思うけど、配属先変更の辞令が降りてます。六月一日付けで、アマミヤ君は神宮展示場勤務になりますのでね」
　ひょい、と渡された紙切れを、僕は何だか要領を得ないまま受け取った。石橋部長はまたさっきと同じく、お地蔵さんが歩く様に会議室へ戻っていった。
　支店の時計が午前九時を指した。天井のスピーカーからは、まるで学校の様に始業のチャイムが鳴った。それに合わせて、今までソファでタバコを吸っていた工務課や設計課の連中は、片手にコーヒーカップを持ったまま、ゆっくりと自分の席に戻って行く。これは一連の流れ作業のような、いつもの朝の日常風景なのだろう。その中で僕は一人虚脱感に襲われていた。怒りの感情もあまり沸かない。いまから神宮展示場へ挨拶に行く気も起こらなかった。
ー自分の荷物をまとめようー
　そう思って、僕は支店の重い磨りガラスのドアを手前に引いて、エレベーターホールに出た。下りのボタンを押してエレベーターが来るのを待った。
　今回の配置転換と、自分の営業成績が関係しているのは、間違いない事だと思われた。しょせん一棟だけの受注では、評価の対象外だと言わんばかりの人事だ。「都落ち」と言う言葉がぴったりする様な心境だった。豪華できらびやかな名東展示場から、僕は追い出された。それに比べて、もっさりとした、これと言って特徴のない、神宮展示場のシルエットが頭に浮かんだ。
　僕はドアの開いたエレベーターに乗り込んだ。自分の気分と同じ様に、エレベーターは僕一人を乗せて、ビルの中をまっすぐ降下していった。
　名東展示場のスタッフルームに入ると、不動さんと軽部さんがいた。朝の十時前に軽部さんを見かけたのは初めてだった。軽部さんは机に座って電話中だった。
「うん、ああ、何でもいいよ。うぅむ」
　ゆったりとしたダミ声が、朝のスタッフルームに響く。不動さんは、ひと口のガスコンロでお湯を沸かしていた。
「お早うございます。アマミヤさん、コーヒーにします？」
「おはようございます。ええ頂きます」
　軽部さんは受話器を耳に当てたまま、ちらりと僕を見る。電話の向こうから聞こえる声に、うんうんと二回頷いた。不動さんは、紅茶とコーヒーの用意をしながら、小さな声で僕に尋ねた。
「アマミヤさん、支店に行ってたの？」
「ええ、そうです」

「じゃ、入れ違いね」
　ちょうど野呂さんと中地さんも、朝一番で支店に向かったのだという。電話をかけている軽部さんの前に、紅茶のカップと皿を置きながら、
「なんだか、大変な事になりそうね」と不動さんがつぶやくように言う。
「不動さん」と僕が声をかけたときだった。
「ああ、終わった、終わった」と軽部さんが受話器を降ろした。
「おう、アマミヤ君、どうだ？　あの二世帯、うまく行っとるか？」
「まぁ、何とかやってますよ」と僕は苦笑しながら答えた。
「大変だな。どいつもこいつも」と軽部さんがつぶやくように言う。不動さんが軽部さんに尋ねた。
「もう決められたんですか？」
「ああ、今、決まった。向こうはワシの肩書きをどうするか、色々考えとったらしいが、ワシはそんなもんいらん、平社員でええと言ってやったわ。営業顧問という事で、部長待遇らしいよ」
「何の話なんですか？」と僕は二人の会話に割って入った。
「軽部さん、お辞めになるんですよ」と淋しそうに不動さんが答えた。
「何でですか？」と僕は訴える様に尋ねた。徳光君の退社、そして僕自身の神宮店への異動。緊急の営業会議に、今また軽部さんの退社の話。本当に何か、大変な流れが自分の身の周りで起こりつつあるのを実感した。
「まあ、古巣へ戻るだけだ」と軽部さんはそれだけ言うと、紅茶をゆっくり口に運んだ。軽部さんが元々、大手ゼネコンの住宅事業部にいた事は知っていた。そこを定年退職して、ダイニッケンホームに引き抜かれた人材だと聞いている。
「バカったれだわ、ここのトップは」
　軽部さんは紅茶のカップを置きながら、吐き捨てる様に言った。
「まだ着工中のお客さんがいましたよねぇ」と不動さんが訊く。
「それも誰かが引き継ぐだろ。引渡しまではワシが面倒見ると言うとるのになぁ。辞めるならいますぐ辞めてくれ、と抜かしやがった。全く呆れて物が言えん」
　軽部さんは、自分の気持ちを確かめる様に続けた。
「まあ、今年の決算発表の時から、恐らくこうなるとは思ってはいたがね。これだけ赤字を出せば、住宅事業部そのものが見直しになる。ここはもう長くは保たない。ワシはそう睨んで、古巣に声をかけておいたんだ」
　僕は目の前のコーヒーが、ゆっくり冷めてゆくのをじっと見つめた。
「アマミヤ君も次を考えといた方がええぞ」
　軽部さんの目が、ぎょろりと僕を覗きこんだ。僕は軽部さんの目を見た。この人からはいろんな事を学ばせてもらった。
「淋しくなりますね」僕がそう言うと、軽部さんはふっと一息ついて、少し微笑んだようだった。僕から目をそらした。
「さあ、それじゃ行くわ。不動さん、えらい世話になったね」
「また遊びに来てくださいよ」

「うむ」
　おとぎ話の住人の様な、非現実的な巨体を揺すりながら、軽部さんはひと抱えの書類だけを持って、スタッフルームの外へ出て行った。
「ここは長く保たない」
　軽部さんの言葉がいつまでも僕の耳に残った。
　まだ梅雨に入った訳ではないが、朝からしとしとと、細かな雨が降っていた。駐車場に車を止めた僕は、フロントガラス越しに、展示会場の東側に流れる運河を眺めた。
　熱田神宮と、この運河に挟まれるようにして「ＴＢＣハウジングプラザ神宮」がある。市営地下鉄の駅も近いせいか、駐車場から展示会場の通路を抜けて通勤する、サラリーマンの姿もちらほら見える。この近所にはマンションや団地が多いのだ。
　僕はスーツを濡らさない様に、傘を車のドアの外へさしてから、カバンを持って外へ出た。東側の運河には、いくつかの橋が架かっている。その袂には、青いビニールシートがいくつか見えた。どうやらホームレスの人達がここに住み付いているらしかった。駐車場の北側には、ログハウス風の建物がある。この展示会場の、管理事務所が入っているセンターハウスである。その隣には、なぜか巨大な赤い煙突が建っていた。恐らくここは、工場か何かの跡地なのだろう。その赤い煙突には「ＴＢＣハウジングプラザ神宮」と言う文字が、縦書きにペンキで塗られている。その野暮ったさと、煙突のうらぶれた感じが、なおさら僕の気分を重くさせた。
　僕は駐車場の西側に向かって歩いた。薄いブルーに塗られた通路に沿って、モデルハウスが両側に並んでいる。展示会場の中程には、イベントに使える屋根付きのステージがあった。もちろん今日は平日なのでイベントはなく、屋根のない客席部分は雨に濡れている。その南側に、ダイニッケンホーム神宮展示場モデルハウスがあった。イベント会場のすぐ近くなのは、悪くない位置だった。僕はやや気を取り直して、モデルハウスを眺めた。
　一部二階建ての建物は、二階部分にちょこんと寄せ棟の屋根が乗っかっている。一階部分の大屋根が、緩やかなこう配で建物に大らかさを与えている。通路側に面した一階部分だけにタイルが貼られている。それは名東展示場の様な、誰が見ても一目で高級と分かる様な代物ではない。どこかの雑居ビルにでも貼付けてある様な、薄茶色のタイルである。予算がないけれど、どうしてもタイルを貼りたいという、庶民のいじましい欲望を代表している様な貼付け方である。
　このモデルハウスを建ててから、随分時間が経つているのだろう。二階の外壁は、サイディングに吹き付け塗装であるが、軒裏などは、かなり薄汚れて見える。
　他社のモデルハウスなら、太陽光発電だの、超高気密高断熱だの、エコ住宅とか言う謳い文句が適用出来るのだろうが、このダイニッケンホーム神宮モデルハウスには何一つ当てはまらない。いかにも旧式モデルと言った風情だった。
　僕はエントランスの階段をいくつか上がり、黒い塗装の玄関ドアに手をかけた。名東展示場なら、重厚な無垢材で出来た親々ドアだが、ここのはペラペラのアルミ製親子ドアである。いまではどのハウスメーカーでも、断熱ドアが当たり前になっているが、このドアの薄さから、断熱材が入っていないのが分かる。
　玄関ホールに入り、傘を畳んで、陶製の傘立てに立てた。傘は僕の一本だけしかなかった。そ

の間に、どこか奥の部屋の方で、かすかにピンポーン、というチャイムの音が二度三度聞こえる。もちろんここもモデルハウスなので、玄関先にモニターカメラがある。来場者があると自動的にチャイムも鳴る。
　奥の部屋から、スリッパをパタパタ言わせて近づいてくる女性がいる。小柄なその女性は僕の姿を見て微笑んだ。鬱陶しい小雨を忘れさせてくれる様な、爽やかな笑顔だった。
「お早うございます。アマミヤさん、お久しぶりですね」
　笑顔の口元に、かわいらしい八重歯が見える。佐藤奈々子だった。
「お早うございます。今日からお世話になります。もう、福本店長は来てるんですか？」
「もう来ると思いますよ。スリッパどうぞ」
　佐藤さんが置いてくれたのは、比較的新しいピンクのスリッパで、なぜかクマのキャラクターが貼付けてある。それを見てちょっとひるんだ僕に、
「カバン持っていきますね」と佐藤さんは、甲斐甲斐しく僕のカバンを両手で持ちあげた。ニコニコした顔で奥の方へスタスタ歩いて行く。僕も彼女の後をついていく。廊下の奥の突き当たり、その手前左側に引き戸があった。そこがスタッフルームである。雑然とした部屋に入ると、すでにスーツ姿の男性が二人座っていた。
「今日からよろしくお願いします」
「こちらこそ、よろしく」
　男三人は、それぞれぎこちない挨拶を交わした。ブルーのネクタイを締めた小柄な青年は鈴木健一郎である。
　彼は、グレーの光沢のある生地で出来た、高価そうなスーツを着ていた。昨年入社の契約社員だ。入社時から神宮店に配属されていた。彼はすでに一棟受注しており、現在着工中だ。硬い髪は短く揃えてある。負けん気の強そうな、それでいておしゃれな青年である。確か、親は建設資材を扱う会社を経営していたはずだ。
　もう一人は中年男性である。斉藤和男。三十八歳。同じく契約社員だ。元々、植田展示場に配属されていた人だ。以前は、リフォーム会社のトップ営業だったという噂を聞いている。飛び込み営業が得意の、熱血型営業マンらしい。まだ受注はない。
　僕は見慣れないスタッフルームを、ぐるりと見渡した。広さは十畳ほどだろうか。南側に小さな引き違い窓がついていて、この部屋で唯一の窓だった。後はパソコンのラックや、玄関先を映すモニターテレビ、住宅地図などを収めたスチール棚、販売促進用のチラシを入れた段ボールなどが、雑然と置かれている。この部屋にも、一口コンロがついたミニキッチンがある。
　午前九時を少しすぎた頃、スタッフルームのもう一つの入り口である勝手口から、小太りの男性が現れた。小さな点の様な目、ハの字眉毛。福本店長である。
　勝手口は半畳ほどの広さしかない。傘は外に立てかけて来たらしい。手ぶらである。スリッパに履き替えながら、
「奈々ちゃん、オッハヨー。もう、皆来てるの？」
「はい、在間店長以外は」と佐藤さんがミニキッチンでお茶を入れながら答える。
「あっ、そう。うん。それじゃ始めちゃおうか」
　そう言って福本店長は、せかせかと歩いて、一番奥の窓際の机の前に立った。

「では朝礼を始めます」
　全員が立ち上がった。割とちゃらんぽらんなイメージしかなかった福本店長なのだが、意外にも毎日きちんと朝礼しているらしかった。名東展示場の風見店長のときは、そう言えば朝礼らしきものをやった記憶もない。
「えーっ、今日から新体制という事になりました。わたくし神宮展示場店長の福本治郎です。三十九歳」
　福本店長は、ひと言ひと言を、区切る様に話した。
「新しくこちらに来た斉藤さんと同じく、嫁さん、子供がおります。家族のためにも、自分のためにも、この神宮店、潰さない様に、皆さん頑張りましょう」
　こうして神宮店での第一日目が始まった。その後、土曜日まで来客はゼロであった。

１３　標準仕様

　僕は目の前で行われている、多田さんのプラン確定の作業をぼんやり眺めていた。僕と、僕の右側にいる設計の出口さんは、神宮展示場のカウンターキッチンを背にして、六人がけのダイニングテーブルに座っている。僕達と向かい合わせに、父親の多田正義と息子の栄造が座っている。出口さんが修正した設計プランを前に、両者の妥協点はじれったいほど決まらない。
　多田一家にとっては、今日が初めての神宮展示場である。そのせいか、さっきから栄造の母親、多田福子は、僕と出口さんの背中の方にある、システムキッチンのチェックに余念がない。ごそごそと引き出しを開けたり、あちらこちらの扉を開けたりしている。
「あらぁ～、アマミヤさん」
　僕は背中から響いてくる、その下品を絵に書いた様な声を疎ましく思った。もういい加減、この人の声を聞くのも嫌なのだ。それでも僕は我慢して、おもむろにキッチンの方に体をひねって向き直る。
「はい、どうかされましたか？」
　僕はそこに、金色の鎖付きの鼻眼鏡をかけ、こってりと肥満した体を窮屈そうに締め付けている、全身ビーズだらけのサマーセーターを着た母親の姿を見た。そのビーズと身に付けた様々なアクセサリーとの不協和音は、それだけで見ているこちらが疲れる。
「ここってさぁ～、展示場なのにキッチンに冷蔵庫も置いてないのねぇ」
　まぁ、正直痛い所だが、そんな些細な事を答えるのも僕はおっくうなのだ。
「はい奥様、申し訳ございません。最近はコスト削減という事もありまして。冷蔵庫を置けるスペースだけは、ちゃんと空けてございます。名東と違いまして、ここはあまり豪華には作られていないんですよ。あくまで『実際に建てられる家』というコンセプトで建てたモデルハウスでございます」
「ふぅ～ん」
　なんだかつまらなさそうに、多田福子は口を尖らした。首からぶら下げた、安物のキラキラ光るネックレスが、首筋のしわを隠している。
ーやれやれー　と思いながら、僕はダイニングテーブルに向き直る。再びプラン打ち合わせに参加するふりをする。
ーこんな事をしてる場合じゃないんだー
　新しい客も獲っていかなくてはいけない。
ーあと三棟ー
　もう六月も中旬だ。三ヶ月と半月で三棟は新人営業マンにとっては、奇跡でも起きない限り、達成不可能な数字だ。しかも神宮展示場モデルハウスは入場者が少なかった。すぐ北側にイベント会場があり、目の前には家族連れが幾らでもいるというのにだ。
　曇り空の日曜日の午後、イベントが催されている当日に、このモデルハウスにいるのは、多田親子と僕たちスタッフだけと言う有様なのだ。
「お茶をお持ちしました」
　キッチンのすぐそばの通路から、佐藤さんがお盆を持って現れた。僕の目は、何となく佐藤さ

んのシルエットを追いかける。
「かわいい人だよな、やっぱり。」と、佐藤さんの横顔を見て僕は思う。若い営業マンの鈴木健一郎や福本店長が、毎日の様に彼女にちょっかいを出しては、からかっている気持ちがよく分かった。
　僕は以前から女性に対して、ストレートに感情を出せない質だった。今までにも何回か女性を好きになった事はある。だけど自分からは、好きだという気持ちをストレートに相手に告白する勇気もなく、何度も恋愛のチャンスを取り逃がして来た。そう言う性格の僕が、最近妙に佐藤さんの事が気になっている。それは自分でもわかっていた。だけど僕は、なにより住宅営業マンなのだ。
「イカン、イカン、そんな浮ついた気持ちで家は売れないぞ」と僕は自分自身の気持ちに厳しい叱責を与えた。
　まずは何としても、目の前の多田さんの設計プランを確定させる事だった。金銭面の事は営業が関わる事である。プランが確定し、建物本体価格が決まるまでは、この客に付き合わなくてはならない。それが終わって、ようやく僕は多田家から解放され、次の客を獲ってゆく事に集中出来るのだ。
　また、多田さんの物件は、工務課の方から、七月着工、九月末引渡しと言うスケジュールがすでに組み込まれていた。
　どうしても九月末の半期決算に間に合わせたい、完工高に計上したい、という名古屋支店の上層部の思惑が見え見えだった。
　青井涼介のときの様な新婚家庭で、二人だけが住む、小振りな家ならまだ話は分る。しかし多田さんの物件は、二世帯住宅である。延べ床面積で、青井涼介の家の二倍程もあるのだ。それをいきなり三ヶ月で完成させ、引き渡してしまおう、という強引なスケジュールは、かなり危険な綱渡りと思われた。
　手抜きとまでは言わないが、突貫工事に近い事になるのは明らかだった。そんな事を知る由もない多田さん本人は、まだ今日の時点でプランをいじくっているのだ。
　建物を建てるには、役所の建築確認が必要だ。建築確認を申請するには、確定した平面図や立面図など、設計図書を市の建築指導課に提出しなければならない。その三週間ぐらい後に、ようやく建築確認が下りるのだ。
　七月一日付けで着工するためには、逆算すると、もう明日の月曜日には設計図書を出さないと間に合わない。何としても、今日中に設計プランを確定させる必要があった。そのせいか、設計の出口さんも、珍しく焦っている感じが伺えた。
　普通の客なら、出口さんもそれほど焦る事もないだろう。だが、何よりも設計の出口さんを悩ませていたのは、多田さん親子独特の思考パターンだった。ちょっと常識ではあり得ないほどの「がめつさ」が出口さんを悩ませていた。
「だからさぁ、このガラスをＬＯＷ－Ｅガラスに変えるだけじゃん。そんなもんサービスだがね」
　またこれだ。何でもかんでもサービス工事にしようとするのだ。

　出口さんも脂汗を流しながら答える。
「はぁ、それは後ほど色決めや設備仕様のご確認の時に、改めてお伺いするという事でいかがでしょう？」
「マジでやる気あるの？」と息子の栄造は語気を荒げる。
　これはまずいと思った。ぼうっとしていた僕も真剣にならざるを得ない。
「ところで多田さん、どうしてそのガラスにしてみたいと思ったのですか？」
　僕は少し話の流れを変えようと試みた。息子の栄造はあっさりと答えた。
「だってカッコいいじゃん」
　そのひと言に僕も出口さんも、頭を抱えて倒れ込みたい気持ちになった。
　ＬＯＷ－Ｅガラスには、通常のペアガラスより更に断熱性能を高めるため、その内側に薄い金属膜がコーティングされている。そのため他のガラスにはない、独特の金属光沢を発するのだ。
　多田栄造は、カタログか何かでそれをみて「カッコいい」と思ったのだろう。彼の思考パターンや価値観は、彼独自のカッコ良さの基準によって全て判断されるようであった。
「多田さんが、どうしても使いたいという事であれば、私共もＬＯＷ－Ｅガラスはご用意しましょう。ただし標準仕様品との差額が発生する事はご了解ください」
　出口さんの丁寧な受け答えに対し、多田栄造は明からさまに不快な顔を見せた。
「もう、何度言うたら分る訳よ。そんなもん契約してやったんだから、サービスに決まっとるがね」
「そうそう、サービス、サービス」
　母親の多田福子が、僕と出口さんの背後から、嬉しそうに合の手を入れてくる。前からも、後ろからも僕たち二人は、サービスと、おねだりの攻撃を受ける。僕と出口さんは渋々後ろを振り返る。僕だって、もうこんな打ち合わせは早く打ち切ってしまいたかった。
「はぁ、奥さま。お気持ちは分るんですが、やはり標準仕様品とオプションとの差額が発生する、という事をですね……」
と僕が言い終わらぬうちに、前から栄造が、
「そう言うさぁ、標準仕様っていう考え方自体をやめてほしい訳よ。こっちとしては」
　僕も出口さんも、その一言に、恐れに近い様な戸惑いを感じた。この親子は、ハウスメーカーの標準仕様設定と言うルールそのものを、根底からひっくり返してやろうとしているのだ。父親の多田正義までもが追い討ちをかけてくる。
「何でも選べるんだから注文住宅にしたんだがね。標準仕様なんて、そんなもん俺は知らんわ」
「何も選べないんじゃ、それは注文住宅じゃないでしょう？　そうでしょう？」
　揚げ足を取る様に畳みかけてくる。確かに注文住宅は何でも選べる。ただし、その代価をちゃんと払える能力がある人の事を、この世界では「客」と呼ぶ。しかし今目の前にいる、このおねだりばかりしている連中は、単なる「盗人」以外の何物でもなかった。
　いつのまにか母親は、リビングの方へ出て来ていた。そしてまた、何かおねだりのネタを見つけたようであった。
「アマミヤさぁ～ん、これがいいのぉ～」
　僕は耳を塞いでいたかった。多田福子は、玄関ホールからリビングへの入り口にある、親子ド

アを、両手でいとおしむ様に撫でさすっていた。その親子ドアには、アールヌーヴォー調磨りガラスが付いている。
「出口さぁ～ん、アマミヤさぁ～ん、これがいいのぉ～」
　多田福子はニタァ～と微笑んでみせた。
　人間のあけすけな物欲を、ここまでストレートに出せるキャラクターに、僕たちは呆然とその光景を眺めた。
　夕方いっぱいかかって多田親子のプランは確定した。すでに室内にはダウンライトの灯りが点き、外は夕闇であった。僕たちは出口親子の要求を全て飲み込んだ。正確には飲み込まざるを得なかったのだ。出口さんも僕も、ダイニングテーブルの上の資料の山を、無言で片付けた。テーブル上に飾られていた造花のオーナメントが、なんとも白々しく見えた。僕と出口さんは資料を抱えてスタッフルームへ戻った。
「何ですか、ありゃ？」
　スタッフルームにいた斉藤さんが、お疲れ様を言う代わりに、呆れ顔で声をかけて来た。恐らく僕らのやり取りを聞いていたのだろう。僕はハァとため息をついてから、
「まぁ、ああいう人達なんですよ」とだけ答えた。
「出口ちゃん」奥の席にいた福本店長が一言かけてくる。
「お疲れの所、悪いんだけどさ、このあいだ頼んだプランよろしくね」
「はい、今晩中には仕上げますよ」と出口さんは答える。設計も大変だ。出口さんの目の下には、薄い隈取りの様なものが見える。
「アマミヤちゃん」
　福本店長は、目上の人以外はほとんど「ちゃん付け」である。福本店長から話しかけられる内容自体は、はっきり言ってキツイ内容が多い。だから、せめて言葉だけは物腰柔らかく、という配慮だと思われた。
　勝つか負けるかの厳しい業界の中で、気持ちはささくれ立つし、追いつめられて、つい深刻になりがちである。そんな雰囲気のなか、コミュニケーションを円滑にとる手段として、福本店長は「ちゃん付け」をしているのだ。福本店長が僕の事を、それとなく気遣ってくれているのは「あ・うん」の呼吸で分った。
「アマミヤちゃん、どう、打ち合わせは？　ひと山超えたの？　しんどいとは思うけどさ、新規も獲っていこうよね」
「ご心配おかけしました。ありがとうございます。おかげさまでプラン確定しましたので、これから新規、頑張りますよ」
　福本店長は、人の良さそうなハの字眉毛の角度を、更に緩めて微笑んだ。いい人だな、と僕は思う。
「アマミヤさん」銀色のメタル製アタッシュケースを持った鈴木健一郎が、僕の目の前に、立ちはだかる様にすくっと立った。これから彼は夜訪に向かうのだろう。
「アマミヤさん、僕はあなたを余裕でブッチ切る」と、幾分芝居じみた様子で、宣戦布告する様に、僕の鼻先に人差し指を突き出した。その背筋はピンと伸びている。顔はやや上向き、鼻はツンと上を向いている。彼のそんな芝居がかった強がりが、ちょっと可愛いく見えるのだから、

得なヤツだなぁ、と思ってしまう。
　僕はいつかの犬丸部長の様に、椅子に座って背を持たせかけ、足を横に組んだ。
「何をこいつ、生意気な。」
　僕は少し笑って、鈴木君の強がりな目を真っ直ぐ見返した。しかし、自分でも分ったのだが、明らかに僕の眼力は弱かった。
　今の僕にとって、鈴木健ちゃんと受注レースをやっている気分ではなかったのだ。健ちゃんは、まるで自信満々のＦ１レーサーのようだった。レースが始まる直前のインタビューにも、「レースが終われば、表彰台の中央にいるのは、きっと僕だよ」と笑顔で、平然とコメント出来る性格なのだ。そう言う彼の行動パターンは、弱い自分を奮い立たせるためのひとつの手段だ。それを敢えてやっている事は、この部屋の中にいる誰もが分っていた。
　健ちゃんと比べて今の僕はどうだろう。僕のマシーンは、エンジントラブルを起こしてピットに入ったままの状態だ。ろくにスターティンググリッドに付けない有様なのだ。だが、惨めに何週遅れになることが分っていても、調子の悪いマシンを走らせなくてはならない。受注レースに、リタイアはない。とにかく新規だ。僕は再び今までに穫ったアンケートの客を洗い直す事にした。

１４　地盤調査

「ダイニッケンホームのアマミヤでございます。お早うございます。如何ですか、その後？」
　この日僕は、朝から遠方の客に電話訪問を架けていた。ここ数日、僕は多田親子のことをしばし忘れ、以前穫った名簿の客を、再び訪問してみた。十件訪問すると、そのうち一件は、すでに他のハウスメーカーで契約が決まっていた。ここでも自分の力のなさを痛感した。
「ああ、そうなんですか。では、良いお家をお建てください」
　まただ。この客も他のメーカーで、すでに契約したというのだ。僕はため息をついて受話器を戻した。
「健ちゃん、ちょっと手伝って」と佐藤さんが勝手口のドアを開けて、スタッフルームに顔をのぞかせた。
「何ですか」
　向かいの席でタバコを吸いながら、僕の名簿をいじくり回していた健ちゃんが応えた。
「クモの巣、張ってるのよ」
　それを聞いたとたん、健ちゃんは、
「もう勘弁してくださいよ、佐藤先輩。朝からそんな話」とニコニコしている。佐藤さんは「しょうがないなぁ」と言った顔でゆっくりとスリッパに履き替えて、渋々スタッフルームに上がってくる。
　差し込む朝日を背に受けている福本店長も、健ちゃんの隣に座っている斉藤さんも、これから何が起きるのかと、目をキョロキョロさせている。健ちゃんは座ったまま、笑顔で佐藤さんに話しかけた。
「三十路って、そんなにご無沙汰なんですか？」
　佐藤さんはミニキッチンの方へ向かう振りをして、そばにいる健ちゃんの向こう脛を、スリッパを履いた足で軽く蹴り飛ばした。
「痛タタタタ！」
　健ちゃんは大げさに足を抱える。
「斉藤サーン、助けてくださーい。佐藤先輩が暴力振るうんですよ」
「ダハハハ、何だ、コノヤロ」と斉藤さんは健ちゃんの背中を叩く。その後、斉藤さんも、江戸っ子口調で佐藤さんをからかい始めた。
「佐藤さん、どんなクモが、どんな張り方してるんだか、俺もお目にかかりてぇもんだね、こりゃ。ダハハハ」
　奈々ちゃんはムスっとしている。別にお茶を入れようともしていない。
「店長、この二人、見てましたよね。これって、セクハラですよねぇ」
　福本店長も愉快そうだ。
「ダメだよぉー。俺に振って来てもさぁ。俺は奈々ちゃんにセクハラするのだけが生き甲斐なんだから。それで毎日会社に来てるんだよぉ。お願い、奈々ちゃん！　俺から生き甲斐、奪わないで」
　福本店長も結構役者だ。乙女の様に、両手を胸の前で組んで、奈々ちゃんに懇願している。

「ハイハイ、頼んだ私が悪いんですね。もういいです」と奈々ちゃんは呆れ顔だ。店長は、すかざずそこへ言葉を挟む。
「あっ奈々ちゃん、次の飲み会、俺、セーラー服リクエストしちゃう」
「ちょっと高くつきますよ」
　神宮展示場の朝は、だいたいこんなやり取りで始まるのだ。
　佐藤さんは長い箒を持って外へ出て行く。健ちゃんもその後に続いて外に出る。僕はちょっと気分転換にスタッフルームから出て、リビングの方に向かう。やはりタバコを吸わない者としては、スタッフルームに立ちこめるタバコの煙を、朝から吸い込むのは、余り気持ちのいいものではない。僕はリビングを抜けて、ダイニングの吐き出し窓から、外のウッドデッキを眺めた。佐藤さんと健ちゃんが和気あいあいと、樹木に張ったクモの巣を、長い箒で絡め取っているのが見える。
　あんな事を言い合いながらも、やはり二人は仲のいいコンビである。実の姉と弟の様な、自然な関係に見えた。僕はダイニングの中から、佐藤さんの微笑んだ顔をそれとなく見た。やはり彼女を気にしている自分がいる。
「おはようございまーす。ハヤト急便でーす」
　僕がリビングから玄関の方に廻ってみると、見慣れた宅配業者のマークを付けた帽子と、半袖の制服を着た若者が、一通の厚めのメール便を持って立っていた。すぐ次の配達先に行きたそうに、ちょっと体を左右に振って、足踏みしている様な感じだった。僕は手早く受け取りのサインをする。
「まいどー」と若者は、バトンを受け取ったリレー奏者の様に、玄関から駆け出していった。
　宅配メール便は僕宛であった。送り主はアースエンジニアリング（株）とある。地盤調査会社からだった。多田正義の地盤調査の結果が、今送られて来たのだ。僕はそのメール便を両手で持ったまま、急いでスタッフルームに戻った。
　地盤調査報告は、住宅営業マンにとって、病院のガン検査の結果を聞くのと同じである。検査の結果「クロ」と判定されれば、基礎工事の補強、あるいは地盤そのものを補強しなければならない。最悪の場合、数百万円の費用が必要となるのだ。
「そんな金、何処にあるんだ」
　客は呆然とそう言う。しかし、何処からか、その金を工面して捻りださないと、家は建てられないのである。こうして住宅営業マンと客との悪戦苦闘が再び始まるのである。
　僕はメール便のコーティングされた専用封筒の端を、ハサミで注意深く切った。中から出て来たのは、透明なアクリルの表紙がついた十ページほどの報告書二冊だった。僕は以前、中地さんが地盤調査報告書を開いて「Ｎ値がどうもねぇ……」等と独り言の様に言っていたのを思い出した。
「おっ、地盤調査報告ですか？　ちょっと見せてください」と斉藤さんが覗き込んでくる。斉藤さんはまだ受注がない。いくつかプラン提出のステップまでは行ったのだろうが、その先の申し込みや、敷地調査、地盤調査はまだ未経験なのだ。僕は机の上に報告書を広げて、斉藤さんにも見える様にした。

「これ、報告書って二部あるんスねぇ」と斉藤さんが妙に感心した様に言う。そこへ福本店長が、
「斉藤さん知らなかった？　ここで使っている地盤調査会社からは三部届くのよ。もう一部は、別便で設計の方に行ってるはずだよ。そこにあるもう一部は、アマミヤちゃんが、お客さんに渡すヤツね」
「ほう、なるほど」と斉藤さんも僕も、同じ様に頷く。全く僕も斉藤さんも、見かけは中堅のベテラン営業マンぽいのだが、実はズブの素人に毛の生えた様なものである。何も知らないのだ。福本店長がふと気づいた様に僕に聞いた。
「あれ？　多田さんって、もう解体しちゃったの？」
「まだなんです。でもラッキーな事に、解体せずに測定出来たんです」
　普通、地盤調査は、今ある建物を解体してから行う。調査は、新しく建てる予定建物の四隅、それに中央の、合わせて最低五カ所のポイントを調べる。そこに矢じりの様な、ロッドと呼ばれる鉄の棒を突き刺す。そこに二十五kgの重りを載せ、更には回転を加え、どの程度沈み込んでゆくのか、測定して行くのである。重りは最大百kgまで載せる。
　多田親子の新築予定建物は、一階の床面積が約三十二坪であった。それに対し、取り壊し予定建物の一階床面積は約十八坪だった。そこで、取り壊し予定建物の上に、新築予定の建物のシルエットを載せると、すっぽりと包み込めてしまうのだ。
　調査の時点でまだプランは確定していなかったが、幸いにも一階平面図と、建物を敷地の何処に配置するのかは既に決まっていた。そのため予定建物の中央の測定ポイントも、建物を取り壊す事なく、うまく測定出来たのだった。
　僕たちが地盤調査の件で盛り上がっていると、勝手口のドアがガチャリと開いた。
「お早うさん」
　姿を現したのは、元植田展示場の在間店長だった。
「お早うございます」
　僕たちは在間さんと挨拶を交わす。もう在間さんは、店長ではなくなってしまったのだ。植田展示場の店長職を解かれ、年下の福本店長の下、一営業マンとして営業活動をしていた。
「おお、これは在間店長、良いところへ。この二人に地盤調査報告書の見方、教えてやってください」
「もう、フクモっちゃん、止めてよ、その店長って言うのは。嫌みに聞こえるよ」と在間さんは福本店長に向かって苦笑いした。福本店長に悪意はないのが分っているので、在間さんもそれほど気にしていないようだ。
　降格人事された人の心境というのはどんなだろうか。僕はよく分からないし、他のメンバーだって分らないだろう。だから、健ちゃんや斉藤さん、佐藤さんも、在間さんについては、ちょっと腫れ物に触る様な感覚で接していた。だが福本店長は、以前から会議等でよく在間さんと会う機会を持っていたし、お互いの気心は知れているようだった。そこで福本店長の計らいで、神宮展示場の中では、在間さんだけは全くフリーで動ける様になっていた。朝礼に出なくてもいいし、土、日、祝日以外は、展示場に顔を出さなくてもかまわない事になっていた。それは福本店長の、優しくも厳しさの入り交じった配慮だった。

「う～ん、地盤調査かね？　出たの？　結果が」
　在間さんは机の上の地盤調査報告書をパラパラとめくる。何やら棒グラフを横向きにした様な表が、何ページか続く。そのページを何枚かめくりながら、最後のページを見た。
「やはりね」そう言って在間さんは「ふう」と軽くため息をつく。
「はい、残念でした。間違いなく軟弱地盤だね。柱状改良にしろって書いてあるよ。担当はどっち？」と僕と斉藤さんの両方を、在間さんは見比べる。
「あ、僕の方です」
「まあ、大変だろうけど、しょうがないよ。お客さんによく説明して、分ってもらう事だね」
　そう言って在間さんは僕に報告書を渡し、棚から何種類かのカタログを手に取ると、そのままそそくさと、また勝手口から出て行ってしまった。
「柱状改良……」
　僕はその言葉に落胆した。やりたくもないが、ここから再びあの多田親子と、わざわざひと悶着起こさなければならないのだ。そう思うと気が重かった。ますます僕のテンションは下がっていった。
「何か急な用事なのかね」
　父親の多田正義は、風呂上がりだった。短く刈り上げた頭をバスタオルで拭きながら、食卓の椅子に腰掛けた。上は木綿の半袖シャツ、下はグレーのジャージのトレパンである。僕が夜に訪問した時、母親の多田福子が応対した。いつかの展示場やショールームで見た様な、どぎついアクセサリーだらけの服とはうって変わって、綿のトレーナーに、黒のスラックスである。もちろん小太りの体型に合わせて、ウエストはゴムで伸びるタイプの物であるらしかった。
　そう言う普段の格好を、余り見られたくないのだろう。母親は僕を薄暗い食堂のダイニングテーブルに座らせると、部屋を仕切る襖を閉め切ってしまい、それきりどこかへ隠れているようであった。
　僕は風呂上がりの汗を拭いている父親に向かって、地盤調査報告書を静かにテーブルの上に置いた。
「この度、スウェーデン式サウンディング法と言う地盤調査を行わせていただきました。どのハウスメーカーでも行っている調査です」
「うん、それで。どうだったの？」
　父親は余り興味がなさそうだった。目の前に置かれた調査報告書を開けようともしない。
「調査の結果なんですが……」と僕は少し言い淀んだ。
「もう、ストレートに申し上げます。弱かったんです。地盤が」
「どういう事だね？」父親は怪訝な顔をした。
「私も専門家ではないものですから、詳しいご説明は難しいんですが、地盤の調査と補強を専門にやっている会社が調査した結果、多田様の、この敷地の地盤が大変弱いと言う事が分りました。この報告書の最後に、調査会社からの判断があります」
　僕はそう言って、父親の前に置かれた報告書の後ろのページを指差した。
「～予定建物の荷重よる～不同沈下の恐れがあり～対策として～基礎直下に柱状地盤改良工事を行い～云々～」と述べられている。

「結論から言って、地盤の改良工事をして頂かないと、新しい家が傾く恐れがあるという事です」
「うん？」と父親は眉間にシワを寄せ、頭をバスタオルで二、三回、ごしごし擦った。
「更にです。この地盤改良工事をやって頂かないと、ウチのダイニッケンホームの立場としましても、建物の二十年保証が出せないという事なんです」
　それだけ言ってしまうと、僕は父親の表情を真正面から見た。言いたくない事なのだが、こういう悪いニュースほど、出来るだけ早く正確に相手に伝えた方が良いのだ。それは僕がかつてメンテナンス会社で経験して来た、クレーム処理とほぼ同じ要領である。
　最も大事なのは、逃げてはいけないという事だった。誰だって嫌な事は、客先に黙っておきたい。しかし、どんなに悪あがきしても、この柔らかな多田さんの敷地から、僕も多田さん本人も逃げる事は出来ないのだ。
　父親の顔はいっそう不機嫌になった。
「いったいどういう事なんだ。この家は重量鉄骨で建っとるんだぞ！」
　それは初耳だった。確かに鉄骨造らしく、多田正義の家は、学校の様に屋根は平らであった。もっと早く気づけば良かったと思ったが後の祭りである。
「はい、申し訳ありません。ただ、地盤調査会社が軟弱地盤であると判断した、という事実をお伝えしなければいけないんです。それが僕の役目なんです」
　もう、ここは正面突破で行くしかないのだ。バカ正直に、小細工無しに、淡々と怒られる立場に徹する事だ。僕は出来れば隠しておきたい見積書を、父親の前に差し出した。
「これが柱状地盤改良工事にかかる費用です。施行は地盤調査を行った、アースエンジニアリングが行います」
　父親はその見積書を、尻を拭いた後のトイレットペーパーの様に扱った。見たくもない紙切れに違いなかった。
　見積書の明細には「セメント系硬化剤一式、打設費、重機回送費」等の文字が並んでいる。消費税込みの価格は百五十七万五千円であった。その数字を見て、風呂上がりの父親の顔が、更に赤みを帯びた様に見える。
「おめぇさんとこよぉ、なに考えとる。アンタのところはツーバイフォーだろう。木で造るんだろ。木は鉄より重いのか？　それを何が地盤の補強だ。笑わせるな。なんでこんな百五十七万もする工事を、わざわざ、やらにゃぁイカンのだ？　冗談でねぇわ」
　僕は父親の前に置かれた報告書のページをいくつかめくった。落ち着いて話をする事だ、と自分に言い聞かせる。
「地盤調査は、通常五カ所の測定ポイントで行います。多田様の敷地の中で、そのうち四カ所が柔らかくて、調査用のロッドがスルスルと六メートル程入って行った、とこの報告書には書かれてあります。問題は残りの一カ所です」
　僕は改めてそのページを指差した。
「この一カ所の測定ポイントだけ、最初は他と同じく、スルスルとロッドが入って行くのですが、突然、地中で何か硬いものにぶつかって、それ以上調査不可能になっているんです」

「どういう事かね」
　相変わらず不機嫌そうに父親が尋ねた。
「これは他の営業マンから聞いた話なんですが」と前置きして、僕は続けた。
「実は昔の建築業者には、とんでもない連中もおったそうで、他の解体現場で出た廃棄物をですね、捨てるのに困ったんでしょうね。新築予定の土地に穴を掘って、そこへ捨てたケースがあったそうなんです。この地盤調査報告書のデータからはですね、もしかすると、そういう事が……」
　僕の解説を聞いていた父親は、表情を一変させた。
「なにぃ、それじゃアンタ、俺んとこの家は、ゴミの山の上に建っとる言うんか？　エラい事言うてくれるわ。ホンマ、エエ加減な事言うとったらイカンでよ」
　多田正義は、自分の発した声の大きさに、自分自身びっくりしたようだった。その声に勇気づけられる様に、その怒りは増幅した。
「ここまでバカにされては、ワシも黙っとれんわ。何か因縁つけとるのか、アンタの会社は！」
　父親は見積書を人差し指で叩きながら、
「俺んとこが、さんざん値切りやら、サービス工事やら、やらせるもんで、その仕返しか。おめぇさんの会社が、ワザと新しい工事をこしらえて、ピンハネするつもりやろうが。そうやないのか！」
　僕は心底後悔した。言わなくてもいい事を言って、小さな火種を大火事にしてしまったのだ。父親の怒りはいつまでも収まらなかった。薄暗いダイニングテーブルを挟んで、僕はその夜、ひたすら父親に謝り続けるしかなかった。

１５　着工

　これ以上のトラブルは抱え込みたくなかった。日程は迫っている。新規の客も穫らねばならない。後日、もう一度多田さんのところへお願いに行った。今度は工務課長も一緒だった。工務課長はいかにも農村の親爺さんという風貌だ。課長の朴訥とした口調に、父親の多田正義も、「まぁ、あんた方のところもダイニッケンの大看板掲げとるところだでなぁ」と顎を撫でた。課長と値引き交渉の上、渋々ながら柱状改良工事を認めたのだ。
　後日、僕の携帯電話に総務から電話があった。多田さんから、地盤改良工事費、百二十万円が入金されたとの事だった。
　ようやく着工まで漕ぎ着けた。地鎮祭当日の朝、僕は名古屋支店フロアに立ち寄った。
「おはようございまーす」と重い磨りガラスのドアを開けて中に入ると、
「アマミヤさん、これお酒」
　総務の森下さんが僕を見つけ、机の上を指差した。見ると二本の清酒が白いビニールひもで器用に結びつけられて置いてあった。二本の瓶は白い紙で全体が包装され、熨斗が両方の瓶にまたがる様に貼られている。
「どうもありがとう」
　僕はこの地鎮祭の酒を、受け取りに来たのだ。ふと奥のソファを見ると、支店長、犬丸営業部長と、見かけない六十歳前後と思われる男性が話をしていた。
　男性は髪をオールバックにして整髪料で固めている。小柄な体にダブルのスーツで身を包んでいる。三人は和やかに話をしているようだったが、その初老の男性の鋭く射抜く様な眼付きや、異様に脂ぎった赤ら顔と言い、ちょっと常人ではない様な気がした。
　僕は犬丸部長達に背を向ける様にして、森下さんから清酒を受け取った。二本を結びつけた紐に指を掛け、瓶の底に手を添えて持ち上げると、ズシリとした重みがある。
　熨斗には「奉献　大日本建材株式会社」と毛筆で書かれてある。名古屋支店御用達の酒屋は慣れているのだろう。なかなか達筆である。僕はその熨斗の縁に、出来るだけシワをつけない様に気を付けながら、自分の車へ運んだ。
　いつ降り出すか分らない様な曇り空のもと、多田邸の地鎮祭の準備が始まった。古いが、がっしりとした四角形の建物はすでに取り壊され、敷地は更地である。僕はその解体の様子を見に行った。予想通り地中からは、これでもかというほどのコンクリートガラが掘り出されたのだ。その敷地も今は土で埋め戻され平らになっている。
　神主もすでに到着していた。敷地の四隅には木の杭が打ち込まれ、細く背の高い青竹が縛り付けられている。その四隅の青竹に絡める様にして、しめ縄が敷地の周囲にぐるりと張り巡らされている。
　敷地のほぼ中央には、もう一本青竹が突き立てられ、その手前に祭壇がしつらえてある。祭壇は折りたたみ式であり、なんとなく頼りない。その上に昆布、スルメ、バナナ、りんごなどのお供えものや、僕が支店から持って来た二本の清酒、多田さんが持って来た洗った米、塩、水のペットボトルなどがてんこ盛りに置かれる。これだけの事でこの敷地が、何となく神聖な雰囲気がするから不思議なものだ。

祭壇から少し離れて、テントが張られている。その中に、椅子が三脚ずつ二列に並べてあった。前列には、施主である多田正義と息子の栄造、後列には孫のそらちゃんを挟む様にして、母親の多田福子とパンクな若奥さんが座った。僕たち施工業者側は、その後ろに立って、神妙な面持ちで両手を前に組む。

神主も装束を身に着け、準備は完了である。

「只今より、多田正義様邸新築工事、地鎮祭を執り行います。ご起立願います」

出席者全員が立ち上がった。神主は祭壇に向かって、お祓いの言葉を述べはじめる。やがて「おおぬさ」と呼ばれる、白木に白い紙をいっぱいつけたお祓いの棒を、多田親子、並びに僕達施行業者に向けて、バサッ、バサッ、バサッと打ち振るう。これで僕達の罪、汚れが払いのけられるのかはよく分からない。

神主は、神様に降臨してくれる様「おぉぅ〜」と唸りだす。出席者は指示に従い、何度も立ったり座ったりする。しつらえられた祭壇に向かって、神主は長い祝詞を奏上する。全員起立して頭を下げ、神主の読み上げる祝詞を聞いた。

「たぁ〜くぅ〜みぃ〜のぉ〜わぁ〜ざぁ〜」

神主の口調といい、その装束といい、まるで能や狂言を観ているかのようだ。僕はこの後、神主が敷地の四隅を清めたりするところを、駆け寄ってデジカメに収めた。式次第が全て終わると、多田親子は神主に丁寧に頭を下げ、笑顔で初穂料を渡す。僕はその後、控えめに父親に声をかけた。

「多田さん、それでは着工金の方、なにとぞお早めにお願い致します」

父親は神主へのときの表情とはうって変わって、

「また金か」という表情をした。

「ああ、うん」と、うやむやな返事をする。地鎮祭の翌日から工事は始まった。

僕は足元の悪い水たまりを避けながら、多田さんの現場を遠巻きに見ていた。一見、クレーン車の様なキャタピラー付きの大型重機が、デンと鎮座している。

そのクレーンの部分には、二階建ての家より遥かに高い、青く塗装された筒型の装置がついている。辺りには轟々という、単調な機械音が響いている。筒型の装置の先端からは、シャフトのようなものが地面に突き立てられていた。シャフトはゆっくり回転しており、その先端から地中にセメントが注ぎ込まれる。その後更に、地中の土とセメントが混ぜ合わされる。こうして、地面の中にセメントの柱を作ってしまうのが柱状改良工事である。

僕は夏物のスーツにネクタイを締めた、営業マンスタイルだった。それにＤＫマークのはいった、ツバ付きのヘルメットを被っていた。僕の姿に気がついた重機のオペレーターは、そばに脱ぎっぱなしにしてあったヘルメットを、慌てて被り直した。

その様子を見届けると、僕は車に戻った。エンジンをスタートさせ、近くの川沿いの道をしばらく走り、ちょうど木陰になっているところを見つけ車を止めた。シートを倒し、そのまま目をつむる。

このところ、なぜか夜眠れないのだ。睡眠不足で昼間は始終眠い。体はだるいし、仕事へのやる気はほとんど消えつつあった。

「だめだ、眠れない」
　目をつむったとたん、急に目が冴えてくるのだ。少しは眠らなければと思う。睡眠不足で事故でも起すのはご免だ。しかし、眠らなければと思うと全く眠れない。
　僕は倒した車のシートの上で、体の位置を直す。首を右に向けたり、左に向けたりする。眠れずに、車の天井を見つめた。そこにぼんやり浮かぶのは、小柄な女性の身体だった。
　最近僕の中で、佐藤奈々子という女性のイメージが、振り払おうとしても、どうにも出来ないまでになっていた。
　仕事をしなければ、新しい客を見つけなければ、と思う。その度に、彼女の顔がふわりと横切るのである。イメージが勝手に生命を与えられ、別な生き物として、僕の体の中を浮遊しているのだ。その息づかいまで、体の中から聞こえてきそうだ。
　あどけない少女の様な笑顔。それほど豊かではない胸。僕が右手をすっと伸ばせば、掌に吸い込まれそうな小さな肩。そして上腕部へのなだらかなライン。それは男に抱き寄せられるためだけに存在している、まろやかで官能的なラインだ。
　僕の視点は彼女の胸やウエスト、適度なふくらみを持つ臀部をなぞってゆく。やがて視線は脚に移る。淡いピンクベージュのストッキングで包まれた彼女の脚は、長くもなく短くもない。
　海外のバレエダンサーであれば、その脚は細く長く美しい。しかし、全ての贅肉を削ぎ落とされたその脚は、一切の無駄をなくし、純粋に踊るためだけに鍛え上げられたものだ。彼女の脚はそれとは本質的に違うのだ。彼女の脚は、なんとも愛嬌があるのだ。その脚は、何かの目的のために鍛えるという行為を、全く行っていない様に思えた。それでいて彼女の脚は、怠惰にだらしなく太った脚では決っしてない。適度な皮下脂肪に、優しく包みこまれた太ももとふくらはぎ。その太さと長さ、立体としてのバランス。その比率は、黄金比を駆使したレオナルド・ダ・ビンチだって拍手を惜しまないだろう。その脚を見て、撫でて擦ってみたいと思わない男はいない。彼女を構成する全ての要素は、男に愛される為に存在するのだ。
　小休止の中、僕はいつもこんな風に佐藤奈々子の事を想った。僕は酸欠の熱帯魚の様に、彼女と同じ空気を少しでも吸い込んでいたかった。
　柱状改良工事が済むと、
「日程あんまりないんで、このまま進めます。着工金よろしくです。アマミヤさん」
　多田さんの現場監督、工務課の柳君は僕の方をぎょろりとした目で見た。うん、と頷いたものの、多田さんのところへ入金を促すのは何とも気が重かった。もう誰とも口をききたくない気分だった。おまけに明日から三日間、営業は研修会があるとの事だった。
　水曜日、僕達営業マンは、名古屋支店地下の大会議室に集められていた。営業本部が寄越した営業コンサルタントによる研修を受ける事になったのだ。僕達の目の前にいるのは、以前、支店長や犬丸部長と話しをしていた人物だった。
「では皆さん、私と同じ様にやってみてください」
　そう言いながら、マンガの鉄人二十八号の様に胸を張りポーズをとる。掌は広げている。ちょうど力士が土俵入りの時に、手を打ち鳴らす直前の仕草だ。小さな身体全体を響かせて、ゆっくりと、しかし重々しく、講師が言い放つ。
「私はカンペキです」

　まるで神が降臨した予言者であるかの様に、講師は振る舞う。
「はい、同じ様に」
　促されて、席に座ったまま僕達十人の営業マンは、揃って両腕を力士の様に広げる。ひじを曲げて指先を天に向け、言葉を復唱する。
「私はカンペキです」
　講師は眼光鋭く、会場をゆっくりと左から右へと、舐め廻す様に視線を動かす。後ろの壁際には、支店長と犬丸部長が睨みを利かせている。予言者の様な講師は続けた。
「私とこれから三日間、お付き合いを願います。全身全霊を傾けなさい。そうすれば、皆さんは生まれ変われるのです。皆さんはカンペキです」
　その声は僕の耳に虚ろに響く。佐藤さんは今頃何をしているのだろう。そんな事を考えながら、怪しい講師の指導のもと、三日間朝の九時から夕方五時まで、ロールプレイング研修を受けた。僕達には誰一人営業の神様は降臨しなかった。
　研修が終わった金曜の夜、僕は十二階のフロアに立ち寄ってみた。工務の柳君にも、着工金の件でひと声かけておきたかった。フロアに入ると丁度、工務課の電話が鳴っていた。別の電話で話をしていた工務課員が、一旦その電話を保留にして、鳴っている電話に出た。
「はい、ダイニッケンホームです。ええ？　はい、エイゾー様？　では担当と代わりますので」
　彼は机の上に広げられた施工図面の上に、受話器を無造作に置いた。立ち上がって、営業のデスクのそばにいた柳君に声をかけた。
「おーい、柳さーん、タダでエエゾーから」
　それを聞いて、となりの列の机にいた設計課の連中がどっと笑った。ああ、あいつかぁ、という声も聞こえた。もう、多田さんのおねだりや、サービス工事は、設計工務の間で知れ渡っていた。何でもサービス、何でも無料の多田親子は、要注意人物という事でマークされていたのだ。柳君が外線の四番のボタンを押して電話を取った。
「お電話代わりました、柳です」
　その瞬間、柳君の身体が凍り付くのが分かった。僕は一部始終を見ていた。電話の保留ボタンが押されていなかった。支店内のやり取りは多田栄造に筒抜けになっていたのだ。
「……はい、申し訳ございません。では改めて、今度の日曜ですね。分かりました。失礼します」
　受話器をゆっくりと戻すと、柳君は苦い薬を飲み下す様な顔をした。
「何だよぉー、あいつ。保留ぐらいやっとけよ」と工務課の同僚を睨んだ。
「多田さんが聞きたい事があるってことです。アマミヤさんも同席する様にって。わざわざ日曜日ですよ」
　柳君は不機嫌だった。工務の休みは日曜である。きっと彼なら来週にでもキチンと代休を取ることだろう。その辺は割り切った男なのだ。
　日曜日の午前十時。憮然とした表情で多田正義、栄造の父子は、神宮展示場のダイニングテーブルに座っていた。
「こういう事は俺もやりたくないんだが」と言いながら、父親はテーブルの真ん中にカセットテープレコーダーを置いた。

「電話を繋ぐ時は保留にしてほしいよね」と息子の栄造が不機嫌そうにつぶやく。父親は手を伸ばし、録音のスイッチをガチャリと押した。
「まぁ、要するにだ。俺んとことしては、お前さん方の対応を見とると、はっきり言って信用出来ん訳だ」
　僕も工務も、先日の非礼があるだけに、とにかく頭を下げるしかない。父親は続ける。
「俺のところに敷いとるジャリなぁ。あれは何だ？」
「はい、砕石の事ですかね」と工務の柳君が確認する。
「大きさが違うぞ」
「ハァ？」
「もうええ、こっちに来いや」そう言って父親はレコーダーを手に持ち、リビングから廊下に出てゆく。モデルハウス内の洗面、トイレの方へ向かった。僕と柳君もそれについてリビングを出た。
　洗面、浴室の手前の廊下、丁度階段の下の壁の前で、父親は立ち止まった。ここは壁一面が透明な樹脂張りになっている。頭の高さほどに「構造コーナー」と書かれたプレートが貼付けられている。
　屋根から基礎に至るまで、スパッと縦に切った様に、建物の断面構造が見られる様になっている。通常隠れて見えない天井の中や壁の中、床下の組み方まで作り込まれてある。一階と二階の室内の高さは省略されてあった。この展示コーナーの「売り」は、実際に現場で使われる材料、サイズで、断面を組み立ててある事だ。天井や外壁に使われる断熱材の分厚さや、ベタ基礎標準仕様などを客にアピールするために使うのだ。
「アンタ、これと全く同じに建てますから、言うたよなぁ」
　僕は言葉が出なかった。
「何とか言えや、アンタ」
「はい」
　父親はしゃがんで、基礎の更に下の部分を指した。
「ここに入れとるジャリなぁ、このサンプルとウチに入れとるジャリ。明らかに粒の大きさが違うぞ。どういう事なんだ」
　断面構造のサンプルには、もちろんコンクリート製の基礎もちゃんと作られている。その下に砕石と呼ばれる砂利が敷かれている。さすがにサンプルらしく、その一粒一粒が選び抜かれた様に粒が揃っている。まさか、その粒の大きさにまで文句を付けてくるとは。
　皆、ダイニングルームに戻った。
「さあどうする」と言った様に多田正義はどかりと椅子に座り、腕を組んだ。僕は工事監督の柳君を見た。彼はちょっとめんどくさそうに説明を始める。
「あの砕石はですねぇ、ＲＣ－４０と言いまして、粒の大きさは最大で四十ミリまでなら、その範囲でいいという規格なんです。ですから……」
「俺は納得出来んで。」父親は言い放った。信頼関係が崩れてしまっていては、幾ら説明しても、多田さんの納得は得られない様子だった。

「着工金は払えんでよ」
　多田邸の工事は止まった。この先、どのような解決策があるのか全く分からなくなった。
「現金客には気を付けてな」
　いつか軽部さんに言われた言葉が重く僕にのしかかった。

「ウィンカーは出したかな？」
　よく分からないまま、僕は指先で右にすこしハンドルを切る。一番右の右折レーンに車を滑り込ませ、交差点の中央で車を停止させた。東西南北、それぞれ四車線あるこの交差点は、交通量が多かった。
　多田さんはどうしたらいいのだろう。受注はどうしたらいいのだろう。僕の今後はどうなるのだろう。何も解決策がない。
　そう言う時、また佐藤さんのイメージが、ふわりと僕の前を横切る。余計に胸は苦しくなる。僕はほとんど信号も確認せず、ハンドルを右へ切り、アクセルを吹かした。向かって来ていた直進車は、大きくクラクションを鳴らしながら、僕の車のそばをかすめる様に過ぎ去って行く。叫び出したいほどの気持ちの高ぶりがあった。自分でもこれはおかしいと思った。自分の精神状態が、どこかバランスを崩して行くのが、自分でも分った。
「医者に行こう」
　唐突にそう思った。
　僕は電話帳をめくって、ひとつのメンタルクリニックを選びだした。そこは、自宅アパートから展示場に行く途中にあり、地下鉄の駅からも近かった。
　車で行ってみると、クリニックの四台分ある駐車場は一杯だった。やむなく近所の路上に車を止めて、クリニック玄関前に立った。
　その建物は、いかにも高価そうな割石調のタイルで外壁が飾られていた。清潔感があり、上品なベージュ色のタイルだった。ただ、それが院長のいかにもセレブっぽい趣味と言えなくもなかった。僕は玄関から吸い込まれる様に中に入った。
　受付に行き、
「予約したアマミヤです」と告げると、白衣を着た男性の職員から、保険証を出す様に言われる。その後、初診用のアンケートを渡された。
　僕は待合室のベージュの革張りソファに座ってアンケートに記入して行く。待合室の内装は、ちょっと見たところ、輸入住宅の中に入ったかの様だ。メンタルクリニックだけあって、患者が待合室で落ち着ける様な雰囲気がある。
　アンケートを書き終えると受付に持っていき、その後一時間程待った。やがて待合室の奥の廊下から、白衣を着た医師と思われる男性が、
「アマミヤさん、どうぞ」と呼びかけた。
　診察室は、これもホテルの部屋の様に、いくつかの個室に分かれている。オーク調のドアについている、金色に塗装された、レバー式のドアノブを開けて、診察室の中に入る。やけに天井が高いのが印象的だった。正面の薄いレースのカーテンを通して光が溢れている。入り口の右手にチーク材で出来た、黒っぽい重厚な感じの机があった。医師の診察用机というよりも、どこかの社長が使う様な机である。その机の前に置かれた肘掛け椅子にぼくは座った。なんとなく、入社のときの面接を思い出した。机には三十代と思われる医師が、白衣を着て座っている。
「こちらは初めてですね。どうされましたか？」と担当医は、アンケートと僕を交互に見ながら

、優しく語りかけた。もじゃもじゃした髪の毛、黒縁メガネを掛けた顔は穏やかだ。
　僕は仕事で受注成績が思わしくない事、客とのトラブルを抱えている事、それに女性への想い等も絡まり、憂うつな気分がずっと続いている事、何週間も、うまく眠れない事などを話した。
「もう、誰とも会いたくないし、誰とも話しもしたくないです」と僕は担当の医師の前でつぶやいた。今の僕には、すでに営業マンらしい快活さもなく、簡単な事務処理さえ億劫になっていた。食事だって味気なかった。ただ口に入っていればそれでよかった。何か美味しいものを食べたい等という欲求がまるで起こらないのだ。
「いけませんねぇ、それは。休みましょう。出来ればお仕事も休んだ方が良いです」
「先生、これはノイローゼなんですか？」と僕は尋ねた。
「いえ、うつ病ですね」と担当医は静かに答えた。
「はぁっ？　うつ病？」
　まさかと思った。今、世の中では、うつ病患者が年々増えているという事は、時折テレビのニュース等で取り上げられ、僕も知ってはいた。だが、まさか自分がその仲間に入ってしまうという事は、にわかに受け入れがたい事だった。初回の診察は四十分程だった。
「ではお薬を二種類出しておきます。毎食後に一錠、寝る前の薬を一錠ずつです。これでしばらく様子を見てみましょう」
　八月初旬の全体朝礼。
　支店長からは型通りの、叱咤激励の訓示が飛ぶ。僕はぼんやりと突っ立って、上の空で聞いていた。薬は飲んでいるのだが、やはり、あまり眠れない。気分もふさぎ込んだままだ。もう、自分の成績はどうにもならない。着工金の入金も見通しが立たない。多田邸の工事はストップしたままだ。そして、僕は契約社員である。
　契約期限切れの九月末以降、正社員になれる見通しは、今のところ絶望的と思えた。
　やがて、お盆休みも過ぎた八月下旬、神宮展示場モデルハウスに、石橋部長がやって来た。
「皆さんに、おひとりずつ、お話ししておきたい事があります。鈴木君、アマミヤ君、斉藤さん、佐藤さんの順でこちらに来てくださいね」
　そう言って石橋部長はスタッフルームの引き戸をゆっくりと閉め、リビングへ向かった。福本店長も同行した。
　僕達営業マン三人と佐藤さんは、それぞれ視線を交わした。誰も言葉を発しようとはしない。こういう日がいつか来るとは皆、薄々覚悟していたのだ。
「じゃあ、僕から行ってきます」と、ちょっと口を尖らせる様にして、鈴木健ちゃんがすくっと立ち上がった。しっかりした足取りでスタッフルームの出入り口まで行き、一呼吸置いてから、意を決したかの様に引き戸を開け、リビングに向かった。
　スタッフルームの引き戸は自然に閉まる様になっている。こちらからは、リビングの様子は伺い知れない。やがて斉藤さんが、この緊張を紛らわす様にタバコを一本口にくわえる。安物のライターで火をつけ、窓の方を一回見てから、下の方に向けて、タバコの煙をゆっくり吐き出した。トントンと軽く灰皿に灰を落しながら、
「何、話してるんスかねぇ」とひとり言の様につぶやいた。

　スタッフルームの窓の外で、木立のシルエットがざわついている。なんだか嫌に長い時間が経った様な気がする。
　やがて廊下を早足で歩いてくる音がしたかと思うと、引き戸が、ガラガラと勢いよく開いた。帰って来た健ちゃんは、無言で口を硬く結んでいた。顔は明らかに怒りで赤くなっている。そばにあった自分のメタル製のアタッシュケースをさっと持ち上げると、あっという間に身を翻して、スタッフルームから出て行った。僕と斉藤さん、佐藤さんも、その様子から、声をかける事も出来なかった。次は僕の番だった。
「ではお先に行ってきます」
　僕は努めて冷静に、斉藤さんに向かって軽く会釈した。スタッフルームの扉を開け、さっき健ちゃんが激昂して帰って来た廊下を、静かに歩いた。リビングの入り口の親子ドアは閉められている。
「失礼します」
　そう一声かけて、僕は親子ドアを開けて、リビングの中へ入った。北側のボウウィンドウからは、柔らかな光がたっぷりと入り、ライトオーク調のフローリングの上に反射している。窓のそばには三人掛けのソファがある。その中央に、石橋部長がお地蔵様の様にちょこんと座っていた。テーブルを挟んで、手前の独り掛けの椅子は空席である。福本店長はダイニングの椅子を持ってきて、三人掛けソファの向こう側に、こじんまりと座っていた。
「ああ、アマミヤ君、こちらに座ってね」石橋部長が空席の椅子を勧める。柔らかな口調である。僕は椅子に腰をかけた。展示場の応接セットの椅子は、いかにも高級感たっぷりの厚手の布地で出来ていて、クッションもしっかりしている。身体はそれほど沈み込まない。肘掛けと背もたれに、身体が自然に馴染むようだ。
「アマミヤ君、落ち着いて聞いてくださいね。あなたとの雇用契約の件ですが、雇用期間の延長、それに更新は、しない事になりましたので、お伝えしておきます」
　静かな口調で石橋部長は話をした、僕も静かに現実を受け止めた。石橋部長は分厚い黒ブチメガネに手をやる。
「こういう決定になったのは、我々も大変残念なんですけどね」
　石橋部長の言葉はリビングのフローリングに反射する。怒りも沸かなかった。ボウウィンドウの外をふと見ると、ボール遊びをする子供と、日傘をさした母親が、ベビーカーをゆっくりと押してゆくのが見えた。
「では後日、自己都合退職の辞表を書いて、福本店長に渡しておいてくださいね」
「はい、分りました」
　僕はつぶやく様に答えて、ゆっくり席を立った。福本店長は口を一文字に硬く結び、視線はテーブルを見ているのか、それとも石橋部長の手元を見ているのか、よく分からなかった。少し目元が潤んでいる様にも見えた。「では失礼します」
　僕は一礼してリビングを出た。後ろ手で親子ドアをカチャリと閉めた。もう決まってしまった事なのだと思った。
　結局、僕を含めた契約社員は、全員契約を更新されない事となった。神宮展示場は店長と在間さん以外全員契約社員である。ほぼ開店休業状態となった。

鈴木健ちゃんは親の会社に帰る事になったらしい。斉藤さんも次の会社の面接にいくのだと言って、ほとんど展示場にもやって来ない。多田さんについては、福本店長が引き継ぐ事になった。皆、今まで使わなかった有給休暇を消化するため、九月の第三週になると、店長以外誰も出てこなくなるだろうと思われた。
九月は佐藤さんの誕生月だという事は知っていた。僕はお別れの日までに、せめて何かプレゼントしたいと思った。デパートやアクセサリーの店等を何日もかけて、さまよう様に見て歩いた。
ちょうど、老舗のデパートでオルゴール展が行われていた。六階建てビルの五階の催し物会場に行ってみると、美術品を展示する様に、様々な大きさや形をしたオルゴールが、ガラスのケースに収められ展示してあった。会場入り口のカウンターのそばには、即売用のオルゴールが五、六種類置かれてあった。価格は数万円のものから数千円の手頃なものまである。いくつかのオルゴールを見比べて、僕は取り憑かれた様に、一つのオルゴールを買った。

日曜日の朝、展示場のスタッフルームで僕は妙にそわそわしていた。僕は白い紙製の小さな手提げ袋を持って来ていた。その日、展示場に一番先に入って来た僕は、それを誰にも見られる事なく、自分の机の下に隠す事が出来た。
「お早うございマース」
つぶやくような小さな声がした。スタッフルームの勝手口から佐藤さんが入って来た。彼女は、マリメッコ風の大きな花柄のワンピースに、白いニットのボレロを羽織っていた。それは、昨日展示場を出たときの洋服だった。昨日、佐藤さんが飲み会に行く事は知っていた。彼女が展示場から帰るとき、電話で時間を確かめていたのを僕は見ていた。だが彼女は、そのまま一晩過ごしたのだ。電話の相手は誰なのだろう。飲み会の後、何があったのだろう。そんな僕の表情を察したのか、彼女は着替えのため、すぐに洗面室に向かった。
彼女自身、お酒を飲むのは嫌いじゃないと以前言っていたのを思い出した。
「飲み会の相手は、おじさんばっかなんですか？」
「だって奢ってくれるもん」
「セーラー服着てくれ、なんて言われませんか？」
「ウン、しょっちゅう、言われるよ」
そんな健ちゃんと佐藤さんのやり取りを、僕は聴いた事があった。彼女が年配の男性達と酒を飲んでいる。そんな姿を僕は想像したくなかった。まして一晩中、オトコと一緒にいた、という事は考えたくもなかった。
「オッハヨー、奈々ちゃん」と福本店長がいつもの調子で勝手口から入ってくる。佐藤さんは、丁度スタッフルームに戻って来たところだ。半袖ブラウス、ベストにスカートの展示場の制服に着替えていた。ちょっと眼を瞬きする様子が、幾分眠そうにも見える。
「さあ、店長、掃除しましょうか」
「はいよ」
佐藤さんの呼びかけに、店長も自ら掃除機を持って、ゆっくりと和室の方へ向かう。僕は佐藤さんへ、いつプレゼントを渡そうか、そのタイミングを考えていた。

　彼女がモップを持って、一旦スタッフルームに戻って来たときだった。今しかないと思った。
「あのう、佐藤さん、いつ渡そうか迷ってたんだけど」
　僕はそう前置きして、白い手提げ袋を彼女の方に向けて差し出した。
「これ、お誕生日のプレゼントです」
「ええっ！」
　彼女は少し戸惑った様な表情だ。
「そうなんですか、嬉しい。ありがとうございます」と両手で紙袋を受け取った。中を少し覗き込む。店長はまだ戻って来ない。掃除機の音が向こうから微かに聞こえる。
「開けてみていいですか？」
「うん」
　彼女は手提げ袋の中からプレゼントを取り出す。結ばれたリボンを解き、包み紙を解いた。現れたのは、香水でも入っているかの様な白い化粧箱だ。彼女はその上蓋を取る。その中には赤いビロード地に包まれたハート形のオルゴールがあった。
「カワイイ！」
　佐藤さんの口元から八重歯が覗いた。なぜか彼女の笑顔は久しぶりに見る気がした。彼女はハート形のオルゴールを箱から取り出す。両手に載せ、掌で包み込む様にした。壊れ物に触るかの様に、ゆっくりと上のふたを開ける。中はアクセサリー等が入れられるようになっていて、白いサテン生地が、柔らかな光沢を放っている。やがて、
　ポツン
　ポロン
　ポロリン
　と愛らしい音が、赤いビロード地のオルゴールから響いた。
　音の粒は丹念にカットされたクリスタルの様に輝きながら、彼女の手からこぼれ落ちてくる。
　僕と佐藤さんは、しばらくその音の宝石箱を眺め続けた。
　この日、僕は福本店長に自己都合退職の辞表を提出した。僕の住宅営業マンとしての日々はこうして終わった。

　夕方になって外はようやく薄暗くなりかけていた。初冬の夕暮れ。陽はもう少しで西に沈む。僕は外の明るさを確かめるようにしてアパートのドアを少し開ける。
「カチャリ」
　ドアの金属的な音によって、外の世界はアパートの中の世界と一瞬にして繋がった。
　昼の陽射しが、僕にとってはひとつの恐れに近いものになっていた。そのまぶしい光の中に自分の身をさらす事が、とてつもなく不快だった。光は即ち、僕への攻撃以外の何物でもなかった。思わず目をつむり、自分のセカイへ逃げ込まなければならない。でなければ、自分の身は絶えず光の矢に突き破られ、ぼろぼろになってしまいそうだった。
「もう大丈夫だ」
　自分自身にそう言い聞かせ、僕はアパートのドアから外の世界へ泳ぎ出る。それは、どこか宇宙飛行士が命綱一本で宇宙遊泳をする事に似ていた。
　僕にとっての命綱は何だろう？　外の世界に出ても、おそらくアパートに戻ってこられるだろうと言う、実にあやふやな感覚だった。目には見えないその透明な命綱は、アパートから僕へと、かすかに繋がっている。それはクモの糸のように、簡単に途切れてしまうものかもしれなかった。今日のクモの糸は少し太いな、と思える時でないと、外出は危なくて出来ない。
　アパートの二階の部屋から、外の階段の手すりにつかまりながらゆっくり下りる。効き目の強い誘眠剤のせいで、午前中までほとんど寝たきり状態。外出は二、三日に一度。それが今の僕の姿だ。だから、足腰も弱っているのだ。
　カツン、カツン、と安物のアルミ製の階段は、周囲に遠慮のない音をまき散らす。僕の存在を周りに知らしめてしまう。その音がするたびに、僕は自分の体が切り刻まれる様な、いたたまれなさを感じるのだ。そんなとき、周りの空気と同じ様になりたいと僕は願った。目にも見えず、重さもない、形もない、そういうものに、ひと時なりたいと思った。
　アパートの敷地から歩道に出て、西へ下って歩いていく。夕闇の車道には、車が渋滞していた。この道は少し下ると大きな環状道路に合流する。そのために毎日結構な交通量なのである。
　早くもライトを点灯させている車が多い。皆、僕を見つけてライトを浴びせているかのようだった。それぞれの車を運転する人達全てが、僕を凝視しているように感じる。僕は少し目をつむる。
　一日の外回りの仕事を終えた人達が、それぞれの会社や、店舗や、自宅へ向かって帰りを急いでいるのだろう。彼らの今日の戦いは、もう少しで終わろうとしているのだ。
　今日という日を勇ましく戦い、それなりの成果を抱え、彼らは帰っていくのだ。それは戦地から引き上げてくる、勇者たちの黄昏れ時の行進だった。車のエンジン音は、彼ら勇者の凱旋歌であり、そのライトは、行進の度にきらめく槍や刃の反射に思えた。
　僕はその行進に加わる事など出来ない。
　ただ僕はオロオロと、日々の食べ物を求めて歩いていた。まるで物請いの様な自分の姿に、大きな失望を感じた。
「大丈夫だ、気にしない事だ」

　そう自分に言い聞かせて、僕はスーパーマーケットにたどり着く。アパートから歩いてわずか五分足らずの行程なのだが、僕にとっての重大な任務が、ひとつ終わったように感じた。
　スーパー入り口の野菜、果物の売り場は、葉もの特有の、草いきれの様な臭いがした。夕刻ということもあって、たくさんの買い物客がいる。なぜか僕には、その人達はあまり気にならなかった。スーパーの中のひとつの室内という感覚が、僕に妙な安心感を与えているらしかった。
　僕は食材の値札を順次ながめていった。
「ブロッコリー、九十八円」カゴに入れる。
「スパゲティー、一・八ミリ、百円」これもカゴに入れる。
　インスタントコーヒーが切れていることを思い出した。「コーヒー・お茶・ジャム」と看板がかかっている棚の前に行く。
　百円の紙カップのジャムを買う。すぐそばの詰め替え用インスタントコーヒーを手に取ろうとしてちょっと迷った。
　五百三十八円だった。
　しばらくその場に立ちすくんだ後、重大決意をするように、コーヒーの袋をカゴの中に入れた。その他にも安い食材を選んで、スーパーの備え付けカゴに入れていく。両手で持って帰れるぐらいの分量になると、レジへ並んだ。
　レジ係の女性は機械のように、次から次へとバーコード読み取り機に、商品をかざしていく。何人かの客の商品が処理され、僕もベルトコンベアーに乗ったように、レジ係の前に突き出された。
「お待たせいたしましたー、いらっしゃいませー」
　前の客から途切れる事のないエンドレステープのように、感情のないコトバが僕の前で繰り返された。レジ係の女性は、僕がカウンターの左手に置いた買い物カゴから、商品をバーコード読み取り機の上にかざし、右手のカゴに次々に移していった。
「二千八百三十八円ですー」
　僕はあらかじめ握っておいた一円玉九枚のうちから八枚と、千円札三枚を差し出す。
「ハイ、三千八円のお預かりですー、百七十円のお返しですー、アリガトウゴザイマシター、またお越し下さいませー、いらっしゃいませー、おまたせいたしましたー」
　レジ係の女性は、もう次の客の商品に取りかかっていた。僕は買い物かごを両手で持ちあげながら、つぶやくように言った。
「アリガトウ」
　それは三日ぶりに、僕が自分の声帯を使って発した、ただひとつのコトバだった。またこれで何日間か、僕はコトバを発する事はないだろう。
　僕はレジ袋を両手に下げ、スーパーの外に出る。相変わらず車たちは、勇ましい軍歌を歌い、人々はきらめくライトの刃を、容赦なく僕に向けている。僕はその総攻撃に必死に耐えながらアパートに向かった。再びアルミの外付け階段をカタン、カタンと登った。自分の部屋のドアを開けた。
「カチャッ」

「バタンッ」
　ドアを閉じたとき、外の世界は今、ようやくこの部屋と遮断されたのだ。
　僕にとっての宇宙遊泳は終わった。僕は外の世界から、自分の部屋に無事帰り着いたのだ。クモの糸が切れなかったことに、僕は安堵した。また、この部屋の空間に包み込まれる事に、ひとまず安心感を覚えた。
　メンタルクリニックへは、二週間に一度、薬を受け取りにいく。
　今日は十人ほどの患者が、おとなしく順番を待っている。本来、精神科というのはこのように穏やかで、他の診療科よりよほど静かである。ただ、ほかの診療科との違いを見つけるとすれば、待合室のソファーに両手で顔を覆い、体を震わせながら突っ伏している患者がたまにいる事だ。そんな人の横でも、他の患者たちは黙りこくって、自分の順番が呼ばれるのを待っている。
　待合室には、静かなクラシック音楽が心地よく流れていた。つぶやく様なピアノ曲が終わると、次にマーラーの交響曲第五番第四楽章が流れてきた。
　僕はじっと目をつむり、自分の中で渦まいている砂嵐をやり過ごそうとしていた。
　ゆったりとした弦の響きの線が、海の中に漂う海草のように、滑らかな曲線を描き出す。幾重にも幾重にも交わりあう弦の響きは、秩序の域を危うく超えてしまいそうになる。音楽が音楽から逃れる事が出来ないのと同様に、僕も僕の心の中で起きている砂嵐から、逃れる事は出来なかった。僕はなす術もなく、もうどうにでもしてくれと、ただ砂嵐が通り過ぎるのを待っていた。
　ようやく自分の番が来ても、診察時間は短いものだ。
　僕は精神科医に接するとき、この先生が僕を治してくれると言う淡い期待が、徐々にしぼんでいくのを感じていた。医師は薬を処方してくれる、単なる事務係の様に思えてくるのだ。
「調子はどうですか？」
　と問いかけてくる医師に対しても、
「相変わらずです」
　とだけ答えた。担当の小池医師は続けて問いかける。
「夜は眠れてますか？」
　それも相変わらず眠れていなかった。夜、寝ようとしても、なかなか寝付けないのだ。何時間か後に、意識がすっと遠のいてゆく時、ようやく眠れるなと、何とも安堵感がある。しかし、それも束の間だ。およそ二時間ごとに目が覚めてしまうのだ。
　夜中の二時頃に目が覚め、もう一度眠る。しかし、四時にはまた目が覚める。その後も更に眠ろうと努力はするが、五時半には目が覚める。そうなるともう、眠る努力をしている事が、馬鹿らしく思えてくる。テレビをつけて朝のニュースなんかをただ眺めていた。当然のように、昼間は夜と違って、四六時中、眠い感じが続く。
　薬を飲み始めてから、すでに三ヶ月が経とうとしていた。ところが、自分で薬が効いているなぁという実感は、まるで沸かなかった。憂鬱な気分が少しは楽になったり、陽気になったり、あるいはグッスリとよく眠れるなどという事がまるでないのだ。すでに薬の処方を何回か変えてもらっていた。今、服用している薬も、先月変えてもらったばかりだ。でも自分では、変化らしいものは何も感じられない。
「そうですか……まぁ、しばらく、このお薬で様子を見てみましょう」

　小池医師は天然パーマのもじゃもじゃ頭を少し傾け、穏やかに微笑んでそう言った。僕は思い切って訊いてみた。
「薬の量は今より増やせないんですか？」
　小池医師は静かにうつむいた。カルテに目をやる。僕を見ないようにして、
「薬の量はＭＡＸです」とだけ答えた。
　相変わらず僕は日中、部屋に閉じこもったままだった。
　時々友人が、休みの日には電話をかけてきた。僕は電話を取らず、危険を感じた昆虫の様に身を固める。留守電に切り替わり、ピーッという発信音の後に、友人はメッセージを残す。
「アマミヤさーん、僕だよー、生きてるー？　トレーニングセンター行かないのぉー？　電話くださーい。ガチャッ」
　僕は体をこわばらせて電話のそばにいた。電話を取れば、まず僕がどのような精神状態なのかを、くどくど説明せねばならない。なぜトレーニングセンターまで出かけたくないのかを、合理的に説明出来なくてはならない。
　合理的な理由は、理屈では説明出来るはずだった。だが、今僕に起こっている事を理路整然と説明し、まるで選挙運動中のエネルギッシュな政治家のように、相手を納得させるだけの演説が出来るのなら何の苦労もない。それが出来れば、僕は、うつ状態ではないのだ。
　心のエネルギーがほとんど空っぽの状態なのに、その状態を説明するのには、莫大なエネルギーと、人一倍健康な体と、誰にも負ける事のない、熱情を必要とするのだ。その矛盾に、自分の周りの人は誰一人まだ気がつかない。
　それでもなお僕の事を心配している友人は、無理にでも僕を外に連れ出そうとするかもしれなかった。そこまでいくと、それは僕に対しての宣戦布告と同じだった。
　僕はもう、これ以上戦いたくなかった。だから逃げた。逃げて逃げて逃げまくっていた。友人と、僕の間にある溝を埋める事は、ほとんど不可能に近いと思えた。
「プルルル」
　夜の九時過ぎに電話がかかってきた。
　ファックス一体型の電話は、着信音と共に液晶画面が緑色に点滅していた。
　少し体をこわばらせながら、僕はその液晶画面をそっと覗き込んだ。画面の右から左へと文字が流れて表示された。
＊＊＊マブチ　ノブオ＊＊＊
　少しほっとする。
　僕がこの病気になってから、唯一と言っていい電話が取れる相手だった。彼は学生時代からの友人だった。
　彼は結婚してから、自分の妻が統合失調症である事を知った。それについて彼から時々電話で、愚痴とも相談とも付かない事を聞かされていた。彼は結婚してから十㎏もやせてしまったのだ。
　精神疾患の人間とつき合う事が、どういう事なのかを、彼は自分の妻との生活で体験していた。そう言う、ある種の覚悟をすでに持ち合わせている彼と、僕は話がしやすかったのだ。僕がこの病気になってからも、何回か話をしている。多分まだ会社にひとり残っているのだろう。仕事

に熱心なのではなく、あくまで与えられた仕事量を忠実に遂行する様なところが彼にはあった。それに、家に帰るよりも、彼にとって会社の方が心休まる居場所なのかもしれない。
　資格マニアの彼は、宅地建物取引主任者と、社会保険労務士の資格を持っていた。そもそも僕が、インテリアコーディネーターなどという資格を取ったのも、彼が、
「アマミヤさんも何か資格を取った方がいいよ」と強く勧めてくれたからだった。
　彼にとっては資格取得のために一人で勉強するよりも、同じように勉強している仲間が欲しかったのだろう。彼の狙いは正しく、二人はそれぞれ資格を取る事に成功した。
　僕は受話器を取った。
「もしもし」
「もしもぉーし」と彼は間延びした返事を返した。いつものめんどくさそうな、ちょっと疲れた様な口調だった。
「アマミヤさんてさぁ、もしかして、まだ、障害者手帳もってないでしょう？」
「うん」
　電話でいきなり本題から入ってくるのも彼らしかった。ぶっきらぼうではあるが、彼は彼なりに僕の事を心配してくれていた。社会保険労務士の資格を持つ彼は、いろいろな社会保障の制度について詳しかった。彼が出来る範囲で、僕を手助けしようとしてくれているのがよく分かった。
　彼の話によると、自分から役所へ申請しないと、この手帳はもらえないという事だった。医師の方から、こんな有利な制度がありますよとは、決して進んで教えてはくれないそうだ。
　電話のあった翌日、僕は手帳制度についてネットで検索してみた。家の中にいて、パソコンを操作する事は、僕にとって何も面倒な事ではなかった。むしろネットは外の世界と繋がる、唯一の手段と言ってもよかった。
　調べてみると、それぞれの市の、障害者福祉担当部局に申請して、審査に通れば、その障害の重さの順に、一級、二級、三級の障害者手帳が交付されるとの事だった。
　自分の症状から見て、一番軽い三級に通れば儲け物だと僕は思った。
　この手帳を持つ事のメリットはいくつかある。所得税の減税や、住民税の減税、それに軽自動車を所有している場合には、軽自動車税が免除される。
　何より最大のメリットは、福祉特別乗車証がもらえることだ。これを使うと、市内のバス、及び市営地下鉄は全て無料で乗る事が出来る。
　これは障害者手帳が交付されたあとに、保健所へ、手帳と印鑑を持っていくだけで貰える。その対象者は、市内在住の身体障害者、知的障害者など、ということになっていた。さしずめ、ぼくはその「など」というカテゴリーに入ろうとしているのだ。
　手帳の申請と合わせて、今よりも医療費がぐっと安くなる、自立支援医療費制度も申請する事にした。今まで医者へ行くのもクルマを使っていたのだが、すでにクルマを維持する事すら難しくなりつつあった。税金や、ガソリン代、何より、車検が迫っていた。なんとかしなければと、気ばかり焦った。預金通帳残高は７０万円を切っていた。

手帳を申請してしばらく経った頃、アパートの外付け階段の下にある郵便受けに、一通の封筒が届いていた。赤いペンキが少し剥げかかった郵便受けから、その封筒を取り出すと、名古屋市健康福祉局と印刷されていた。封筒は明らかに薄っぺらかった。その封筒の薄さに、僕はちょっとした失望を味わった。

多分審査に受からなかったんだ、と思いながら部屋で封筒を開けた。そこには、一枚の紙に、障害者認定が降りたので、手帳を保健所まで受け取りにくるようにと簡素に書かれてあった。

うれしくはなかったが、ちょっとほっとした感じがあった。

翌日、僕はクルマで区役所内にある、保健所に手帳を受け取りにいった。

受付カウンターの上には、いくつか案内プレートが金具でぶら下がっている。その中の「健康福祉（精神衛生）」と刻まれたプレートの下に行ってみた。

受付で手帳を受け取りにきた事を、係の人に伝えた。係員はいくつかの書類の中から、僕の手帳を見つけてカウンターに持ってきた。まず、目についたのは、緑色の手帳カバーだった。表面にはザラついた梨地加工が施されている。材質はビニール製である。両開きになっていて、閉じると定期入れよりひと回り小さい。ただ定期入れと大きく違うのは、その緑色のザラついた表面の上の方に、金色の文字で、

「障害者手帳」と、クッキリ、印刷されている事だった。

僕はそのカバーと手帳本体を貰ってクルマに戻った。もう一度よく見てみた。手帳本体は、このカバーにちょうど収まる四つ折りの長細い厚紙だった。法律に沿って発行された、何の味わいもない文字の羅列がそこに並ぶ。

氏名、住所、生年月日、交付日、有効期限、手帳のシリアルナンバー、そして名古屋市の朱印が押されている。裏返してみると備考欄がある。住所変更の際は届け出る事や、この手帳は、他人に譲ったり貸したり出来ないこと、更新の申請についての事などが書かれている。僕はもう一度裏返して、手帳の中身を見る。

「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律第４５条の保健福祉手帳」と書かれている。その左側の生年月日の下に、小さく障害等級の欄がある。

「２級」

その欄には確かに、そう印刷されていた。

しばらくの間、僕はじっとその手帳を見つめていた。そして手帳カバーの表面のザラついた感触を、何度も手で確かめた。

３級に引っかかれば儲け物だと思っていたのに、２級とは……。僕の症状は重いということなのか？

公的機関から「２級精神障害者」と体に刻印を押された様な気がした。その障害者とは、この自分なのだ。申請するまでは単に、無料で交通機関を利用出来るようになる、便利な手帳という程度に思っていた。しかし、その刻印の重さに耐えかねて、僕はクルマの中でそのまま横になった。

僕の貯金は確実に減りつつあった。名古屋に来てから住み続けている２ＤＫの部屋は、家賃五万六千円だった。それに食費や光熱費、ガソリン代やプロバイダー、電話料金、保険料など、節

約しているつもりでも、毎月十五、六万円が消えていった。集中力など全くない状態で、僕はぼんやりと預金通帳を開く。６１６，４００円と残高が記帳されていた。
　どうにかしなくてはいけない。もう少し安いアパートを探して引っ越しをしようか？
　こんな事を考えていると、また頭の中で柔らかな雨音がし始める。やがてそれは深夜のテレビ画面の砂嵐みたいに無秩序で、乱雑な雑音を発し始める。
　ずざぁー、ずざぁー、
　引っ越し費用は幾らくらいかかるのだろう？
　ずざぁー、ずざぁー、
　どこへ引っ越したらいいんだろう？
　ずざぁー、ずざぁー、
　引っ越し業者に頼めるかな？　それとも、兄に来てもらおうか？
　ずざぁー、ずざぁー、
　それ以上考えようとしても、雨音が邪魔をしていた。霧雨の様なかすかな雨音から、豪雨に似た音まで、僕の中で雨音がしない日はない。今日は雨音が小さいな、と思える日には、僕は引っ越しにかかる経費を、パソコンの表計算ソフトに打ち込んでいった。
　敷金、礼金、家賃、レンタカー代、高速料金、粗大ゴミ処分費、
　ずざぁー、ずざぁー、
　また、雨音が大きくなると、僕は作業を中断して横になった。

　とりあえず、生活費を切り詰める事から始めなければと思った。最初に取りかかったのは新聞を止める事だ。
　電話機の上に張ってあるカレンダーは、新聞販売店から、いつも年末に配られるカレンダーだった。その下の方に販売店の電話番号が印刷されている。ぼくにとって電話で誰かと会話することは、極度の緊張を強いる事だった。それでも新聞販売店へ電話をかけねばならない。誰もやってはくれないのだ。自分しかいないのだ。
　がんばらねば、がんばらねば、と自分を勇気づける。
　電話の子機を取り上げた。自分から、誰かに電話をかけるなんて何ヶ月ぶりだろう。カレンダーを見ながら、電話番号を確認する。ひとつひとつ番号をゆっくり、確実に押す。子機の液晶画面に番号が並んでいく。あとは通話ボタンを押すだけだ。左手の親指で意を決した様にボタンを押した。
　ああ、電話をかけてしまった、と思った。
ープゥルルルー、プゥルルルー
　ガチャッ。
　つながってしまった。
「あのぅ、もう新聞を辞めたいんです」
「ええっとぉー、お引っ越しかなんかですかね？」
　販売店の男性はちょっと不機嫌そうな感じでそう聞いてきた。

「いや、まだなんですが、一応その予定です」
「お名前とお住まいは？」
「Ｔ区のマ・メゾン、２０３号室のアマミヤです」
　意外にあっさりと新聞販売店は引き下がった。ぼくはほっとしながら、子機を充電器に降ろした。これで毎月三千円が助かる。
　今、最も頭の痛い問題はクルマだった。車検が間近に迫っていた。自動車税は、前回三万九千五百円を支払っていた。今の僕には、それは楽に一ヶ月分の食費を超える金額だった。車検となると、十数万円の出費は覚悟しなくてはならない。預金通帳の数字が頭の中でグルグル回る。
　ずざぁー、ずざぁー
　またもや体全体を覆い尽くすように雨音がかぶさってくる。一体、あと何ヶ月僕は生存できるのか？　そんな不安感が体の中に充満している。
　僕は毎月無料で配布されている、薄っぺらいタウン誌を手に取った。何ページかめくると、「クルマ」という囲み欄に目が止まった。
「あなたの愛車、高額買い取り！！　査定無料。お気軽にお電話ください」
　お気軽に電話がかけられる人になってみたかった。
　次の日曜日、アパートの駐車場まで、僕は車買い取り業者に来てもらった。整備士のツナギを着た業者の男性は、三十前後と思われた。目が細く小さく、スリムな体型だった。
「〇〇オートです」とにこやかな口調で名乗った男性は、僕にまず免許証を見せて欲しいと言った。
　僕は二つ折りの財布から免許証を抜き出して彼に見せた。免許証の写真と僕の顔をじっと見比べた後、
「ハイ結構です」と言って、彼はあっさり免許証を僕に返した。コピーは取らないようであった。
僕は自分の車を横目で見ながら、
「会社の車が自由に使えるので、今、この車ほとんど乗らないんです。それで、もう売ろうかなと思っているんですけど、見積もりしてもらえませんか？」
「あっ、そう言う事ですね」と彼は僕の言った事を、大して気にもかけない口調で、軽く受け流した。
　僕が金に困っている事も、すでにお見通しなのかもしれなかった。そう思うと、こじつけた理由を言った事が妙に恥ずかしかった。
「それじゃお車、拝見しますね」
　そう言って彼は僕からキーを受け取った。キーレスエントリーのスイッチを押してドアを開け、車のシートに座った。彼の油汚れのしみの付いたツナギが少し気になった。
「このお車、事故は、されてませんよね？」と彼は僕に確認する様に言った。
　僕は事故はしていないと伝えた。彼は車検証を見た後ボンネットを開けた。車体横に廻り込んで、エンジンルームの奥の方を覗き込む。それからボンネットの裏側を見る。更にはエンジンルームの左右、フェンダーのあたりをじっと見つめ、左右のヘッドライトのあたりを覗いていた。僕にとって少し自慢だった二〇〇〇ｃｃ五気筒エンジンには、何の興味も示していない

のが、その仕草から伺えた。その後彼は、地面に這いつくばって、前輪のすぐ後ろを覗きこんだ。何をしているのかよく分からなかったが、彼は軽くうんうんと頷いていた。
　再び運転席に座って、ウィンドーを開け閉めしたり、ワイパーを動かしたりしてみせた。それら一連の作業は手際良く進められ、澱みがなかった。最後にトランクを開けて、軽く指差す様にしながら、ぐるりと周りをチェックする。査定作業は終わったようであった。
　業者はあくまでも、僕の車をモノとして扱っていた。その行為は、自分が何年もつき合った女性の身体を、目の前で検査されているようであり、見ていて決して愉快なものではなかった。
僕は、彼女の様な車を、金に交換しようとしている自分に自己嫌悪した。
「お車はいつ頃、手放される予定ですか？」と業者は、何やら電話帳の様な資料集をめくりながら質問した。
「特に、いつとはきめてないんですけど。早くてもかまわないです」
　本当は出来るだけ早く現金化したいのだが、なるべくそんな素振りをみせたくはなかった。
「見積書ってもらえますか？」と僕は聞いた。
「実はお見積書は出さない事にしているんですよ。口頭でお伝えしてよろしいですかね」と業者は言った。
　彼の説明では、その見積書を持って、他の買い取り業者を何件もハシゴして回る客がいるらしい。自社のハンコを押した見積書が、競合他社の間を行ったり来たりする事は、好ましくない事なのだろう。
「もし、即日手放して頂けるなら、ウチもありがたいんですゥ。すぐ今週のオークションに出せますもんで。査定の方も少し色をつけさせてもらいますが」と彼は電卓を手にして、僕の目をチラッと見た。
　今、クルマと手を切らなければいけない事は分かっていた。部屋で引きこもっていても、タクシーの料金メーターのように、容赦なく税金や保険料はクルマに課金されていくのだ。
「そう言う事なら……そうですか。分かりました。即日で良いです」と僕は口ごもりながら答えた。
「ありがとうございます。じゃ通常四十万円のところ、四十五万円で買い取らせて頂きます」
　提示された金額についてはさほど驚かなかった。車の任意保険を最初に更新した時、その評価額を見た時の方が、よほど驚きだった。購入価格二百五十万円の半分程度に一気に下がっていたのだ。現金は二日後に銀行へ振り込むとの事だった。業者は僕の表情を見て元気づけようとするかの様に、
「まぁ、車種、グレード、車体色によって買い取りの標準っていうのが決められてまして。今日、お伝えした査定額は、それから比べても、色はついてるはずですので」と手もとの電話帳の様な冊子を見せて軽く叩きながら、にこやかな笑顔で言った。僕はただ無言で頷いた。
　その後、僕は二階の自分の部屋に上がり、業者と書類の手続をした。何枚かの書類に実印を押し、用意していた印鑑証明を彼に渡した。手渡された売買契約書には四十五万円の金額が記入されていた。車が、今一枚の紙切れに変わったのだ。
　再び下の駐車場に降りた。よく晴れた陽射しを浴びて、濃いブルーの車体がキラリと輝いていた。これはもう僕の所有する車ではないのだ。僕は住宅営業の日々を思い出した。いつもこの

車と一緒だった。それは戦友と言ってもよかった。
「それじゃ、お引き取りさせてもらいますんで。どうもありがとうございました」
そう言って買い取り業者は、遠慮なくシートに乗り込んだ。ツナギのポケットの黒ずんだ油汚れが見えた。そしてクルマのキーをひねった。いつも聞き慣れた、乾いたエンジン音が響いた。男性がオートマのシフトをＤに入れると、クルマは少し、ぶるんと震えた。クルマはゆっくりと動き始めた。駐車場の砂利をタイヤが静かに踏んでいく。愛する女性が去ってゆく時に似た、淋しさを感じた。そして男性は、クルマをどこかに連れ去っていってしまった。
　ついさっきまで、僕の愛車のエンジン音がここで聞こえていた。今はそれも嘘のように静まり返っていた。僕は空き地になってしまった自分の駐車スペースを眺めた。
　携帯電話もやめる事にした。固定電話は、インターネットのＡＤＳＬを利用しているのでやめようとは思わなかった。契約している携帯電話の販売店は、地下鉄のＨ駅前にあった。そこに行くには、名古屋鉄道で乗り換えなければならない。自分でもよく分からなかったが、夕方なら外へ出歩けたので駅へ向かう事にした。
　僕はヒゲを剃り、チェックの綿のシャツに着替えた。シャツの二の腕に鼻を押し付けてみた。少し油臭いように思えた。そのシャツは脱衣カゴへ放り込み、プラスチックの衣装ケースの中から、ストライプの綿のシャツを取り出して着替えた。その上から薄手のセーターを着て、フリースを羽織る。ジーンズをはいた。ジーンズは前に洗濯した時から、一回しかはいていないから、まだ臭わない。
　幾ら生活に困っているとはいえ、ホームレスのように思われるのはいやだった。何日も風呂に入ってない、酢えた臭いを発する様にはなりたくないと思った。外出する時は、身なりだけは、なるべく小ざっぱりしているように心がけていた。ヒゲも出来るだけ剃るようにしていた。
　アパートから出て五分程歩くと、名古屋鉄道の駅がある。ちょっと小便臭い改札で切符を買う。プラットホームで待っていると赤い鳥居色の電車が来た。電車に乗る事は、今の自分にとってひどく面倒な事で体が疲れる。あいにく、席は空いていなかった。僕は出入り口近くの手すりにつかまり、じっと目を閉じている。
　ガタン、ガタン、
　電車のレールの規則正しい音を聞きながら、僕は手すりにしがみつく。
　ガタン、ガタン
　自分の体に何十㎏もの砂袋がかぶさっているようだ。押し潰される様な感じを必死で耐える。その後、市営地下鉄に乗り換えた。
　地下鉄は意外に空いていた。僕はシートに座った。その時だった。電車に駆け込むようにして乗り込んできたのは、頭をスポーツ刈りにした青年だった。
　切羽詰まった感じだった。空いた座席にぴったりと吸い付くように座る。上体はピンと背筋を伸ばしている。何か、そうしなければ、罪に問われるかのような座り方だった。いきなり彼はつぶやき始めた。
「ミンミンミン、ミンミンミンミン……」
　彼は中空をじっとにらみ、口元は横に長くゆがんでいる。ちょうど、江戸時代の浮世絵に描か

れた歌舞伎役者みたいに、見栄を切っているかのようだった。
「ミンミンミ、ミンミン、ミンミンミンミン……」
　青年に寄り添う様にして、電車に乗ってきた男性がいる。見たところ五十歳前後だ。黒っぽいバックパックを背負って、茶色のキャップを目深に被っている。
　男性は、青年が座っている座席の前で、見守るように付き添って立っている。突然座っていた青年が、男性の脇をすり抜け、電車の床に腹這いになった。
「う〜〜っ。う〜〜」
　青年は腹這いになりながら、かなり大きな声で唸っていた。車内の乗客は皆、いっせいに彼の行動に注目した。そして次の瞬間、今、見た事は何もなかった事にしておこうという風に、それぞれ読書を続けたり、携帯電話のメール打ちを続けたり、あるいはゲーム機のディスプレイに目をやったりしていた。
「ほら、ちゃんと、座って。そんな大きい声、出したらダメでしょ」
　青年の前に立っていた、保護者らしいその男性は、そう言って青年を抱きかかえるようにして、もう一度座席に座らせた。青年はそれでも低いうなり声を発し、すぐまた、
「ミンミンミン、ミンミンミンミン」を始める。保護者の男性と青年は、二つ先の駅で降りた。
　僕はなぜかポケットの中の手帳を触った。そして他の人から見られていない事を確かめるように、ポケットからほんの少し手帳を出し、すぐにまたグッと押し付けるようにポケットにしまい込んだ。
　僕はひとつ先のＨ駅で降りた。改札出口へ向かいながらポケットから手帳を出す。一瞬、緑色のカバーに印刷された金色の「障害者手帳」の文字がキラリと光ったように見えた。僕は左手のなかに手帳を隠すように持つ。右手でカバーの中から、福祉特別乗車証を取り出す。
　大きな赤い文字で「有効期限Ｘ月Ｘ日」と書かれたその磁気カードを、自動改札機へ差し込む。カードは瞬く間に機械の中を通り、取出し口から再び姿を現す。僕はその大きな赤い文字が目立つカードを、素早く引き抜き改札を出る。そして磁気カードを、左手の中の手帳カバーの中へ挟み込み、素早くポケットに収めた。

地下鉄の改札口から地上に出ると、すぐ近くに携帯ショップがある。ショールームの中をのぞくと、客はいないようだった。僕はちょっと安堵して、店の正面入り口に立った。ガラスの両開きの自動ドアがすーっと開いた。
「いらっしゃいませー！！」
三人の女性スタッフが一斉に立ち上がって僕に声をかけた。その元気な声に、僕はたじろいで、後ろへ後ずさりしそうになった。
真っ白なカウンターの、出入り口に一番近い席に座った。かわいらしい小柄な女性スタッフが対応してくれた。首には鮮やかなブルーのスカーフを巻いていた。僕は彼女に携帯電話の解約をしたいと伝えた。
「他の機種へのご変更ですか？」
彼女はにこやかに対応した。
「いや、携帯電話そのものを使わなくなったので、解約したいんですよ」
携帯電話の料金を払う事が出来ない、それほど生活に困っていると思われるのは、異常に恥ずかしく、顔が赤くなる思いがした。僕は自分のソニー製携帯電話を、白いカウンターの上に置いた。所々傷はついているが、まだメタリック・レッドのシャープな色合いは褪せてはいない。右手で彼女の方に押しやった。左手は膝の上で握りこぶしを握っていた。
「では、少々お待ちください」
そう言って、華奢な体つきの女性スタッフは奥の控え室へ入った。再び現れると、何か長方形のブロックの様なものを、両手で抱えて持って来た。
カウンターに置かれた、その横長の立方体の右端には、ちょうど携帯電話をはさみ込める幅の、窪みがつくってある。立方体の上面には、中央から左側へスリットが空いている。その溝の中から、Ｌ字を右回りに九十度回転させた形で、レバーが突き出ていた。その先はブロック本体と水平になっていて、ゴルフクラブのグリップの様なものがついていた。
彼女は僕の携帯電話を、その道具の窪みにセットした。窪みの中心部には、ロケットの先端の様な金具の頭が見えていた。
「では、アマミヤ様の個人情報などの流用を防ぐ措置と致しまして、携帯電話本体を処分させていただきます」
そう言うと女性スタッフは、細い腕でそのレバーを、エイっとばかりに上に引き上げた。その動きに連動して、窪みの中の金具は勃起したペニスのように、携帯電話を貫いた。
「バチンッ」
鈍い音と共に携帯電話に大きな穴がポッカリとあいた。
「これで処分は終わりました」
彼女はニッコリと僕に微笑んだ。
正月、僕は神戸へ帰らなかった。ただ一人、繭の中に入り込んだ様に閉じこもって過ごした。年明けからまるで坂を転がる様に、という表現がぴったりな程、僕の生活は急ピッチで危険な領域へ入り込みつつあった。預金通帳残高が、五十万円を割り込んだのは二月中旬だった。家賃の安いアパートへ代わるにしても、引っ越し費用等を考えると、すぐにでも結論を出さなければいけなかった。一番嫌な事だったが、兄に相談してみる、ということが妥当な結論だった。夜に神

戸の実家へ電話をかけた。
「もしもし、ああ、ユキトか？」と兄がいつもの、にこやかな、人の良さそうな口調で電話に出る。
「元気にしとるんか？」という兄の柔らかな声に、肉親という感覚が数百キロもの電話線を通して、僕の五感を刺激した。
「うん、なんとか生きとるけどな」と僕は口ごもった。ここは率直に僕の経済状態を話した方がいいだろうと思った。
「実は、貯金が五十万円を割り込んだんや。正直、生活は、このままやったら苦しいわ」
「うん、うん。」
「まだ、僕の神経の方も、とても仕事が出来る状態と違うねん」
「そうか」
「恥ずかしいんやけど」
　これだけは言いたくなかった。だが思い切って兄に告げた。
「アカンわ。ギブアップや。恥ずかしいけどな」
　今までどんな事があっても、兄に迷惑をかけないでおこうと固く心に誓ってきた。それをつっかえ棒の様にして踏ん張ってきた。かつての僕が、兄に対して行った数々の迷惑行為。それを思うと、自分が生存している事自体が罪であるかの様に思えるのだ。
　学生の頃、付き合っていた女の子と居酒屋で飲んでいた。僕は酒の力を借りて彼女に告白した。好きだと伝えた。しかし酒をあおりすぎてしまい、あろう事か、僕はほとんど意識不明になってしまった事がある。その時は店員が、僕が持っていた手帳の住所から、兄に電話をかけた。
　兄はその頃マイカーを持っておらず、自宅に仕事先から持って帰ってきていたトラックで、僕と彼女の二人を居酒屋まで迎えに来てくれた。
　その時の事を思うと今でもワッと顔を隠したくなる程恥ずかしかった。
　僕がかつて自殺未遂をした時も真っ先に駆けつけてくれたのは兄だった。その兄に、自分の力で生きてみせると意気がって住宅業界へ転職したのに、このザマなのだ。そして今僕はついにギブアップ宣言をするはめになった。もう、自分の力ではどうにもならない。ゲームオーバーだと思えた。
「それで、どないするつもりなんや？」と兄は訊いた。
「もし、出来るんやったら、兄貴の所に一緒に住む訳にはいかんやろか？　本当に申し訳ないとは思うんやけど」
　兄の家には今、父が一緒に住んでいる。父は胃潰瘍で一時入院した。もともと気難しく極度に神経質な所がある父だった。その後、食事はおかゆでないと食べない様になった。脂っこいものもダメだった。だから義姉はいつも父だけは別メニューで食事を作っていた。
　夫として、妻にそう言った苦労をさせていると言う意識が兄にはある事を、僕は以前から感じ取っていた。もしこの上、僕が兄の家に転がり込むことになったら、また義姉の苦労も増える事に違いない。ただ、娘はすでに結婚していたので、彼女が使っていた部屋が一部屋空いているのを僕は知っていた。そこに住まわせてもらえないかと、都合のいい事を考えていたのだ。

「一緒に住むいうのはなぁ」と兄は言葉をいったん区切り、キッパリと言った。
「それはあかん」
　僕は冷静に兄の決断を聞いた。僕は落胆し言葉も出なかった。なぜかこうなる事は予想していた。兄は静かに僕に言った。
「一緒に住む、いうのは無理や。オレはお前の事をなんぼでも助けたるつもりや。ただなぁ、それはユキトがなんとか自分で暮らしてゆけるという目処が立った時やなぁ」
　僕は兄の言葉を静かに聞いた。そこには特に悲しいとか、淋しいとか言う感情もなかった。ただ、諦めるしかないと言う現実を、突きつけられた気がしていた。
　僕がこの病気の事を兄に知らせたのは、会社を辞めてすぐの事だ。僕の担当医の診断書のコピー、それに「うつ病患者への接し方」と言うパンフレットを同封して、兄の家に郵送した。
　ほんの少しでいい。この病気の事、僕がいま、どういう状態にあるのかを知ってほしいと言う願いがあった。
　うつ病は外からは全く健常者と見分けがつかないのだ。
　身体障害者なら外観ですぐにそれと見分けがつく。しかし、うつ病患者は四六時中寝ているだけ、ただ、怠けているだけにしか見えない。それが、やりきれない無理解を生む。
「お前はなぜもっとがんばれないのだ？」という巨大な世間からの問いかけ。
「そんなもの、気分の持ち様だ」とか、最悪の場合は、
「昔から言うだろ、弁当と病気は自分持ちだ」とさえ平気で言ってのける世間。
「皆、苦労して仕事で汗を流し、金を稼いでいるのだ。それなのになぜお前はそんな当たり前の事が出来ないのだ」と糾弾する世間。兄もやはりそう言う「真っ当な」世間の一構成員なのだ。反論する力もない、うつ病患者には逃げる事しか出来ない。
「なんで逃げるんだ。現実と立ち向かえ」と世間からは、更なる無形の石つぶてが激しく浴びせかけられる。
　その世間と言う勢力の中に、兄も加わっている。やはり、少しでも理解してほしいと言う切ない思いは、兄に届いてはいないのだ。おそらくそれは、パンフレットを読んでも、不思議な病気だと奇異に見られるだけの事なのだろう。もしかすると字を読むのが苦手な兄は、全くパンフレットなど読まなかったのかもしれない。
　僕は遠慮がちにＳＯＳを出していた。しかしそれは兄にとってはＳＯＳに見えなかったのかもしれなかった。
「なんとか自分で暮らしてゆけると言う目処が立った時」という兄の言葉。それは、荒波の中で自力で救命ボートを降ろせ、それを自力で漕いで無事に岸にたどり着いてみせろ、その時には毛布でも暖かいスープでもくれてやる、と言っているのだ。僕は全く孤立無縁となった事を心に刻んだ。
　これで僕の住む部屋は難破船となった。僕はある映画を思い出した。「アポロ１３」という映画だ。
　それはかつて人が月へ旅行するという、アメリカの宇宙開発史上、栄光の絶頂期にあった時に起こった出来事である。
　アポロ十三号は宇宙空間で爆発事故を起こしてしまった。電気と酸素を失い、地球への帰還は

絶望視された。だがアポロ十三号には、たくましさと、楽天さと、技能に抜きん出た、選ばれた宇宙飛行士が三人乗り込んでいた。そして地球上では、天才秀才をかき集めた技術集団、ＮＡＳＡが待っていてくれた。彼らは文字通り不眠不休で、三人の宇宙飛行士の帰還という奇跡を成し遂げた。

だが僕の場合、何の間違いか、たったひとりでアポロ十三号に乗り込んでしまったのだ。おまけに、地球上で援助してくれるはずのＮＡＳＡには、誰一人待っていてくれないのだ。

壊れた宇宙船をたったひとりで操り、地球に帰還する。一体そんな事が可能なのか？　そして刻一刻と僕の宇宙船は預金残高と言う酸素を失っている。

兄の電話で分かった事は、もうどこからも救命ボートは来ないという事だった。

一体、後どれぐらい自分は生存していられるのだろうか？

預金通帳を眺めてみる。資金的には、とりあえず今日はまだ生きていていいのだ。

ずざぁー

いつもの雨音が、僕の心も体も覆い尽くす様に包み込んでいる。

うつ病患者の多くは死にたいと言う願望があると言う。僕の場合それはほとんどなかった。ただ、生きていたいと言う積極的な気持ちはまるでなかった。出来れば、消しゴムで消せる文字の様に、あるいは風に吹かれたひと掴みの砂の様に、サラサラと消えてしまいたいとは思っていた。だから自分がたとえ誰からも救われなくても、それはそれで、しょうがない事だと思っていた。もはや自分は、助けるに値する人間なのだろうか、とぼんやりした頭で思う。

ずざぁー、ずざぁー

いっそう濃密な雨音が僕を包み込む。僕は半ば諦めに近い心境で、自分が消えてゆく事を待ち望んだ。何をどう考えようとしても、同じ思考回路を、雨音と共にぐるぐる回っているだけだった。僕の宇宙船は行くあても分からず、しかし、着実に宇宙空間を破滅に向かって、滑らかに航行していた。

このような日々の生活の中、僕の心の波長になじむのは、なぜか戦争を記録したドキュメンタリー番組や戦争映画だった。

ある日の夜、僕は百円ショップで買って来たスパゲティーをゆで、これも百円ショップで買って来たカルボナーラソースをかけて食べた。特にうまいものを食べたいと思う事はなかった。ただ経済的に安いものであって、とりあえずの空腹を満たすものであれば、何でもよかったのだ。僕の日々の食事はいつもそんな風だった。

食後はごろんと横になってテレビでＤＶＤを観る。レンタルビデオ店で借りて来た映画は「プライベート・ライアン」だった。

映画の冒頭三十分程は、第二次大戦の連合軍ノルマンディ上陸作戦の様子が克明に描かれている。テレビの画面では、フランスの海岸に上陸しようとする、アメリカ軍兵士たちが映されている。僕は横になってぼんやりとそれを眺める。

画面では激しい銃撃戦が描かれる。上陸用舟艇の前の扉が開いた瞬間、その時を狙いすました様に、ドイツ軍の機関銃弾が容赦なく打ち込まれる。次々になぎ倒されてゆく兵士たち。いともあっけなく、消去されてゆく命。

彼ら一人一人は、きっと故郷に家族や恋人を残し、この船に乗る事になったのだろう。たま

たま、このフランス、ノルマンディー海岸、それもオマハビーチと呼ばれる地域に、自分が配置された事によって、彼らは命を失ってゆくのだ。あるいは、ドイツ軍機関銃手の引き金を引くタイミングと、自分が乗った上陸用舟艇の前の扉が開く、そのタイミングが合ってしまったために、頭を打ち抜かれ、腹や胸を打ち抜かれ、あっという間にこの世での一生を終えていくのである。

ほんの偶然で人は殺され、ほんの偶然によって、人は生きる事を許されている様な気がした。

寝転がって、その最後の審判の状況をただ眺めている僕。

画面では殺戮の限りが尽くされている。砲弾が炸裂し、兵士は体を真っ二つに裂かれ、別の兵士は腹から腸がはみ出し、泣き叫んでいる。僕はそれをただ眺める。目の前で起きている死の惨劇と、自分の身に起きている、ゆっくりとした自己の消滅。

何かどちらも儚く、命は塵の様に軽く、取るに足らないものである事が、僕には不思議な事に、安らぎとさえ感じられたのだ。

僕の心はとても穏やかで、心地よいものだった。画面上で死んでいった数々の兵士たちのそれぞれの生い立ちや、それぞれ一人一人が抱えているドラマの重み。幾千もの小説に匹敵するであろう生の証は、たった一発の銃弾によって、全て強制終了させられるのだ。

僕はそれを眺め、コタツの上のコーヒーを飲み、お徳用バウムクーヘンの一つを口にほおばる。これは一袋三百四十八円だった。これは取るに足らない事。そして画面上で起きている殺戮劇もまた、僕にとって取るに足らない事に違いなかった。

宇宙空間を漂う僕のアパートの一室から、暗く静かな星空へ、激しい銃撃戦の音が吸い込まれてゆく。

殺戮の画面をぼんやりと眺めながら僕は、少し頭がずきずきするのを感じた。やがてその痛みが徐々に強くなって来た。明らかな頭痛に変わってゆく。寝転がっていた体を少し起こした時に、頭にズキンと痛みが走った。

今日、何か痛んでいるものでも食べたのかな、と思った。胃のあたりがむかついてくる。頭痛が強まるのと共に、胃液が逆流してくる量が増えてきた。酸っぱい胃液が口の中に充満する様になると、さすがに我慢が出来なかった。口を抑えてトイレに駆け込んだ。トイレの便座を上にはね上げるのが早いか、僕はすぐ便器に顔を突っ込む様にして吐いた。
これで少しは楽になるはずだ。

そう思ったが頭の痛みは更に増して来ていた。そしてもっと強烈な吐き気が襲って来た。もう一度便器に頭を突っ込んで吐いた。
「おえぇぇぇぇーっ！！」

それは獣の叫び声に似ていた。ぼくという人間が、動物の一種である事を思い出たせた。頭の中は鐘が鳴り響くかのようだ。何か自分の頭の中で、異常な事が起こっている事は確かだった。

僕はうめき、叫び続けていた。もう胃の中には何も吐くものがない。それでも激しい頭痛は続いている。そして吐き気は間断なく襲ってくる。口から胃袋が飛び出しそうな程、胃液だけを吐き続けた。下半身には全く力が入らなくなった。僕はそのまま床に倒れた。頭はまだガンガンし

ている。
「救急車を」と思った。
　とにかくこれは非常事態だ。なんとかして救急車を呼ばなければと思った。しかし再び強烈な吐き気が襲う。床に倒れたまま、何も吐くものがないのに、それでも吐き続ける。床に転がりのたうち回った。
ー　Ｓ・Ｏ・Ｓ　ー
ー　助けてくれ　ー

意識がもうろうとして来た。ただ助かりたいとだけ思った。床に倒れた状態のまま、壁際に置いてある三段ボックスの上を見た。ファックス一体型電話機の横に、充電器にセットされた子機が並んでおいてある。
ーあれで救急車を呼ぼうー
立ち上がろうとした。だが僕の体は床から一センチも持ち上がらない。力が全く入らないのだ。あの受話器さえ取れればと思った。這いずりながら少しずつ電話に近づいた。上体を持ち上げようとする。しかし出来ない。受話器まではわずか一メートル程だ。それが何キロも先にある様に感じる。手を伸ばして受話器をつかもうとする。だが僕の手は空しく空気をつかむだけだ。受話器に届かない。
ーあの受話器に手が届けば助かるー
そう思った。体を少しずつ三段ボックスににじり寄せる。力を振り絞った。上体だけを必死に伸ばす。手の先にかすかに触れるものがあった。受話器を充電するホルダーだ。少し震える手を更に伸ばす。
あと一センチ。
充電器に置かれた受話器に、手のひらが触れた。そのまま受話器を握った。受話器を両手で抱きかかえた。次の瞬間、僕は再び床に崩れ落ちた。
ーこれで助かるー
安堵感でホッと緊張が和らいだ。僕は受話器を抱いたまま、しばらく床の上で横になっていた。目を開けるのも辛い程、激しい頭痛はまだ続いている。吐き気は幾分ましになっている。もう内蔵も全て吐き出してしまったかのようだった。
倒れたままの状態で瞼に力を入れた。薄目を開けて受話器を見た。右手の指先を受話器に近づける。ゆっくりと数字のボタンを押す。
一、一、九、
そして通話ボタンを押した。すぐに受話器のスピーカーから、かすかな声が聞こえた。床に倒れ込んだ体を、横から仰向けにする。受話器をもちあげる力がほとんどなかった。受話器がバーベルの様に重く感じる。
「もしもーし、もしもーし……」
スピーカーからは呼びかける声が続いている。僕は受話器を力を入れて持ち直す。左耳に受話器を当てた。
「どうされましたー？　大丈夫ですかー？」
「……救急車を……」
僕はかすかな声で伝えた。
「住所は言えますか？」
「＊＊区＊＊町＊＊」
僕がゆっくりと住所とアパートの部屋の番号を言う。そのほんの数秒あとだった。アパートから歩いて五分ぐらいのところに、消防署がある。そこの救急車がサイレンを鳴らしたのが、かすかに聞こえた。サイレンの音はアパートに近づいてくる。
初めは小さなサイレンの音が徐々に大きくなり、アパートのすぐ前でその音量は最大になった

。そして音源は停止した。
　しばらくすると、カツンカツンと急ぎ足で階段を登ってくる、複数の足音が聞こえた。ドアをガチャリとひねる音がする。だがドアにはロックが掛けてあった。やがて救急隊員たちがドアを叩いた。
「もしもーし！！」
ードンドンドンー
「ドアを開けられますかー？」
ードンドンドンー
　中にいる僕を励ましてくれた。
　助けてもらうには、僕はもう一度立ち上がり、ドアのロックを解除する必要があった。僕は再び、そろり、そろり、と体を動かした。床を這いずりながらドアの方向を目指す。まだ激しい頭痛は続いている。目はうっすらしか開ける事が出来ない。ほとんど段差のないアパートの玄関口。脱ぎ捨てられているスニーカーに手が触った。力を振り絞って上体を起こす。まだドンドンと救急隊員は、扉を叩いてくれている。
　このロックを外せば助かるのだ。扉一枚向こうの世界には、救いの手が差し伸べられているのだ。
　向こうの世界に行きたいと思った。僕はドアのノブに両手を掛けて上体を起こし、次に左手でドアロックを解除した。
ーカチャリー
ー助かったー
　そのまま玄関の靴の上に倒れ込んだ。救急隊がドアを開けて入ってくるのが分かった。僕はもう力を使い果たし、ぐったりと倒れたままだった。目も開けられない。入って来た隊員は、僕の横で担架を広げているらしい。別の隊員は、床に転がっていた通話状態のままの受話器で、何かひと言喋り、充電器のところへ戻した。
「この人、どうやって電話して来たんだ？」と呆れた様に言う隊員の声が聞こえる。
「もしもーし、分かりますか？」
　そばで呼びかける隊員の声に、僕はかすかにうんと頷く。
「どうされました？　ずいぶん吐かれました？」
「……うん、アタマが……頭がいたい……」
「頭が痛いんですね。分かりました」
「保険証はどこにありますか？」と隊員が続けて聞く。
ーこんな緊急事態の時にも、ご丁寧に保険証を探すのか？　ー
　僕はぐったりと目を閉じながら呆れていた。僕は奥の部屋の方を力なく指さす。隊員が僕の財布を見つけて持って来た。
「これでいいですか？　これに入ってるんですね？」と隊員が確認する。めんどくさい事だ、と思いながら、うん、うん、と頷く。
　そのやりとりと平行する様に、僕の指先に測定器具を取り付けようとする隊員がつぶやく。

「うわっ、この人、ツメ、噛んでる！」
　恥ずかしかった。僕には爪を噛む癖がある。不思議な事に、昼間、人前では絶対に爪を噛む事はない。ところが夜、寝ている間に無意識に爪や指先を齧っている事があるのだ。この数日間、爪を噛むには絶好の伸び具合になっていた。結局、昨日の夜、むしる様にして爪や指先を噛んでしまっていたのだ。爪はギザギザ、指先の肉の部分も齧られて凸凹になっている。しかし僕には、抵抗して指先を隠す力も出てこなかった。全て隊員にされるがままになっていた。
　僕は担架の上に載せられた。やがて自分が持ち上げられている感覚があった。僕の胸の上には、保険証の入った財布が置かれている。アパートの外へ運びだされたらしかった。目を閉じたままだったが、救急車の赤色灯が回転しているらしい。定期的に赤い光が、瞼の上を通り過ぎるのが分かった。階段をゆっくりと降ろされ、僕は救急車の中へ入った。隊員がどこかへ僕の症状を連絡している。
「エー、頭痛と激しい嘔吐」
　その後隊員が僕に向かって話しかけた。
「最悪、アタマ、開けますからね」
　もうどうにでもしてくれと思った。僕は力なくウンと頷いた。救急車がいつ動き出したのか、どれぐらい走ったのかもほとんど分からなかった。やがて車が止まり、そこが病院のようだった。何人かの人達が、僕の周りで何らかの処置を施しているようだった。
ー助かったんだー
　ホッとした。
　その後の僕の記憶は途切れた。
　目を覚ますと頭痛はすっかり収まっていた。天井には、青白い蛍光灯の光が反射している。その天井を見上げていると、その模様から、使われているのはダイニッケンの不燃天井材である事に気がついた。そこへ女性医師と看護士が来て、僕に話しかけた。
「アマミヤさんですね。血液検査の結果なんですが、カリウムが異常に下がっているので点滴を今からしますね。これは嘔吐によるものと思われます」
　お手洗いはよろしいですか？　と尋ねながら、看護士が点滴の用意をした。スタンドに点滴の袋を吊り下げ、僕の腕にそろりと針を刺す。さほど痛くはなかった。点滴の早さを調節したあとで、看護士と女性医師は、慌ただしく別室へ向かって行った。
　一滴、一滴落ちる点滴が、天井からの光を透かして美しく光る。
　結局僕は、頭を開ける事は免れた。でもあの激しい頭痛は一体なんだったのだろう。あっけない程に、平穏無事な体に戻った様な気がした。
　嘔吐によって自分の頭髪がからまり、服も多少汚れていたのが分かった。自分がスウェットの上下を着ていたのだという事も、改めて気づいた。ベッドの下を見ると僕のサンダルがある。救急隊員が、僕と一緒にアパートから運んでくれていたのだろう。
　点滴が済むと、僕はベッドの上で上体を起こした。少しふらつくが、立って歩く事は出来るようだ。深夜会計窓口に行き、治療費を精算した。生活費を二万円程銀行から引き出したばかりだったので、無事に支払えたのはラッキーだった。改めて病院を見回すと、ここがこの地域では、有名な大学病院である事が分かった。病院の外に出てみると、少し空気が冷たく感じられた。

会計窓口のすぐ外にタクシー乗り場があった。ちょうど黒塗りのタクシーが一台停まっていた。このような大きな大学病院では、深夜でもタクシーを利用する人がいるらしい。料金が多少気になったが、とにかく帰ろうと思った。僕は絡まり跳ね上がった髪の毛と、スウェットの上下を着たまま、そのタクシーの白いカバーのかかった後部座席に乗り込んだ。しんと静まり返った夜の道を走り、タクシーは僕のアパートへ向かった。

朝、目をさますと、閉じたカーテンの隙間から、ほのかな朝の光が見えた。体を動かそうとしてみるが、鉛の様に重く、ほとんど動かない。ロングタイプと呼ばれる効き目の長い誘眠剤が、まだ効いているのだ。そのまま再び眠った。目覚めてみれば、いつもの通り午前十一時だ。あの嘔吐事件から一週間が経っていた。僕の生活は平穏を取り戻していた。

この日も午後から近所の公園に出かけた。名古屋市は平坦な土地が多いのだが、僕が住んでいるあたりは、珍しく丘陵地帯で坂道がある。以前の会社を辞めた後も、ずっとここに住み続けているのは、故郷、神戸に似て、坂道のある街というところが気に入っているからなのだ。

アパートの前から東へ下る坂道がある。二百メートルも下っていけば、その左手に公園がある。野球のグラウンドが一面。隣接してテニスコートが二面。それに池の周りの遊歩道もある。小振りながら比較的整備された公園である。

足が弱っていた僕は、リハビリもかねて一日に一回、この公園の遊歩道を歩く事にしたのだ。効き目のきつい誘眠剤のせいで、この半年間というもの、午前中はいつも寝たきり状態が続いていた。これでは足も弱るはずだ。

池の周りの遊歩道をゆっくり歩く。少し足がガクガクする。これではまるで老人のようだ。昨日の雨で土の遊歩道はぬかるみ、水たまりも出来ている。

穏やかな平日の午後二時頃、こんな時に公園を散歩しているのは、決まって乳母車を押している、背中の曲がったおばあちゃんか、おじいちゃんだ。中年男たちも、何人か公園の周りを黙々と歩いている。

僕と同じ様な目的なのだろうか。皆、決して晴れ晴れとした顔はしていない。彼らもそれなりの理由があって、こんな時間に公園をただ、歩くために歩いているのだろう。

ランニングしている女性たちも何人か見かける。白いキャップをかぶり、長い髪を後ろに束ね、腕を綺麗に振っている。一歩、足を前に出すごとに、束ねた後ろ髪がリズミカルに揺れる。その揺れ方が、いかにも生活をエンジョイしている、生命力に溢れているかのような印象を受けた。明らかに彼女たちは公園の中で、下を向いてとぼとぼ歩いている、僕や他の中年男達より幸せそうだ。

この半年間で、体重は十キロ程度落ちていた。だから体は軽いのだけれども、それは足の筋肉も落ちているということだった。そんな老人の様に細くなった足で、公園を歩きながら、ふと僕に将来なんかあるのだろうか？　と不安になる。でも歩くのは将来のためだ。まだ見えてこぬ将来のために体を慣らしておかねば、と思った。

水たまりを気にしながら下を向いて歩いていると、地味な緑の幅広の葉が目の前に現れた。

その葉は地面に這いつくばる様に茂っている。どう見てもただの雑草のようだ。その葉の根元から、一本の茎がスラリと伸びていた。その高さは人の胸ぐらいまであった。同じ様な茎が、他の横たわった葉の中心から何本も伸びていた。

その茎の先端に花が咲いていた。
花はちょうど線香花火の火を、上に向けたような形である。花の色は白っぽい。瑞々しく清楚で可憐だった。よく見ると白に近い空色もあれば、空色に近い紫色もある。いくつもの細長い花びらの、ひとつひとつが、まっすぐ天空を目指すように咲いていた。僕はその花の美しさに見とれた。花の前には白いペンキで塗られた木の札が、地面に刺してあった。黒いペンキで文字が書かれてあった。
「アガパンサス」
僕はその一文字一文字をつぶやいた。
「アガパンサス」
この草の名前を忘れずにいよう。僕はそう思った。
散歩を終えて、そろそろアパートへ戻ろうとした時だった。不思議な事に気がついた。
雨音が聞こえないのだ。
いつも僕の頭と体を、すっぽりと包み込む様に覆っていた、しつこい雨音。何かを考えたり、なにか行動を起こそうとすると、必ずまとわりついていた雨音。
心に雨が降るとき、僕は傘をさしかけた。雨音は傘を容赦なく叩く。いつも降り続く雨粒の音。それは昨年の九月頃からずっと続いていた。抗うつ剤を飲んだ。誘眠剤を飲んだ。これでもう雨は止むだろうと思った。しかし、一ヶ月経っても二ヶ月経っても、雨は止まなかった。ついには雨音がしている事が当たり前のようになって来た。僕の感覚器官は麻痺し始めていた。
クリスマスも雨、正月も雨。もうやめてくれと、悲鳴を上げても雨音は続いていた。春が来ても雨は降り止まない。半年以上、雨音にどっぷりと浸かり、諦めかけていたとき、あの激しい嘔吐が起こった。そして今、僕の頭の中は変化を起こし始めていた。どんよりとした、低い雲は立ちこめているものの、明らかに雨が止んでいたのだ。十ヶ月もの間、僕を悩ませ続けた雨音はついに消えた。
心はしんと静かだった。
ー音がしないってこんな感じなんだー
僕は忘れかけていた、平和な静寂の世界を味わった。僕は顔を上げ、ゆっくりとアパートへの坂道を登った。
夜、食事を終え、僕はキッチンで皿を洗った。スポンジにたっぷりと洗剤をかけていたのでよく泡立っていた。皿の油汚れを、そのスポンジの泡でごしごし洗った。
その時なぜだか僕は泣いた。
目には涙が溢れた。
洗剤の泡がついた皿を両手で持ったまま、僕は床にへたり込んだ。全ての体の緊張が解けたようだった。こんな状態を放下と呼ぶのだろうか。もしかすると、そうかもしれなかった。僕は確かに泣いていた。
この十ヶ月あまり、苦しい時、悲しい時、淋しい時、僕は泣こうと努力した。涙は全ての辛さを洗い流してくれるはずだ。思いっきり泣けば、きっとスッキリと立ち直れるはずだと思った。しかし僕の涙腺は、僕の意志通りに作動してはくれなかった。幾ら「泣け！」と命じても、一滴

の涙の粒も出してはくれなかった。僕の体は、頑ななまでに涙を流す事を拒んだのだ。
　なぜだ？
　なぜ涙を流す事さえ許されないのだ？
　これが、うつ病に冒される、ということなのか。しかし今、僕は泣けていた。泣く事がようやく出来る様になったのだ。僕のふたつの目からは、潤沢な涙の粒が溢れていた。その液体は頬を伝わり、キッチンの床にぽたぽたと落ちてゆく。
　うれしかった。
　素直に自分の体が、心に反応している事がうれしかった。
　自分はうつ病を生きた。生き抜いた。
　しかしこれからは、うつ病と言う病を抱えた自分の人生を「生きて行く」のだと思った。
　たったひとりのアパートの一室。アポロ十三号の様なその空間の中で、僕は両手を天井に向かって思いっきり突き上げた。
「やった。生きている！」
　漆黒の宇宙空間。たったひとりのアポロ十三号の中で、僕はぶざまにガッツポーズを繰り返していた。　（了）

～あとがき～

一生のうち一冊で良い。自分の作品と呼べる本を書いてみたいと思ってきました。それはどのような形でも良かったのです。

この本は私のうつ病の実体験を元に書かれていますが、単に闘病記としなかったのは、登場人物達を生き生きと描きたいという想いが強くなったためです。そのため小説というスタイルをとって描いてみました。また、あえて、主人公を経済的に過酷な状況になる様設定致しました。実際には退職後に、傷病手当金等の制度もある事を付け加えさせて頂きます。

この作品に登場する人物、団体は全て架空のものであり、あくまで私が作り出したフィクションです。

作品を書き上げてみて、これは私の遺言代わりであるとおもっています。

ただ、遺言というのは毎年更新するものだ、と友人から聞きまして、もしかしたら来年また新しい遺言代わりの作品を書いているかもしれません。

今もなお、昼間でも真っ暗な闇の中を、手探りでさまよい続けている、精神疾患を煩っておられる多くの方に共感とエールを送りたいと思います。

最後に私に小説を書く事を強く勧めてくれた友人達、そして私がどん底で落ち込んでいるとき、支えてくれたネットの仲間たちに心から御礼申し上げます。

たったひとりのアポロ１３

http://p.booklog.jp/book/23438

著者 : 天見谷行人
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/23438

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/23438